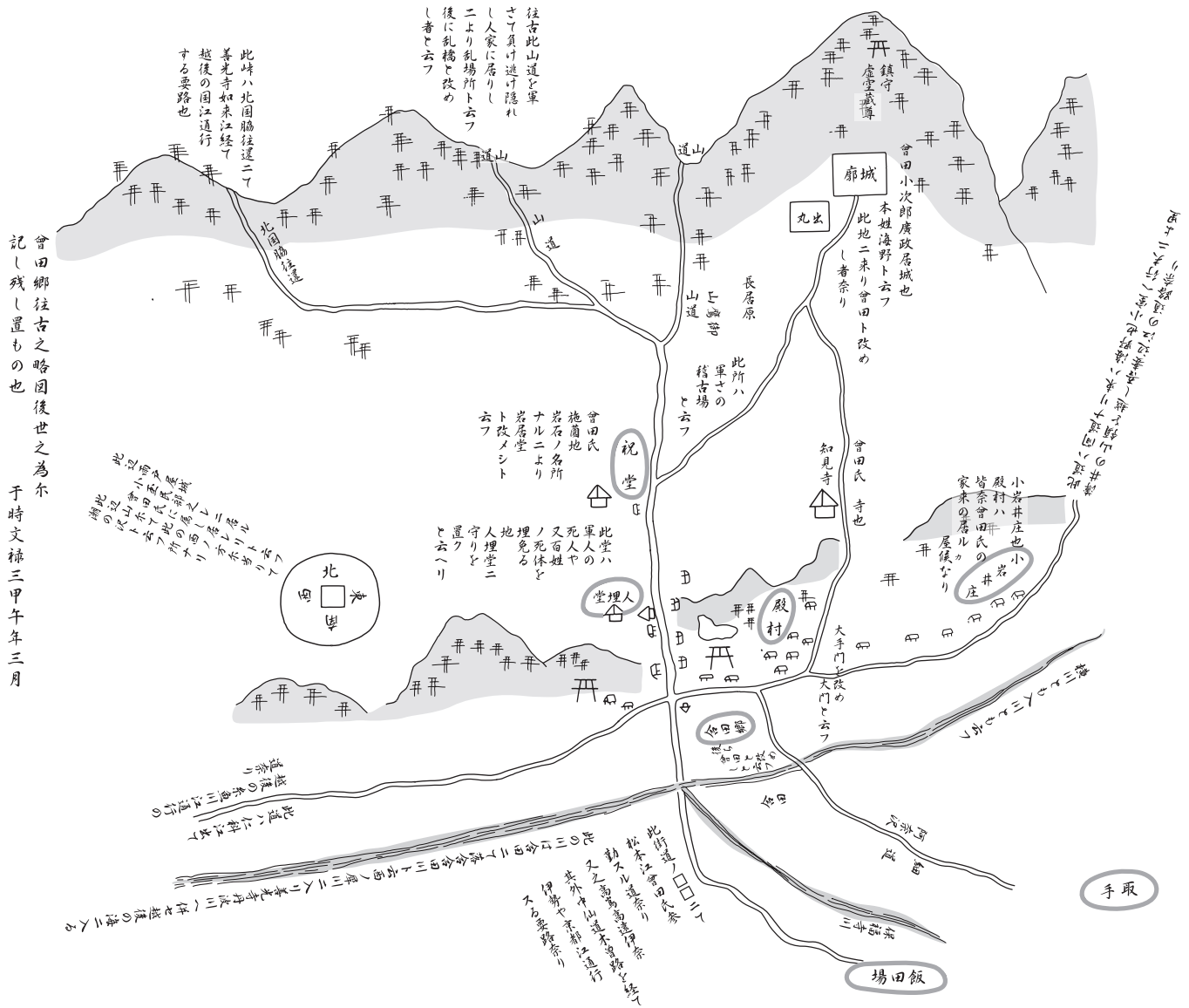


長野県松本市

殿村遺跡

—第5次発掘調査報告書—



2015.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成 25 年度殿村遺跡調査事業に係る殿村遺跡第 5 次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成まで、一連の作業は平成 25・26 年度国庫補助事業として実施し、現地における発掘調査は平成 25 年 9 月 24 日から平成 26 年 1 月 16 日まで実施した。
- 3 本書の執筆は以下の分担で行った。
第Ⅱ章第 2 節 1：伊藤 愛、同 第 3 節 2：原田健司、同 3：宮島義和、その他：竹原 学
- 4 本書作成に係る作業分担は以下のとおりである。
遺物実測 焼物：竹内直美、石器：原田健司、木製品：荒井留美子、拓本：中澤温子・洞沢文江
写真撮影 伊藤 愛・福沢佳典・宮島義和（遺構）、宮嶋洋一（遺物）
DTP 挿図トレース・レイアウト：伊藤 愛（遺構・焼物・木製品）・原田健司（石器）
写真図版作成：白鳥文彦（石器）、伊藤 愛（その他）
版組全般：伊藤 愛
- 5 本書の中で使用した遺構の略称等は、以下のとおりである。
土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝
- 6 時代区分の表記のうち「縄文時代」については、松本市文化財調査報告書の記述方針に従い、「縄紋時代」としている。
- 7 焼物（土器・陶磁器）実測図における断面の塗り分けは以下のとおりである。
白：縄紋土器・土師器・土師質土器、黒：炆器（須恵器）・陶磁器、灰：含繊維縄紋土器・瓦質土器
- 8 遺物図中における上記以外の灰色トーンの意味は以下のとおりである。
黒色土器：黒色処理範囲（ドットで表示）
土師質土器皿：灯明としての使用痕であるタール・煤状炭化物付着範囲
木製品：漆塗り範囲（濃：黒漆、淡：赤漆）
鞆羽口：熔滓付着範囲（濃）、変色範囲（淡）
- 9 焼物の器種分類は、本書で独自に設定したもの以外は巻末に記載した先行する文献に従った。
- 10 図中で使用した方位は真北を示す。また遺構図中に示した国家座標値（世界測地系・第 8 系）は、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北太平洋沖地震以前の値で、地震変動に対する補正は行っていない。
- 11 調査から本書作成までの間、以下の方々から指導・助言・協力を得た。なお、調査指導委員等関係者については第 I 章に記した。
市川恵一、松本建速、望月道彦、横内文人（敬称略）
- 12 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823 松本市中山 3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189）に保管している。

表紙挿図 大河内家文書『文禄三年曾田郷往古之略図』の写し（市川恵一氏所蔵）をトレースしたもの。
後世の改変・追記を受けていると考えられるが、善光寺街道成立以前の会田と虚空蔵山麓の中世的な景観がよく表され、殿村の地名も見える。

目 次

例 言

目 次

第 I 章 調査事業の概要

第 1 節 事業の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第 2 節 第 5 次調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第 3 節 調査体制・・ 8

第 II 章 第 5 次調査の成果

第 1 節 調査の目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第 2 節 遺構

1 5A1 トレンチ・・ 19

2 5B1 トレンチ・・ 27

3 5B2 トレンチ・・ 27

4 5B3 トレンチ・・ 27

第 3 節 遺物

1 焼物・・ 34

2 石器・石製品・・ 42

3 木製品・・ 44

4 土製品・金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

第 III 章 調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

写真図版

報告書抄録

奥 付

第 1 図 殿村遺跡の位置



第 I 章 調査事業の概要

第 1 節 事業の経緯

1 第 1 次調査と保存に至る経過

殿村遺跡は、松本市大字会田字殿村 536 外に所在する縄紋時代～中世の複合遺跡である。松本市教育委員会が平成 20 年に実施した四賀地区統合小学校（四賀小学校）建設に係る第 1 次発掘調査では、縄紋・古代の集落跡との当初予想に反して、15 世紀代の石積を伴う中世の大規模な造成遺構が検出され、しかも 16 世紀にかけて数回にわたる拡張により遺構面が複雑に重層する状況が確認された。

これにより調査期間が大幅に超過したため、担当課である文化財課と学校教育課の間で再三にわたって協議を重ね、調査期間の延長を図った。一方、調査成果に対して次第に各方面からの注目が集まることとなり、保存要望も寄せられるようになった。そして、平成 21 年 7 月に至って四賀地区町会連合会から、「殿村遺跡保存及び四賀小学校早期建設に関する要望書」が提出されたことを受けて、松本市は遺跡の現地保存と学校建設地の移転を決定した。その後の調査は記録保存から保存目的の確認調査へと方針転換し、最後に保護砂の被覆等遺構保護のための措置を講じて、平成 22 年 1 月に第 1 次調査が終了した。

2 調査指導委員会の発足と総合調査の計画

保存決定により、市教育委員会は文化庁および長野県教育委員会の助言を受け、平成 22 年度から専門家による殿村遺跡調査指導委員会を発足させ、その指導の下で遺跡の範囲や内容を明らかにし、性格を究明するための確認調査を継続的に実施していくことになった。

第 1 回調査指導委員会（平成 22 年 4 月開催）では、第 1 次調査の概要と保存に至る経過の報告、今後の発掘調査計画を示した。一方、各委員からは、殿村遺跡を取り巻く歴史的景観、とりわけ中世以前の虚空蔵山麓一帯に宗教空間が広がっていた可能性が高く、殿村遺跡はそこに所在する宗教施設のひとつではないかとの指摘を受けた。それを踏まえ、今後の調査は殿村遺跡の発掘調査だけでなく、宗教空間全体を対象とした総合的な調査を実施し、その中で遺跡の位置付けがなされるべきとの指導を得た。

3 殿村遺跡調査事業

そこで、市教育委員会はあらためて計画を見直し、発掘調査を軸とした総合調査として「殿村遺跡調査事業」を計画した。そこでは、遺跡（点）から地域・背景（面）へと視点を拡大させ、殿村遺跡の発掘調査を事業の柱に、周辺の城館跡、景観、社寺・信仰資料等の調査を実施していくこととなった。

事業の柱となる殿村遺跡の発掘調査については、遺跡の内容確認に加えて将来的に保護すべき範囲を把握することを目的に、特に① 1 次調査で検出された石積を伴う造成遺構について外郭構造を中心とした全体像の把握、② 中世の造成遺構の分布範囲と保存状況の確認、③ 遺構群の時間的・空間的位置付けと性格の解明等を主眼に進めることとなった。

4 計画に基づく調査の実施

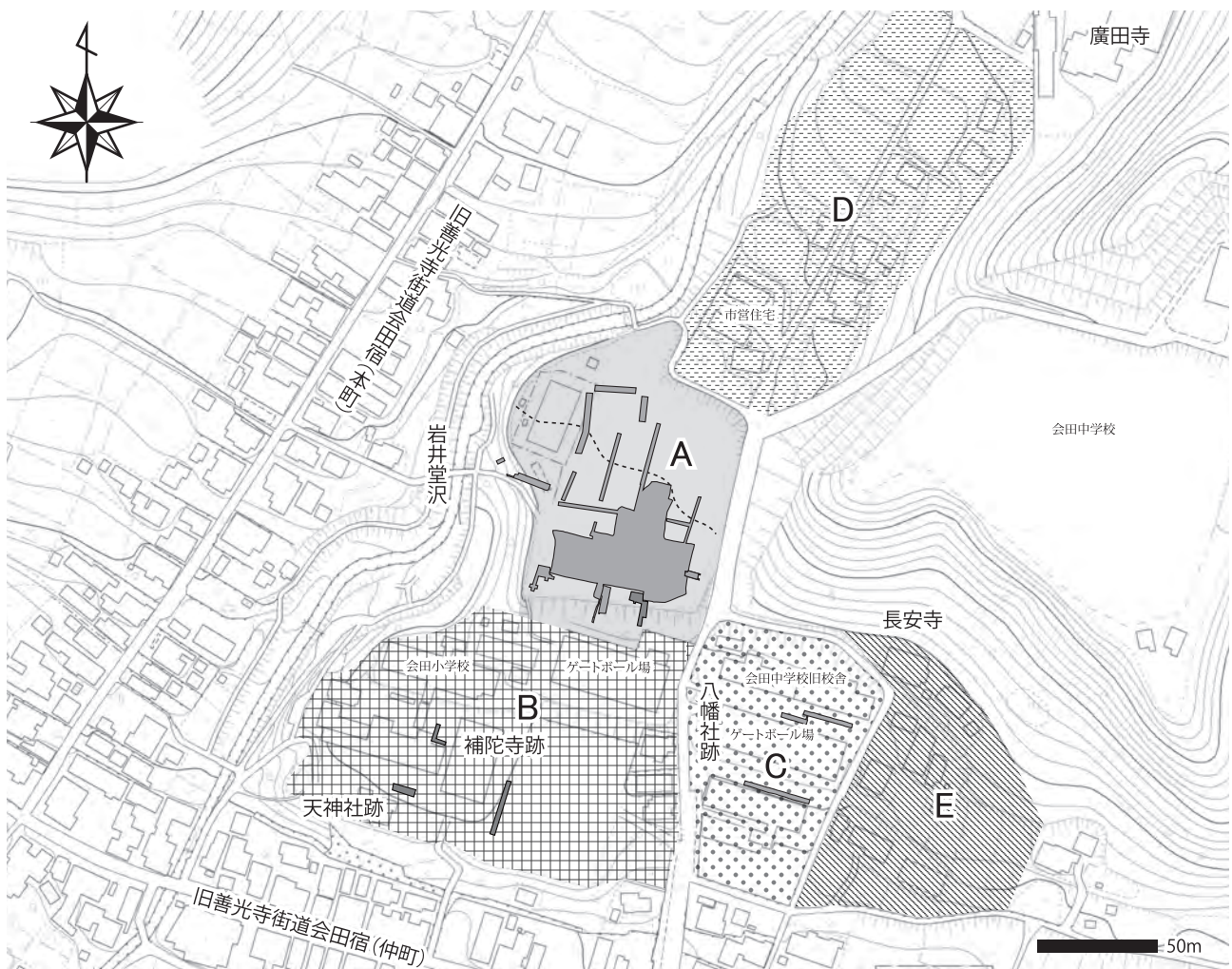
調査計画では、南北約 400 m・東西約 300m に及ぶ遺跡推定範囲を A～E の 5 ゾーンに分割し、毎年、A ゾーンにおける内容確認のための調査と、他ゾーンにおける範囲把握を主目的とした調査を組み合わせで行うこととした。また、調査報告書は次年度に刊行し、最終年度に総括編を刊行することを目標とした。

この計画に基づき、平成 25 年度は 4 カ所（5A1、5B1～5B3）の発掘調査を実施するとともに、第 4 次調査（平成 24 年度実施）報告書をまとめた。また、平成 26 年度は第 5 次調査の整理作業と報告書作成を進めるとともに、第 6 次調査（6A1・6A2・6D1・6D2）を実施した。

なお、調査事業の進展に伴い、殿村遺跡と密接な関係を有すると考えられる虚空蔵山城跡についても、発掘調査による確認が必要との判断に達し、平成 24 年度から 3 回の計画で調査を開始、平成 25 年度は 2 回目となる第 3 次調査を実施した（平成 26 年度は未実施）。

第 1 表 調査計画

ゾーン	予想される検出遺構等	土地利用状況		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
				2 次	3 次	4 次	5 次	6 次	7 次	8 次	
A	中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	空地	市有地	1 次調査区周辺							
B	旧補陀寺関連遺構（中・近世） 旧天神社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	学校 住宅 GB 場	市有地、 一部民有地				校舎 校庭			校舎 校庭	
C	長安寺関連遺構（中・近世） 八幡社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	旧校舎 GB 場	市有地	旧校舎 周辺		旧校舎 周辺					
D	廣田寺関連遺構 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	畑地 宅地	民有地 一部市有地				休耕田 荒地				
E	長安寺関連遺構（中・近世） 縄紋・古代～中世遺構面	畑地 宅地	民有地						畑地		
調査報告書刊行				1 次 概報	2 次 報告	3 次 報告	4 次 報告	5 次 報告	6 次 報告	7 次 報告	1・8 次報告 （総括編）



第 2 図 ゾーニング

第2節 第5次調査の経過

今回報告する第5次調査は、平成25年度国庫補助事業として実施したものである。調査箇所は4カ所(5A1 トレンチ、5B1～5B3 トレンチ)で、平成25年9月24日に着手、翌年1月16日に終了した。また、報告書の作成は平成26年度国庫補助事業として行った。

調査から報告書刊行までの一連の事務および作業の経過は以下に示すとおりである。

<平成25年>

- 3月7日 平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 3月26日 第3次発掘調査報告書刊行
- 5月15日 平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
- 7月16日 虚空蔵山城跡第3次調査開始
- 9月24日 殿村遺跡第5次調査開始
- 10月12日 平成25年度調査報告会・講演会開催（四賀支所ピナスホール）
- 11月16・17日 平成25年度調査指導委員会開催
- 11月21日 虚空蔵山城跡第3次調査完了
虚空蔵山城跡埋蔵文化財発見届および保管証、発掘調査終了報告書提出
- 12月7日 殿村遺跡現地説明会開催
- 12月11日 文化庁近江俊秀調査官現地視察

<平成26年>

- 1月16日 殿村遺跡第5次調査完了
殿村遺跡埋蔵文化財発見届および保管証、発掘調査終了報告書提出
- 2月7日 平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 3月16日 殿村遺跡発掘5周年記念シンポジウム開催（あがたの森文化会館）
- 3月26日 第4次発掘調査報告書刊行
- 3月31日 平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書提出
- 4月1日 平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
- 4月11日 平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の決定通知
- 8月18日 殿村遺跡第6次調査開始
- 11月10・11日 平成26年度調査指導委員会開催
- 12月6日 殿村遺跡現地説明会開催
- 12月19日 殿村遺跡第6次調査完了

<平成27年>

- 3月21日 平成26年度発掘報告会・講演会開催（四賀支所ピナスホール）
- 3月25日 第5次発掘調査報告書刊行

第3節 調査体制

<平成25年度>

調査団長 吉江 厚（松本市教育長）
調査担当 竹原 学（係長）、福澤佳典（主事）、宮島義和、伊藤 愛（囑託）
報告書担当 竹原 学、宮島義和、原田健司、伊藤 愛（囑託）
調査員 青木教司、市川恵一、河西克造、宮嶋洋一
発掘協力者 大滝清次、清水陽子、茅野信彦、長岩千晴、待井正和、矢満田伸子
整理協力者 荒井留美子、市川二三夫、内田和子、柏原佳子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、
洞沢文江、前沢里江、村山牧枝、八板千佳、安田津由紀

事務局 松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（主査）、柳沢希歩（囑託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）
委員 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）
辻 誠一郎（東京大学大学院教授）
中井 均（滋賀県立大学教授）
中澤克昭（長野工業高等専門学校准教授）
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）
指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

<平成26年度>

調査団長 吉江 厚（松本市教育長）
調査担当 竹原 学（埋蔵文化財担当係長）、宮島義和、伊藤 愛（囑託）
報告書担当 竹原 学、原田健司（事務員）、宮島義和、伊藤 愛（囑託）
調査員 青木教司、市川恵一、浜野安則
発掘協力者 上村公住、長岩千晴、待井正和、矢満田伸子
整理協力者 天野雅代、荒井留美子、市川二三夫、内田和子、柏原佳子、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、
中澤温子、洞沢文江

事務局 松本市教育委員会文化財課

内城秀典（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（主査）、吉見寿美恵（囑託）

殿村遺跡調査指導委員会

委員長 笹本正治（信州大学副学長）
委員 小野正敏（前大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）
辻 誠一郎（東京大学大学院教授）
中井 均（滋賀県立大学教授）
中澤克昭（上智大学准教授）
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）
指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

第Ⅱ章 第5次調査の成果

第1節 調査の目的と方法

調査地の選定とトレンチの配置（第3図） 殿村遺跡調査事業に係る一連の発掘調査は、①1次調査で検出した平場遺構周辺における整地層の広がりや外縁部の状況を確認すること（内容把握）と、②広大な遺跡内における中世造成遺構の広がりやの確認（範囲確認）を目的として実施している。5回目を数える今回の調査は、1次調査区南東に接して5A1トレンチを設定し、平場南東部の石積・土塁の延長の把握に努めた。また、南側における遺跡の範囲確認として、旧会田小学校敷地に5B1～5B3トレンチを設定し確認調査を実施した。

調査手順 5A1トレンチの調査は、まず厚さ1.5～3.0mに達するグラウンド造成土を重機で除去し、昭和28年当時の地表面を検出した。ここを調査開始面としてトレンチを設定し、以後人力作業によって層位的な掘り下げを行った。5B1～5B3トレンチについては、今回は旧会田小校舎解体後に予定する本格調査に先立つ予備調査として試掘に準じたトレンチ調査を実施し、明瞭な遺構面のある5B3トレンチのみ面的調査を実施した。

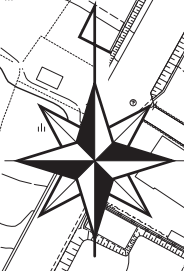
調査面・遺構名・番号管理 5A1トレンチでは、1次調査区で確認された1～5面の段階の遺構面を確認した。下層の遺構面把握のため破壊を余儀なくされる上層すなわち1・2面については記録保存調査を実施し、全体的な掘り下げは2面～3面古段階までに止めた。以下4～5面はサブトレンチによる一部調査を実施した。他方、5B1トレンチは基本的に中世の遺構面までとし、5B3トレンチは地山直上に展開する近世末～近代の遺構面を調査した。5B2トレンチは表土直下で既に削平を受けた地山面となったため、状況確認のみに止めた。

遺構番号はこれまで使用した番号に後続する区切りのいい数（1551～）から開始し、1次調査の方針に従い内容が判明した時点で種別を頭に冠した。石積・石列等特定の遺構も1次調査からの連番とした。

記録 5A1トレンチにおける測量基準は1次調査で設定したメッシュを使用した。国家座標（世界測地系・第8系）に拠っているが、1次調査との整合を図るため、東北太平洋沖地震以前の観測値を補正せずに使用している。5B各トレンチについても同様に、平成22年度に設置した最寄りの基準点から国家座標を導いた。

第2表 調査成果一覧

調査期間	平成25年9月24日～26年1月16日	調査面積	118㎡（5A1：46㎡、5B1：31㎡、5B2：12㎡、5B3：29㎡）
検出遺構		出土遺物	
<5A1トレンチ> 5面（古代～中世）：ピット13基、石列1基 4面（中世）：土塁1基 3面古～新：石積4基・整地層 2面：ピット1・溝状遺構1・石列1・整地層 1面：遺構なし		縄紋：土器（深鉢）、石器・石製品（石鎌・横刃形石器・搔器・削器・二次加工ある剥片・微細加工ある剥片・有孔石製品他） 奈良・平安：土師器（小型甕・甕）、黒色土器（杯or碗）、須恵器（杯・壺） 中世：土師質土器（皿・大型皿・内耳鍋） 炆器（常滑甕） 瓦質土器（風炉・火鉢）	
<5B1トレンチ> 中世：ピット7基・礎石1基・整地層 近世・近代：石列1基・整地層 時期不明：溝状遺構1基		陶器（無釉陶器捏鉢、古瀬戸・大窯天目茶碗・縁釉小皿・盤・搦鉢・その他） 磁器（青磁碗、白磁碗・皿類） 石器（硯・石鉢）	
<5B2トレンチ> 遺構なし		木製品：漆塗折敷・鳥形木製品・斎串状木製品・短冊状板・曲物底板・端材 土製品：鞆羽口	
<5B3トレンチ> 近世・近代：ピット4基、土坑2基、溝状遺構1基		金属製品：不明鉄製品・銭 近世・近代：陶磁器（瀬戸美濃皿、染付皿）、金属製品（銭）、その他	



造成面推定範囲

会田中学校現校庭

A区

長安寺

会田中学校旧校舎

ゲートボール場

古窯跡

2C1トレンチ (H22)

ゲートボール場

4C1トレンチ (H24)

会田中学校旧校舎

S = 1 : 1,250

0 10 20 30 40 50m

第3図 調査区の位置

5B2トレンチ (H25)

会田小学校

5B1トレンチ (H25)

5B3トレンチ (H25)



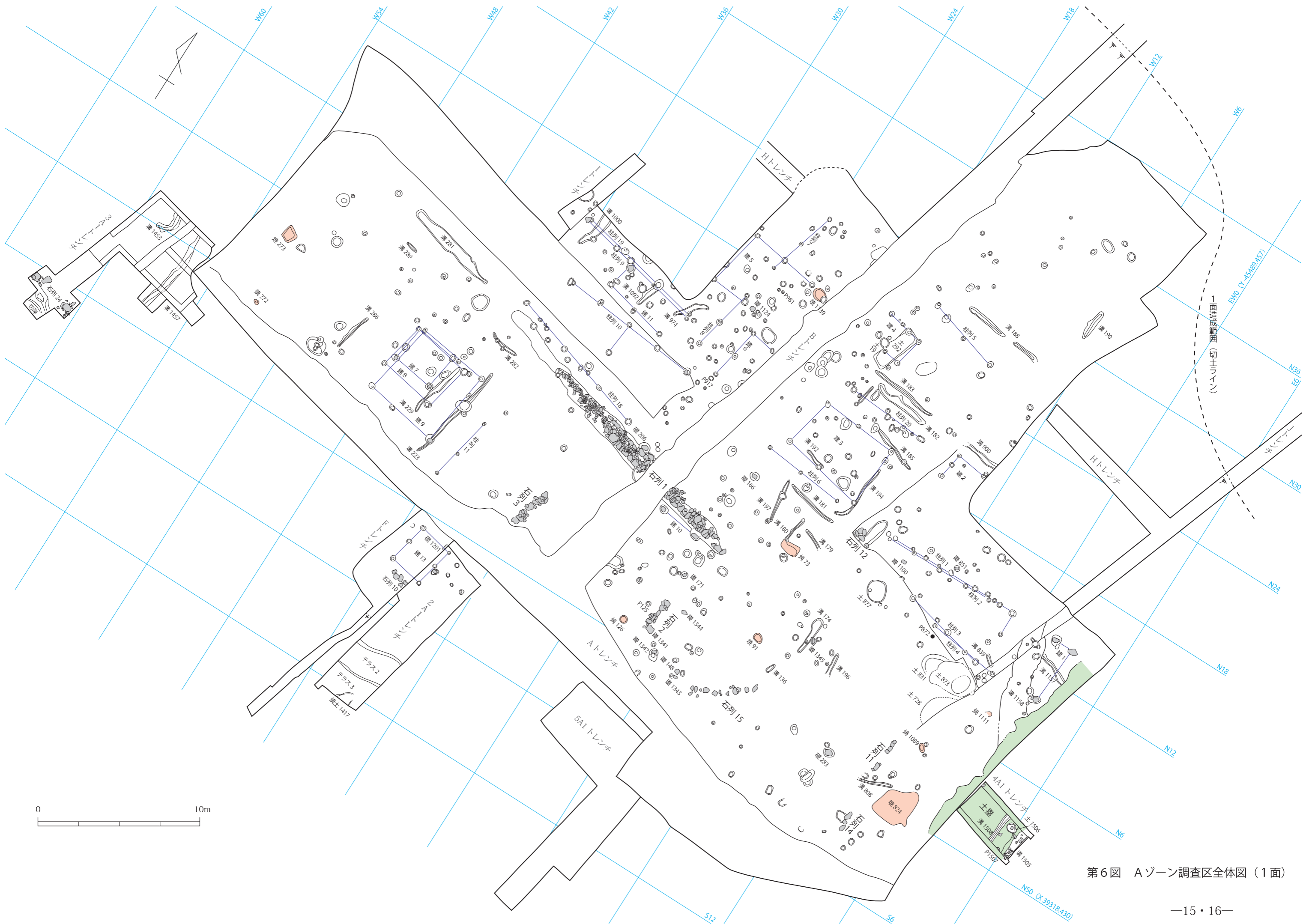
第4図 Aゾーン調査区全体図 (5～3面)

● 5面 (旧地表・地山面) 検出遺構



- ① 2面整地土面上で純粹に検出した範囲 (2面段階の遺構にほぼ限定)
- ② 2面と3面が同一検出面となる範囲 (2面と3面段階の遺構が混在)
- ③ 3・4面上で検出した範囲 (調査時2面を削平、3・4面段階の遺構が混在)

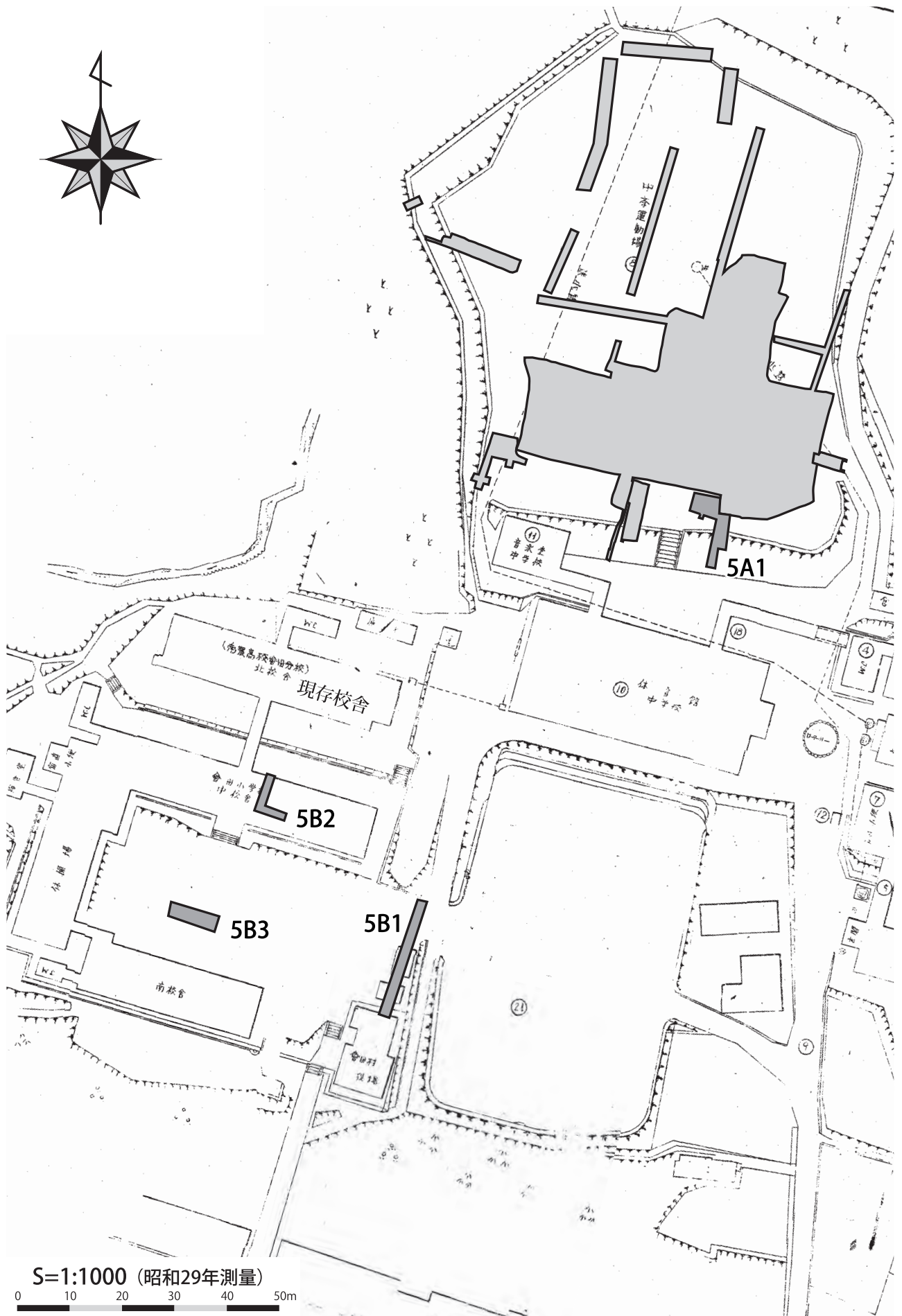
第5図 Aゾーン調査区全体図 (2面)



第6図 Aゾーン調査区全体図(1面)



第7図 調査区と周辺の地割 (明治24年)



第8図 会田小学校旧校舎・敷地と調査区

第2節 遺構

1 5A1トレンチ（第3表、第9～12図）

(1) トレンチの概要と土層構成、遺構の概要

トレンチの概要 本調査区は標高 637.5 m～640.1 m地点に位置し、南北 12.5m・東西 7.0m（いずれもグラウンド盛土を除いた旧地表面での規模）の逆L字形を呈する面積 46 m²のトレンチである。石積前空間東部における土塁と石積 B2・B3 の関係等の構造を把握するため、1次調査 A トレンチ（以下 1A トレンチ）南東部の石積 B2・B3 の延長部分に設定した。

調査地の現況は、昭和 28 年に造成されたグラウンド盛土の末端から南に向かって急斜面となっている。調査前に桜等支障木の伐採を行った後、まずグラウンドの盛土を重機で掘り下げたところ、約 1.5～3.0 m の深さで昭和 28 年以前の旧地表面に到達した。この旧表土面には戦前療養所が建てられていた経緯があり、北側は平坦面だが激しい攪乱が入る。また、南側は傾斜面となり、かつて畑の境界をなしていた南北方向の溝（第 10 図）が存在していた。旧表土を剥がすと中世の整地土層が現れたが、これは第 2 面に属するもので、1面は削平により西区北西隅に僅かに残るのみであった。2面からはこの段階の溝状遺構やピットが検出された。本トレンチにおける最古段階の遺構面は 5 面であり、そこから 1 面に至るまでの間に造成された整地土は西区の平坦面では厚さ 2.0m に達している。

土層構成 調査の結果、1次調査で確認された 1～5 面の各遺構面を検出した。1面は 2 面整地土を埋め立てて造成された面で、中世の最終遺構面となる。整地土は西区北西部のごく僅かな範囲でしか確認できなかったため、明確な特徴を記すことはできないが、地山土由来の風化泥岩屑が少量含まれている。時期はこれまでの調査成果から 16 世紀中葉から後葉と考えられる。

2 面整地土は各遺構面の基盤整地土では最も厚く、80～90 cm に達する。本調査において、この面は厳密には 2 面と 2' 面の 2 つの段階に分けることができる。2 面は土塁や石積前空間を埋め立てて平場を拡張した段階の面で、1次調査と同様の黄褐色整地土を基調としている。1面に比べるとやや粗く、風化泥岩や砂岩のブロックを多量に含んでいる。2' 面は南区の土塁南空間の埋土中で検出された石列 27 に伴う面で、本調査では土塁南空間のみで確認した。整地土は 2 面と同じく黄褐色系の土であるが、シルト質で一部粘土を含み比較的きめの細かい整地土である。なお、1・2 次調査ではこれらの間にもうひとつ 2' 面が確認されたが、本トレンチよりも西側の 1 次 F トレンチ（以下 1F トレンチ）付近にあるため今回の調査区までは及んでいない。2 面の時期は 15 世紀末から 16 世紀前葉と考えられる。

3 面は石積 B2・B3・C・F が築造された段階である。古・中・新の 3 段階に分かれ、石積 B2 が構築された時期の整地土を古段階、石積 B3 の時期を中段階、石積 F が構築された時期を新段階とする。新段階の整地土は石積前空間のみに存在し、1・2 次調査で検出された石列 13 や集石 2 等の遺構もこの段階に属することが判明した。これまで本段階の整地層に関しては面を認定していなかったが、本調査で石積 F が検出されたことにより、新たに 1 つの段階として加えたものである。古段階・中段階は、1 次調査時は石積 B2 段階と石積 B3 段階を総じて 3 面としていたが、今回の調査で状況が明らかになったことにより面を分けた。これら 3 面各段階の間には大きな時間幅は無く、いずれも 15 世紀後葉の短期間のうちに平場の拡張が繰り返された結果であると考えられる。3 面の土層は、石積の基盤土や裏込め土等の整地土と、石積前にみられる水成堆積土の 2 種類がある。前者はシルト質のしまりのある土が多く岩屑などのブロックを多量に含み版築状を呈するのに対し、後者は粘土質で軟らかい。水成堆積層の中には木製品を多量に含む暗オリーブ色の粘土層があり（39 層）、今回報告した木製品のほとんどは、この層から出土したものである。

4 面は土塁・石積 A・石積 B1 が築造された段階に該当し、本調査では西区で土塁や堆積層（71 層）が確

認められた。土塁より南は緩斜面が広がっており（土塁南空間）、4面段階の整地土はみられない。土塁の下にある石列26は5面の直上で検出されたが、土塁築造以前の初期段階の遺構の可能性もあるため、4面の遺構に含めた。土塁盛土は灰黄褐色～黒褐色を呈する土層が主体で、きめの細かい土が版築状に固く叩きしめられていた。時期は15世紀中葉までと考えられる。最下面である5面は、縄紋時代から奈良・平安時代までの遺物を含む15世紀中葉以前の旧地表面である。黒色のシルト層を土塁直下や土塁南空間南部で確認でき（91～96層）、土塁や石積を伴う中世の造成が行われる以前は、この土が面的に広がっていたと推測される。4面段階の土塁築造の際に削平されたため、本面に伴う13基のピットはすべて上部が失われている。

遺構の概要 1面の遺構は検出されなかった。2面では西区で溝1551とP1552が、2"面では南区で石列27が検出された。西区の南西部では炭混じりの粘質土が貼られていたが、その性格は不明である。3面の遺構としては、古段階では石積B2・Cが、中段階では石積B3・Cが、新段階ではそれに加えて石積Fがみられる。当時は4面段階以来の石積Aと土塁がまだ機能していたため、その間に広がる石積前空間は3面の各段階にも形を変えながら継続していたと捉えられる。4面で確認された遺構は土塁・土塁南空間・石列26である。5面は上部が削平されているものの、15世紀の造成以前のものと考えられる13基のピットが検出できた。

以上のような状況を整理し、第26図に模式図を示した。

(2) 5面の遺構

ピット群（P 1556～1568） 南区南部の地山面上で検出された。もとは5面旧表土から掘り込まれていた遺構であるが、4面造成段階の削平により上部が失われてしまったものと考えられる。時期は15世紀以前と推測されるが、遺物の時期からみて古代までさかのぼる可能性もある。狭い範囲での検出だったため、掘立柱建物になり得るかどうかは不明である。直径は小さいもので13cm、大きいもので38cmを測り、円形を呈するものが多いが、13基のうち6基は調査区外へ続いているため正確な形状や規模はわからない。P1558の上層では、須恵器杯が一点出土している（1）。

(3) 4面の遺構

土塁 本調査区の中央部を東西方向に走る5面直上に築造された遺構である。1Fトレンチ・2次調査A1トレンチ（以下2A1トレンチ、参考写真1・2）から続く一連のもので、盛土は2A1と同様黒色土を多用している。主軸はN－83°－Wにとる。調査前の予測では、この土塁は石積B3の西で通路状の空間をあけて止まるものとみていたが、今回の調査により石積B3・B2よりさらに東に延長していることがわかった。1次調査のSE2トレンチでは、北に下降する暗褐色土層が確認されているが（参考写真3）、これが本土塁の一部であれば、その総延長は現段階で判明しているだけでも東西30m以上ということになる。幅は基底部で約6.5m、天端が約1.0m、高さは現存高で南法尻から1.6～1.8mを測る。南法尻は2"面以下は未掘であるが、ST6で下端が確認でき、北法尻はST4の断面で北に向かって下降していく様子がみられた。法面の傾斜は、北面で22°を測る。一方南面は、ゆるい角度で立ち上がった後屈折し、53°の急角度となり天端に達する。2A1トレンチにおける状況と同様、のちに改変された可能性を示している。

土塁の平面形は、北法尻のラインを見ると石積B3の西側で屈曲して幅員を大きく減じており、代わりに石積前空間が大幅に広がって西へ続いていく様子がわかった。南法面には、拳大～人頭大またはそれ以上の大きさの輝石安山岩が散在する。礫の形状は角礫もしくは亜角礫がほとんどで、部分的に割れているものもある。大きいものは長さ約30～50cm、小さいものは20cm前後の大きさで、なかには被熱したものもあった。2次調査では、南法尻で角礫や亜角礫からなる石積Dが検出されており（参考写真1）、今回の礫群と

の関連性を考慮する必要がある。3面段階になると北天端に石積Cが築かれるが、それについては後述する。盛土中の遺物としては、須恵器や土師器、黒色土器など古代のものが出土している。

土塁南空間 土塁の南側に広がる緩斜面で、2面段階に入って埋め立てが行われるまで機能していたと考えられる。土塁の南裾はこの南空間で5面(旧表土)に接続している。南部では巨礫(石3)が検出された。

石列26 西区南部で検出された石列遺構。U字状に掘り込まれた溝の両側に長さ50cmほどの礫が配されているもので、石列を伴う溝状遺構の可能性もある。5面直上に構築されているが、付近からは土師質土器皿や古瀬戸盤が出土しているため、土塁築造に先行して設けられたものと判断し、4面の古い段階の遺構として扱うこととした。

(4) 3面の遺構

石積B2 本調査区の北東部に位置する、長さ2.3mを測る3面古段階の石積である。石積の下端が土塁の北法面に乗るように構築されており、1Aトレンチ・SE1トレンチでは既に北側延長部分が調査されている。主軸はほぼ真北を向き、1次調査範囲(参考写真4)も含めると全長は7.4mとなる。土塁に直交して築かれており、4面段階で築かれた石積Aと土塁の間に広がる石積前空間の東を南北方向に区画する。高さは約90cmで、1Aトレンチの検出部分との南北の高低差は約50cmである。築石は3～5段積みで、地面に対してほぼ垂直に積んでいる。間詰石や裏込栗石は無く、基盤土には風化泥岩屑を多量に含む褐色の粘土を貼っている。30～40cmほどの礫を主体に20cm前後の小礫を詰めるようにして積んであり、横目地は通らない。いずれも加工痕がほとんどない亜角礫の自然石を使っている。背面の調査を行っていないため、個々の築石の奥行きは確認できないものが多いが、天端石には幅よりも奥行きが長い小口積みのものと、奥行きよりも幅の方が長い長手積みのものがみられた。

石積C 土塁天端の北側に構築された石積である。過去には1Fトレンチ・2A1トレンチでも延長が確認されている。2A1では2段積みであったが(参考写真1)、1Fトレンチ及び今回の調査範囲では1段の石列状であった。1Fトレンチから続いてきた後、石積B2の南部にぶつかって終結しており、本遺構が石積B2と同時に、あるいはB2の僅か後に構築されたものであることがわかる。築石の大きさは30～40cmほどで、ほぼすべてが奥行きが長い小口積みであった。石の面はすべて北向きに揃っており、主軸はB2と直交して真東にとる。

石積B3 3面中段階の石積で、石積B2の西側2m地点に真東に軸をとって構築されている。B2と同様石積前空間の東を区画するためのもので、B2を埋め立てて平場を広げる際に設けられた。1Aトレンチでは石積Aに接続する北側部分が検出されており(参考写真4)、今回はその南端部の調査である。全長は今回検出された部分で4.0m、1次調査区の北側部分も合わせると6.8mとなる。石積B2と同じく土塁の北法面に下端が乗るように土塁の傾斜に合わせて段数を減らし、土塁北法尻より北側では風化泥岩屑を多量に含む黄褐色土が基盤として整地されている。高さは最も高い部分で95cmを測り、1次調査で確認された北部との南北高低差は約25cmである。築石は4～5段に積まれており、地面に対して74°の角度で直に近い。裏込めに栗石は無く、間詰石もほとんど無い。最下段には幅50cmほどの大礫を置き、それより上の段には20～40cm前後の礫を積んで目地はあまり通らない。礫はいずれも自然石で、ほとんどが輝石安山岩である。北部の天端石は残っておらず、3面新段階で後述する石積F等に転用されたものと思われる。残存する南部の天端石には、小口積みが多くみられた。遺物は石積前の堆積土中で土師質皿(8)と内耳鍋(9)が出土しているが焼物は少なく、むしろ西区北半部にかけて発達する黒色水成堆積層(39層)から斎串状木製品(1～32)をはじめ鳥形木製品(33)や曲物の底板(71)、端材(66～70)などの木製品が多量に出土する点特徴的である。土塁の際の青灰色粘土層(35層)からは硯(51)もみつまっている。

石積 F 西区中央部に東西に走る、3面新段階の遺構である。石積 B3 から派生し、西に緩やかに屈折しながら 5.0 m 伸びて調査区外に続く。石積 B3 付近は 3～4 段積みで高さは 60 cm を測るが、西に向かうにつれて徐々に低くなり、西部では 1 段になる。自然石を積んだもので小口積みが多くみられ、石積 B3 の天端石を転用した可能性がある。石の幅は大きいものでは 50 cm を超えるが 30 cm 前後のものがほとんどで、その間を埋めるように 20 cm 以下の礫が詰められていた。石の面は土塁側を向いており、その背後はしまりの強い暗褐色土で北に向かって徐々に上がるスロープ状に埋め立てている。スロープ上に乗る巨礫（石 1・石 2）は石積 F と同時期のもので、意図的に配されたと考えられる。この石積 F の築造によって、石積前空間の南北幅が前段階までの 7.0 m から 1.2 m に縮小する。また、西区南部では漆塗りの折敷（72）が土塁に貼りついた状態でみつかっており、この段階に廃棄されたものであることが窺える。遺物は石積前の堆積土中から出土している。焼物は土師質皿（10・11）と古瀬戸播鉢、青磁碗の小片などである。西区北西部の整地土内からは硯（48）が、さらに西区南部では、前述の漆塗りの折敷が出土した。石積前堆積土中からはこれ以外に木製品の出土はない。

(5) 2面の遺構

P1552 西区南東部で検出された平場整地土中の遺構。長径 30 cm、短径 27 cm の円形ピットで、遺物の出土はない。整地途中で築かれた遺構で、性格は不明である。

溝 1552 西区北西部を東西に走る、断面 U 字状の溝状遺構である。長さ 2.0 m・深さ 25 cm で両端は調査区外へ続き、上層は部分的に攪乱によって失われている。主軸は真東を向く。遺物の出土はない。

石列 27 2”面の遺構である。南区土塁南空間にあり、南北幅 70 cm～1.0 m の範囲で東西方向に延びている。方位は溝 1552 と同様、真東にとる。角礫や垂角礫を雑に敷き並べ、大きいもので直径 25 cm 前後あるが、20 cm 以下の礫が大部分を占めている。土塁南空間を埋め立てていく過程で構築された遺構で、この段階の平場南端の区切りとして設けられていたと考えられる。

2面段階の遺物は南区に集中する。特に土師質皿片が多く出土しており、なかには完形に近いものもある（28～30）。こうした傾向は、2A1 トレンチでも同様であった。そのほか整地土内からは風炉（38）や鞆の羽口（1～3）が出土している。一方西区では、整地土中から板状不明鉄製品（4）、焼物（32・37・39）が出土しており、今回の調査の中でも 2面は遺物量が突出している。



1 2A1 トレンチの土塁と石積 C・D



2 同 断面の状況



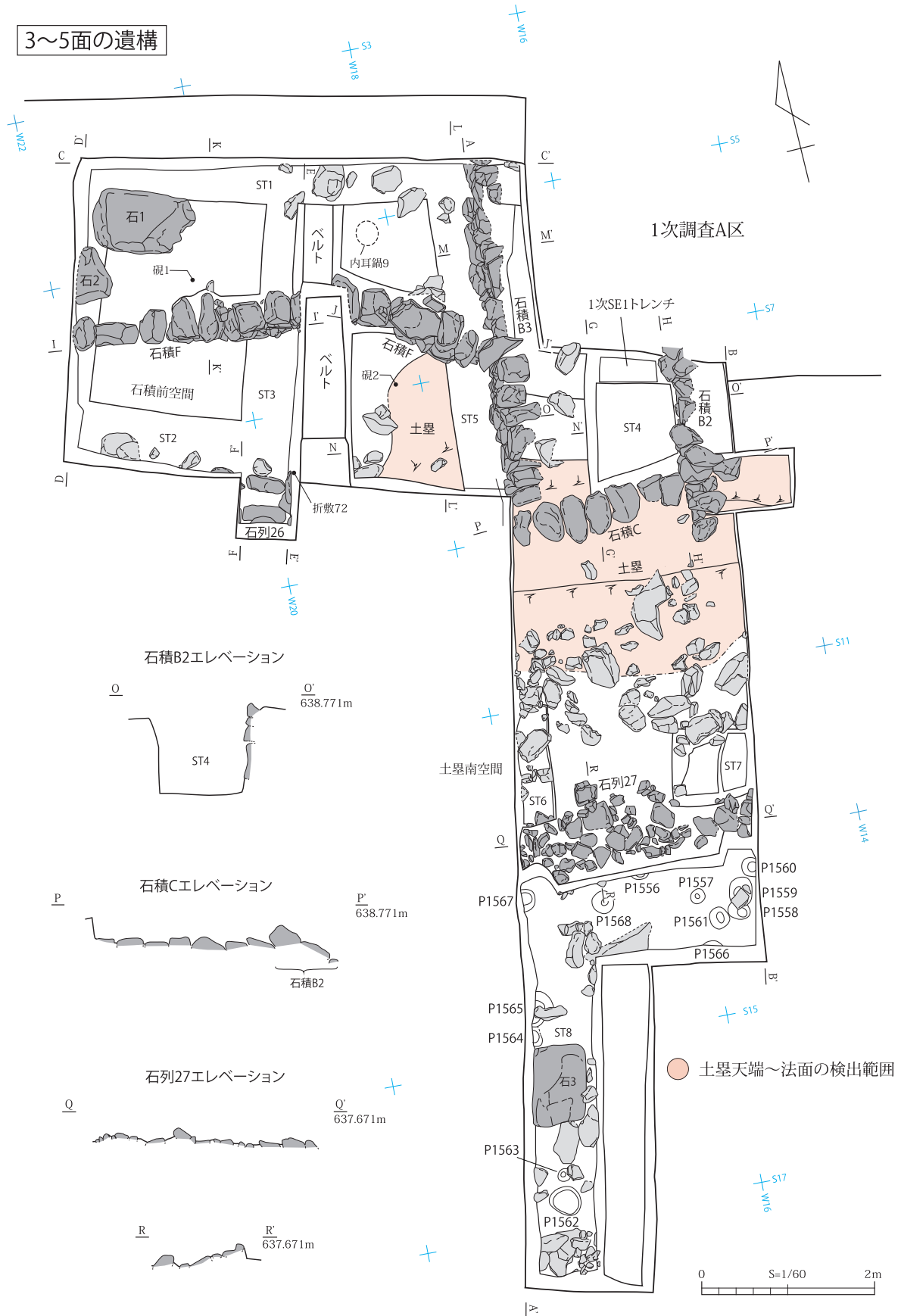
3 1A 区 SE1 トレンチの土塁法面



4 1A 区の石積 B2・B3

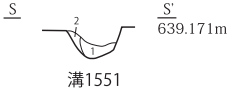
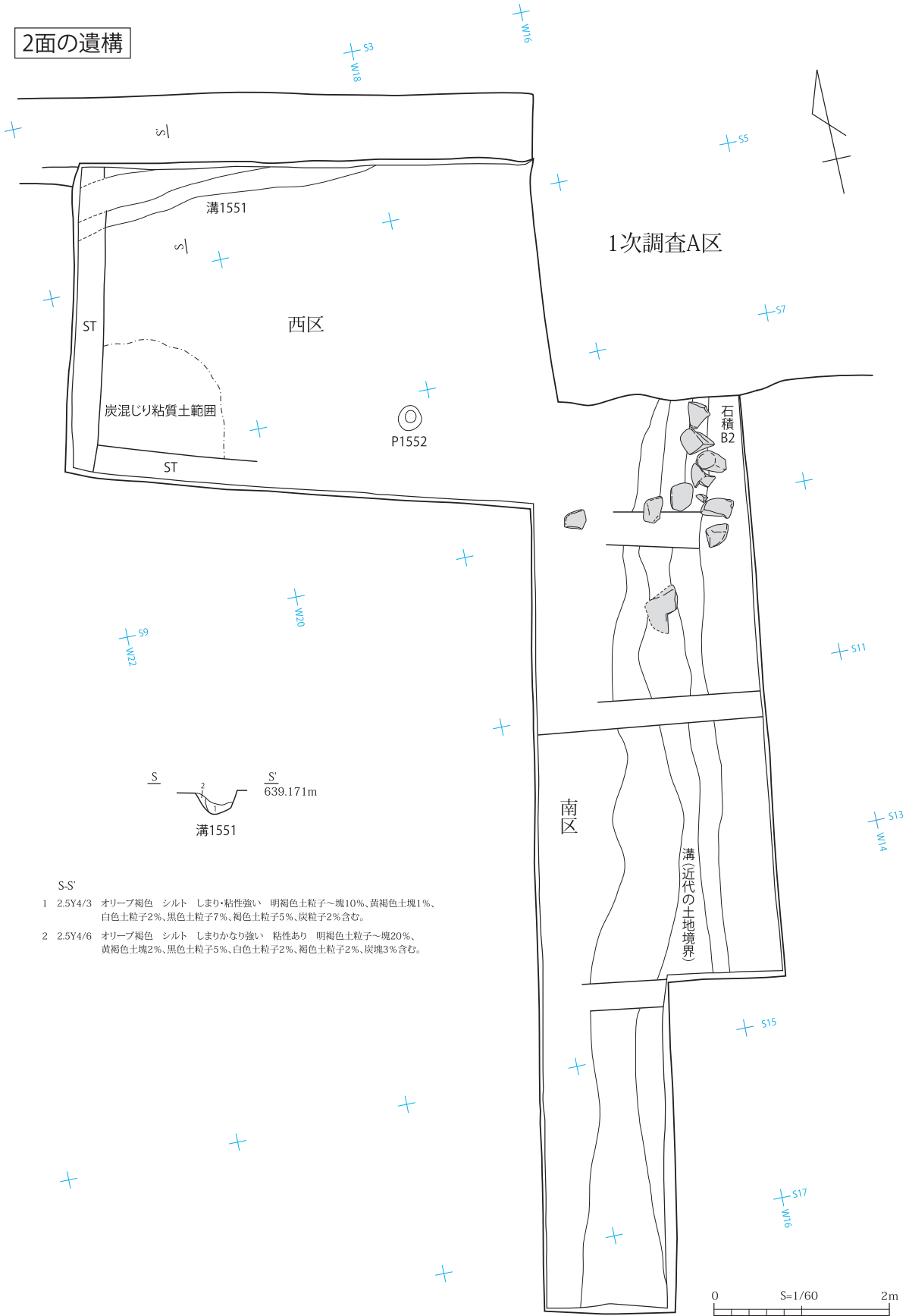
参考写真

3~5面の遺構



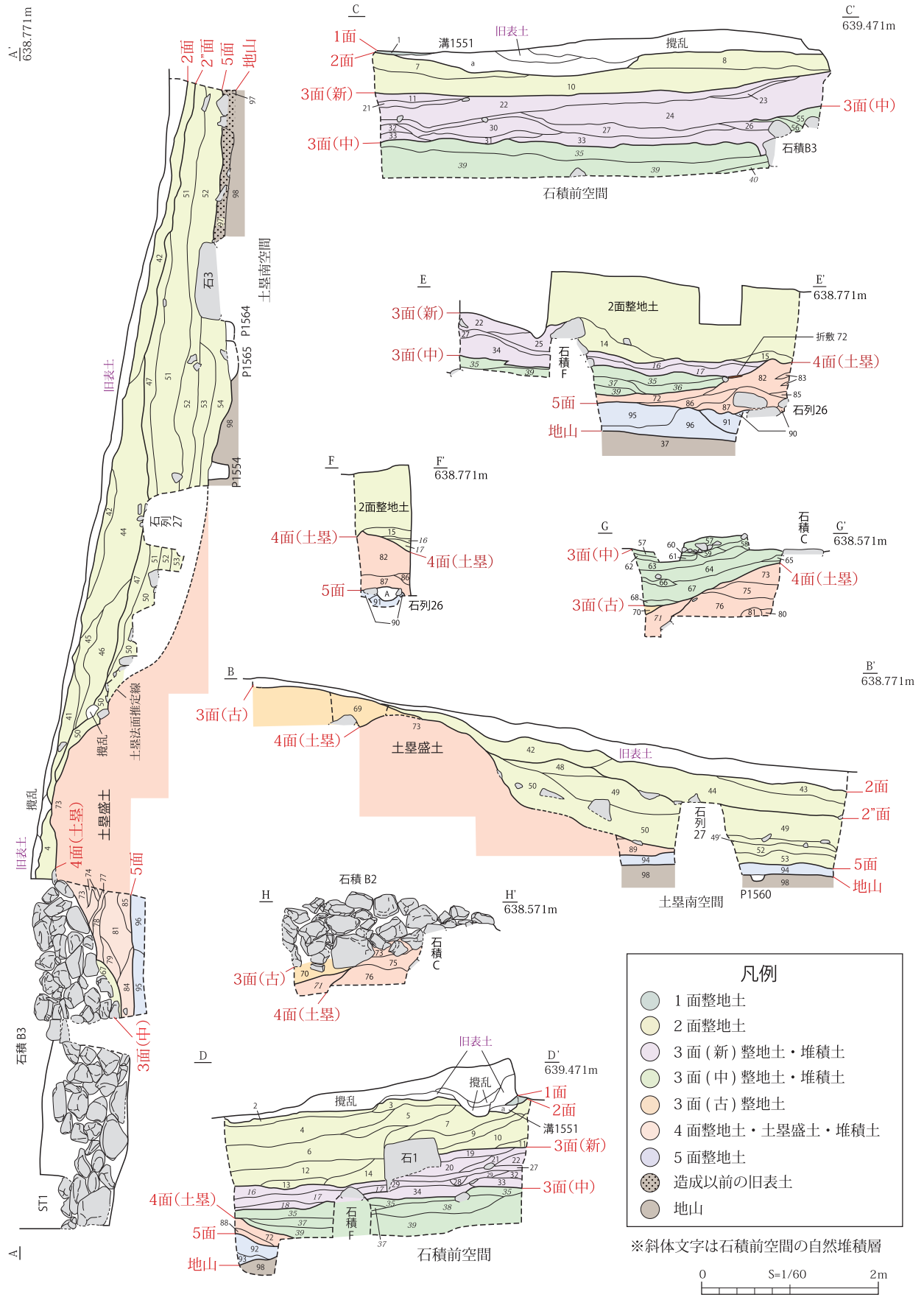
第9図 5A1 トレンチ (1)

2面の遺構



- S-S'
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト しまり・粘性強い 明褐色土粒子~塊10%、黄褐色土塊1%、白色土粒子2%、黒色土粒子7%、褐色土粒子5%、炭粒子2%含む。
 - 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト しまりかなり強い 粘性あり 明褐色土粒子~塊20%、黄褐色土塊2%、黒色土粒子5%、白色土粒子2%、褐色土粒子2%、炭塊3%含む。

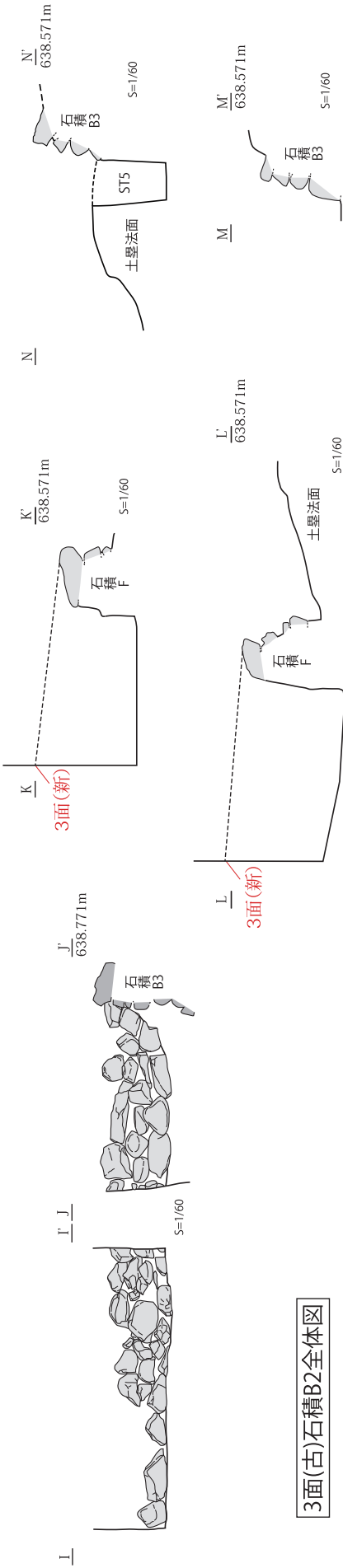
第10図 5A1 トレンチ (2)



第11図 5A1 トレンチ (3)

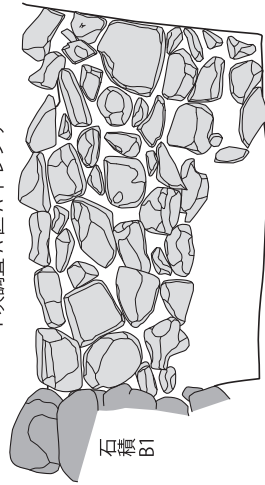
石積 B3 エレベーション (K-K、L-L')

石積 B3 エレベーション (N-N'、M-M')

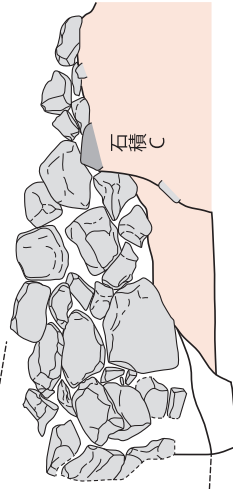


3面(古)石積B2全体図

1次調査A区Aトレンチ

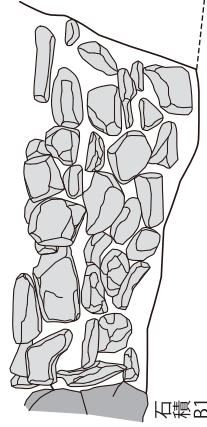


5次調査区ST4

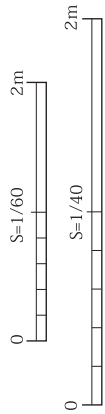
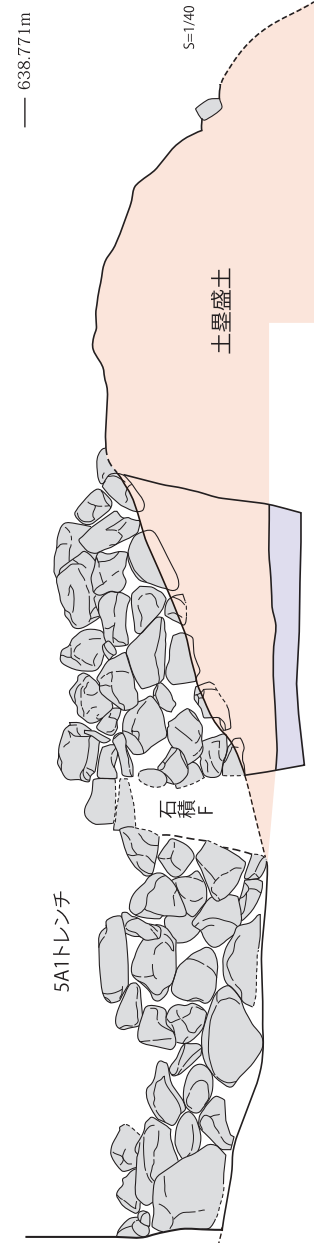


3面(中)石積B3全体図

1次調査A区Aトレンチ



5A1トレンチ



第 12 図 5A1 トレンチ (5)

2 5B1 トレンチ (第3表、第3・7・8・13 図)

Bゾーンの位置 殿村遺跡南部のBゾーンは、会田川右岸段丘の段丘崖に面し、直下の近世会田宿(仲町)から会田盆地南部の錦部方面まで眺望のよい高台にある。校舎・体育館周辺は、開山が中世以前に遡り維新时期に廃寺となった真言寺院である補陀寺が存したところで、関連遺構が分布している可能性がある。

今後実施が予定されている校舎解体とその後の本格的な確認調査に先立ち、中世を中心とした遺構面の存在や深度、残存状況を確認するための予備調査として、3カ所のトレンチ調査を実施した。

トレンチの概要 5B1 トレンチは、校庭の西端、体育館に並行する標高630.4m地点に幅1.5m・南北23.3mの規模で設定し、調査は重機で遺構確認面まで掘り下げを行った後、サブトレ ST1～7の掘り下げと遺構検出までを行った。面積31㎡。トレンチ内の土層は、北端部で校庭整地土直下から岩井堂沢の堆積物である黄褐色シルト～砂層を検出し、それが段をなして大きく南に落ち込む校庭造成以前の地形を確認した。校庭造成に際してはトレンチより北では斜面を削平し、段差より南では平均1mの盛土を行っている。

遺構の概要 トレンチ中～南部では盛土直下に近代の石列を伴う面がある。石列は旧地割と走向が重なることから敷地境に関わるもので、西側が一段低い。中世の遺構面はこれよりさらに深く、ST3と5～7で捉えた。ST3では黄褐色の地山を掘り込んで直径30cm前後の礎石とみられる平石が据えられる。またST5では暗褐色～黄褐色シルトの地山面上から土師質土器皿・内耳鍋片を伴うピットが集中的に検出され、ST6以南では整地土と思われる土層も一部観察された。以上、限定的な調査ながらBゾーンにおける中世遺構面の存在が確認された。

3 5B2 トレンチ (第3・7・8 図)

南校舎北側敷地、標高631.0mに設けた幅0.9～1.7m、南北6.8m・東西5.4mのL字形トレンチで、面積は12㎡である。全体に昭和44～45年の現南校舎建設及びそれ以前に存した中校舎に関わる攪乱が激しく、地表下30～50cmで地山の黄褐色シルト層に達し、遺構・遺物は得られなかった。おそらく学校建設による平坦地造成に際して地形が改変を受け、削平により本来の地表面は失われているものと推定される。

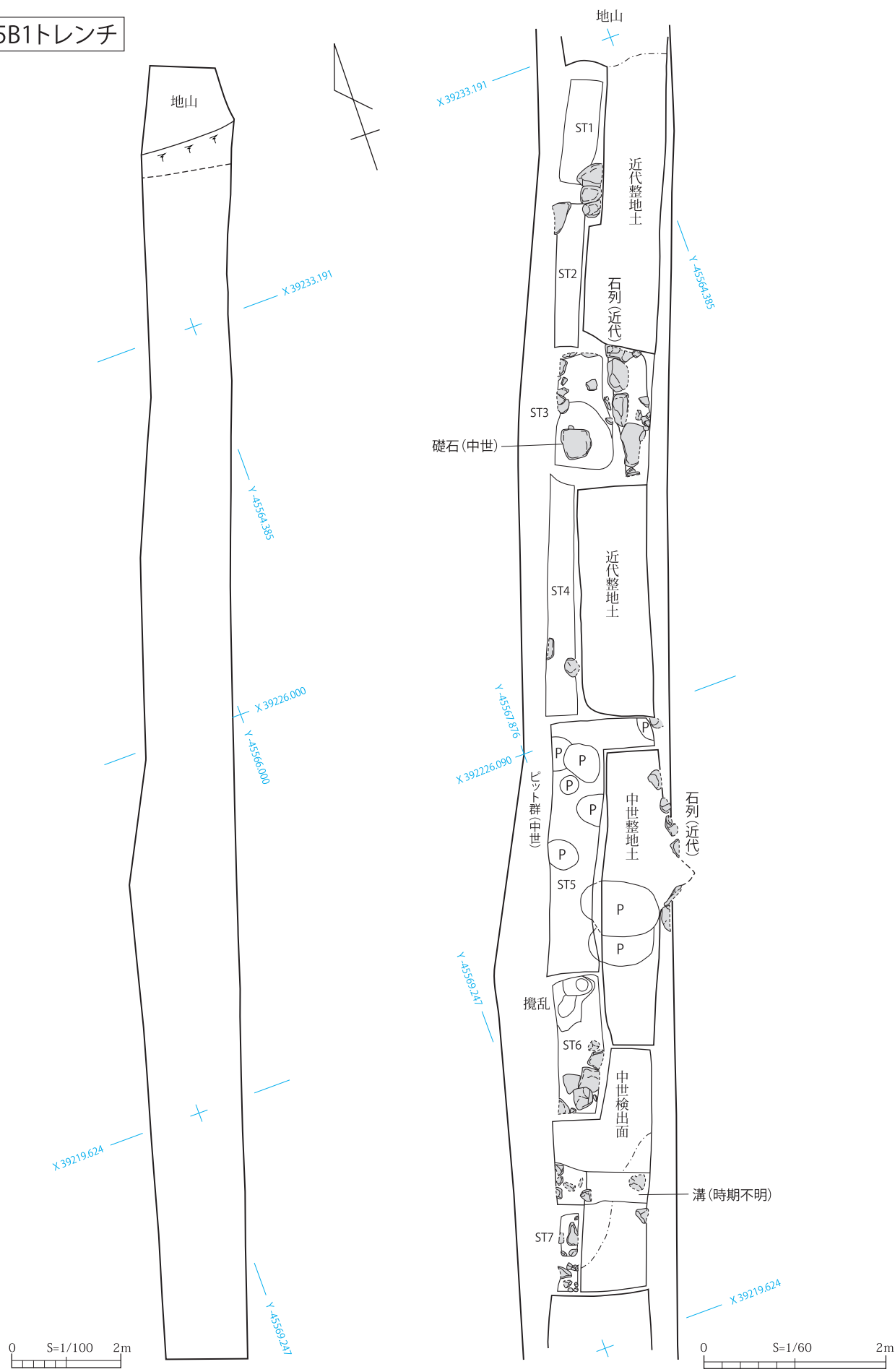
4 5B3 トレンチ (第3表、第3・7・8・14・15 図)

トレンチの概要 現南校舎の南東に接する標高631.0m地点に設けた幅2.6～3.7m・東西9.2m、面積29㎡のトレンチである。一帯は現南校舎建設に際し一段低かった校地を埋め立てた1.4mに達する盛土が覆い、その直下に近世末～近代の整地層と遺構面を確認して面的な調査を実施した。その結果、中世の遺構は捉えられなかったものの、補陀寺から廃寺後の思誠館としての歩みに関わる遺構・遺物等の成果を得た。

土層構成 上記の造成土直下には、現校舎以前の地表を構成していた焼土・炭・漆喰を含み近世末～近代の遺物を含む整地土層が25cm内外の厚さで広がり、これを除去すると一部被熱あるいは炭化した部分を含む硬化平坦面が現れた。この硬化面は旧地表土である黒色土をベースとし、表面は非常に堅く締まる。ベースの黒色層は東側で厚く最大50cmを図り、表面からのわずかな中世遺物とともに層内からは縄紋早・前期の遺物がまとまって出土した。黒色土下は岩井堂沢堆積物である黄褐色シルト層が広がる。

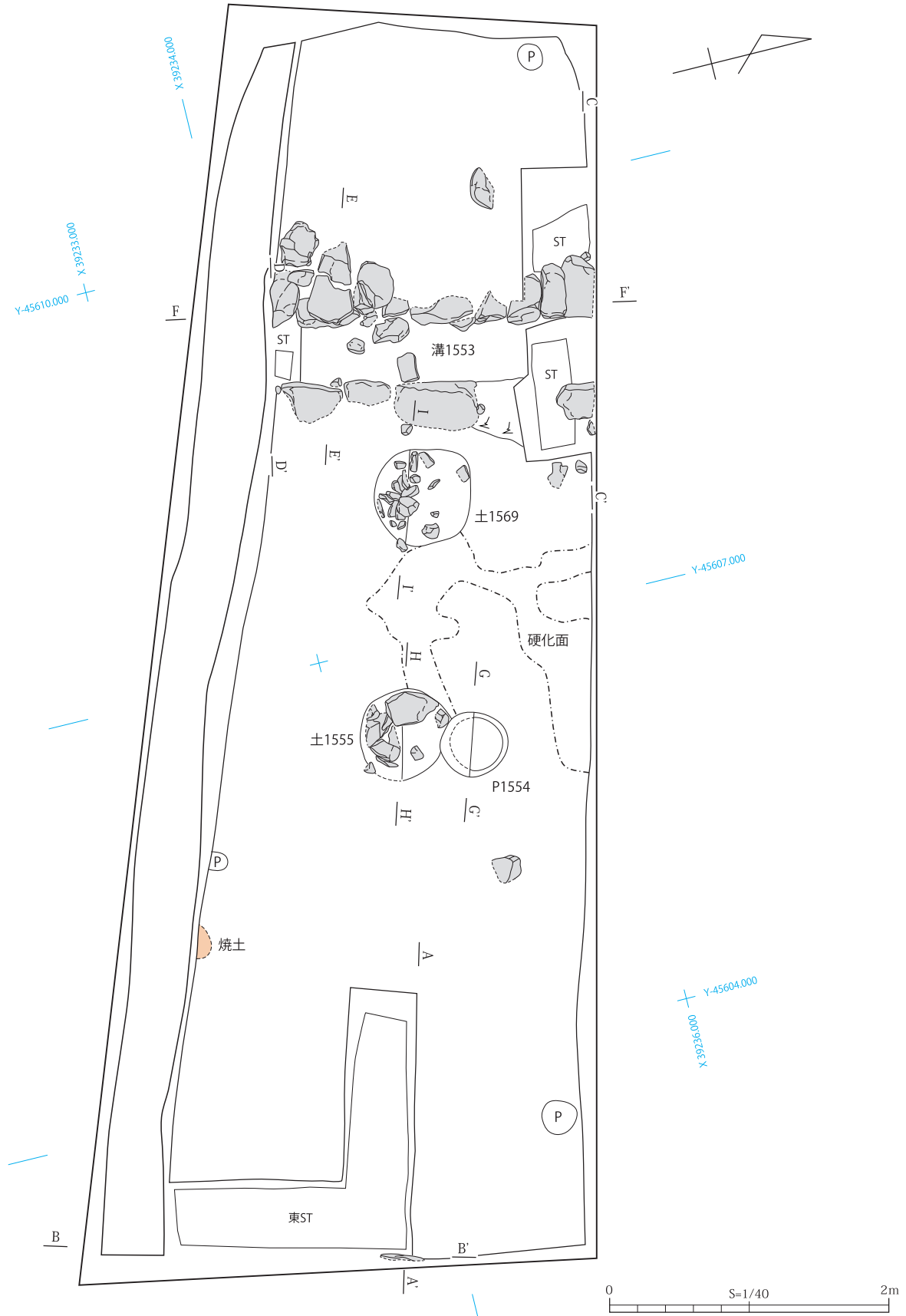
遺構・遺物の概要 硬化平坦面上の東寄りから側壁を石列とする幅45cm・深さ24cmを図る南北の溝1553が検出され、覆土に砂の堆積がみられる。硬化平坦面による空間の区画溝とみられ、西側の石列天端とそれに続く地盤は一段高く硬化も不明瞭となる。一方硬化面上からは礎石の掘り方とみられる浅い円形土坑1555・1569が検出され、うち土1555には礎石が残存する。周辺からは陶磁器、石筆と石版、硯、鉄釘、寛永通宝・文久永宝及び硬貨等明治期を主体に近世までの遺物が得られた。調査地の位置から見て、硬化面と一連の遺構は、維新後寺から学校に移り変わった補陀寺の最後の姿を現しているものと理解されよう。

5B1トレンチ



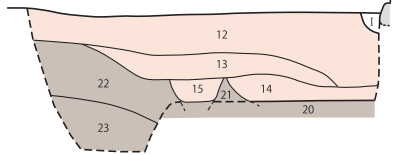
第13図 5B1トレンチ

5B3トレンチ



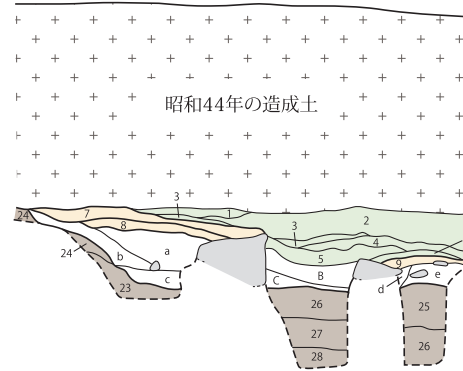
第14図 5B3 トレンチ (1)

A A' 629.900m

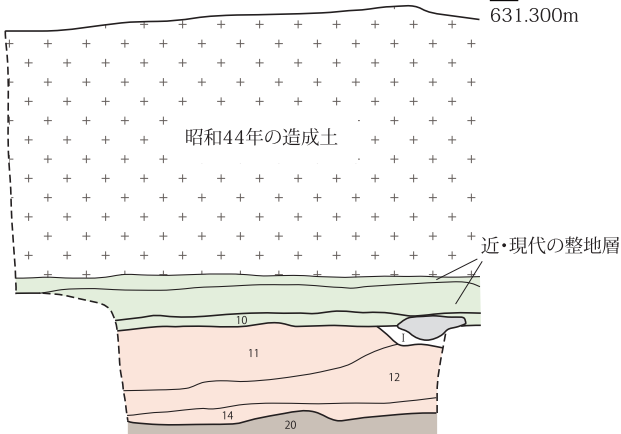


I 10YR2.5/1 黒～黒褐色 弱粘質土 しまりあり 炭粒子・焼土小粒子1%、風化地山黄色度粒子1%含む。礎石掘り方覆土

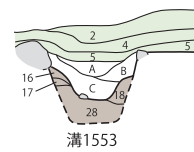
C C' 631.000m



B B' 631.300m



D D' 630.100m



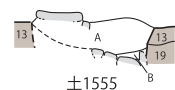
E E' 630.100m



F F' 630.100m



H H' 630.000m



G G' 630.000m



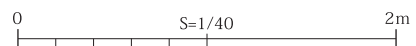
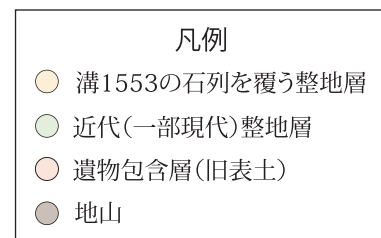
G-G'
 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 灰溜まりか
 2 炭層 赤褐色砂岩塊混入
 3 7.5Y3/3 暗褐色 シルト 砂質土
 4 10YR2.5/3 黒褐色～暗褐色 砂質土 しまりなし
 φ～2cm大細礫1%、地山泥岩塊小粒子3%含む

H-H'
 1 10YR3.5/4 暗褐色～褐色 砂礫層(中粒砂+φ～5cm大礫7%)
 2 10YR3/3.5 暗褐色 粘質土 しまりあり φ～15cm大角礫含む

I I' 630.000m



I-I'
 1 10YR2/3 黒褐色 弱粘質土 ブロック状に入るがもろい
 炭粒子・焼土小粒子3%、φ～15cm大礫25%、瓦片多量含む
 ガラスも上層に混入する



第15図 5B3 トレンチ (2)

第3表 土層一覽

No.	土色	土質	しまり	粘性	含有物	面	性格	堆積	備考
5A1トレンチ 壁面土層									
1	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂	かなり強い	ほとんどなし	明褐色土粒子～塊10%・黄褐色土粒子3%・黒色土粒子3%・白色土粒子5%・赤色土塊1%・炭粒子～塊2%含む。	1面	1面整地土	人為堆積
2	10YR6/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	弱い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子7%・白色土粒子～塊7%・泥岩塊15%・炭粒子～塊5%含む。	2面	2面整地土	”
3	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	強い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子2%・白色土粒子～塊10%・炭塊1%含む。	”	”	”
4	10YR5/6	黄褐	極細粒砂	あり	やや弱め	黒色土粒子3%・泥岩塊80%含む。	”	”	”
5	10YR5/4	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	ほとんどなし	明褐色土粒子～塊7%・黒色土粒子～塊5%・泥岩塊70%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	”
6	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	あり	あり	明褐色土粒子～塊7%・黒色土粒子3%・泥岩塊80%含む。	”	”	”
7	10YR4/6	褐	シルト	強い	強い	灰白色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊7%・泥岩塊30%・砂岩塊20%含む。	”	”	”
8	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊7%・白色土粒子5%・泥岩塊15%・炭粒子～塊5%含む。	”	”	”
9	10YR5/6	黄褐	極細粒砂	あり	あり	黒色土粒子10%・泥岩塊60%・炭粒子2%含む。	”	”	”
10	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂	強い	強い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子5%・白色土粒子2%・泥岩塊40%・炭粒子～塊2%含む。	”	”	”
11	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	あり	明褐色土粒子～塊20%・黄褐色土粒子～塊7%・黒色土粒子～塊5%・白色土粒子2%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	”
12	10YR5/6	黄褐	極細粒砂	あり	強い	明褐色土粒子～塊20%・灰白色土粒子～塊15%・泥岩塊20%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	”
13	10YR5/8	黄褐	細粒砂	弱い	弱い	黒色土粒子3%・褐鉄砂20%・泥岩塊15%・炭塊2%含む。	”	”	”
14	10YR4/6	褐	細粒砂	あり	強い	黒色土粒子5%・白色土粒子～塊2%・泥岩塊30%・砂岩塊3%・炭粒子～塊10%含む。	”	”	”
15	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂	あり	あり	明褐色土粒子～塊20%・黄褐色土粒子～塊5%・白色土粒子～塊10%・泥岩塊5%・炭粒子～塊7%含む。	”	”	”
16	7.5YR5/6	明褐	極細粒砂	あり	あり	灰白色土粒子2%・黒色土粒子3%・泥岩塊5%・炭粒子～塊5%含む。	3面新	3新段階の堆積土	自然堆積 橙色に変色した水成堆積層
17	7.5Y4/1	灰	粘土	あり	強い	明褐色土粒子～塊15%・黒色土粒子3%・白色土粒子～塊5%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	”
18	10YR6/1	褐	粘土	あり	強い	明褐色土粒子～塊20%・白色土粒子～塊7%・炭粒子～塊7%含む。	”	”	”
19	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂	あり	あり	明褐色土粒子～塊20%・黄褐色土粒子～塊5%・白色土粒子～塊10%・泥岩塊5%・炭粒子～塊7%含む。	”	3新整地土	人為堆積 石積Fの裏込め土
20	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	あり	強い	明褐色土粒子～塊7%・黄褐色土粒子～塊5%・白色土粒子～塊10%・泥岩塊3%・炭粒子～塊5%含む。	”	”	”
21	10YR6/3	にぶい黄褐	極細粒砂	やや弱め	強い	明褐色土粒子～塊10%・灰白色土粒子～塊5%・黒色土粒子3%・泥岩塊20%・炭粒子2%含む。	”	”	”
22	10YR3/4	暗褐	極細粒砂	強い	あり	明褐色土粒子3%・黒色土粒子～塊5%・白色土粒子1%・φ60mm礫2%・炭粒子～塊5%含む。	”	”	”
23	10YR6/6	明褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊5%・白色土粒子～塊7%・泥岩塊50%含む。	”	”	”
24	10YR4/6	褐	極細粒砂	かなり強い	あり	明褐色土粒子～塊15%・灰白色土粒子～塊3%・黒色土粒子～塊5%・泥岩塊60%含む。	”	”	”
25	10YR5/6	黄褐	シルト	強い	あり	明褐色土粒子～塊5%・灰白色土粒子～塊7%・黒色土粒子～塊5%・泥岩塊30%・炭粒子～塊2%含む。	”	”	”
26	10YR5/6	黄褐	シルト	あり	強い	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子～塊5%・黒色土粒子～塊7%・泥岩塊10%含む。	”	”	”
27	7.5YR4/6	褐	極細粒砂	強い	あり	明褐色土粒子～塊20%・黄褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊3%・泥岩塊2%含む。	”	”	” 橙色に変色
28	10YR6/1	褐灰	シルト	あり	強い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊15%・白色土粒子～塊7%・泥岩塊3%含む。	”	”	”
29	10YR5/1	褐灰	粘土	あり	あり	明褐色土粒子～塊15%・黄褐色土粒子2%・黒色土粒子7%・白色土粒子～塊10%・炭粒子1%含む。	”	”	”
30	10YR5/2	灰黄褐	シルト	あり	強い	灰白色土粒子～塊5%・黒色土粒子～塊3%・灰黄褐色土粒子～塊15%・泥岩塊7%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	”
31	10YR3/2	黒褐	シルト	やや弱め	あり	明褐色土粒子～塊5%・黒色土粒子～塊3%・白色土粒子～塊5%・泥岩塊2%含む。	”	”	”
32	10YR4/2	灰黄褐	シルト	あり	あり	明褐色土粒子～塊15%・黒色土粒子～塊10%・白色粘土塊50%含む。	”	”	”
33	10YR5/2	灰黄褐	粘土	あり	あり	明褐色土粒子～塊20%・灰白色土粒子～塊5%・泥岩塊3%含む。	”	”	”
34	10YR7/1	灰白	シルト	あり	あり	明褐色土粒子～塊30%・黒色土粒子～塊10%・白色土粒子3%・褐鉄2%・泥岩塊5%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	” 中世遺物包層
35	5BG5/1	青灰	粘土	やや弱め	強い	明褐色土粒子～塊15%・黄褐色土粒子3%・白色土粒子1%・泥岩塊2%・炭粒子～塊10%含む。	3面中	3中段階の堆積土	自然堆積 石積Fの基盤土、木器包層、部分的に砂質
36	10YR5/6	黄褐	極細粒砂	強い	やや弱め	明褐色土粒子～塊10%・灰白色粘土塊10%・黒色土粒子～塊3%・泥岩塊15%・φ30～40mm礫微量含む。	”	”	”
37	5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土	やや弱め	やや弱め	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子3%・白色土粒子～塊5%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	” 部分的に砂が混ざる
38	10BG4/1	暗青灰	極細粒砂	弱い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊7%・炭粒子～塊2%含む。	”	”	” 検出当初は黒色
39	2.5GY3/1	暗オリーブ灰	粘土	弱い	強い	黄褐色土粒子～塊5%・炭粒子～塊3%含む。	”	”	” 木器包層
40	10YR5/6	黄褐	シルト	強い	あり	明褐色土粒子～塊5%・灰白色土粒子～塊7%・黒色土粒子5%・炭粒子～塊2%含む。	”	”	”
41	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	やや弱め	弱い	明褐色土粒子10%・灰白色土粒子～塊30%・黄褐色土粒子5%・φ150mm礫微量含む。	2面	土塁南空間整地土	人為堆積
42	10YR4/6	褐	シルト	やや弱め	やや弱め	明褐色土粒子1%・灰白色土粒子～塊5%・黄褐色土粒子5%・泥岩塊20%・φ50mm礫1%・炭粒子1%含む。	”	”	”

No	土色		土質	しまり	粘性	含有物	面	性格	堆積	備考
43	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	強い	強い	灰白色土粒子～塊5%・黄褐色土粒子5%・泥岩塊10%・φ～10mm礫1%含む。	2面	土塁南空間整地土	人為堆積	
44	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	強い	やや弱め	灰白色土粒子1%・黄褐色土粒子1%・泥岩塊1%・φ50mm礫1%・炭粒子1%含む。	〃	〃	〃	
45	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト	強い	やや弱め	灰白色土粒子10%・黄褐色土粒子10%・泥岩塊1%・φ50mm礫1%・炭粒子1%含む。	〃	〃	〃	
46	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	強い	強い	灰白色土粒子10%・黄褐色土粒子5%・泥岩塊1%・φ40mm礫1%・炭粒子～塊1%・焼土粒子微量含む。	〃	〃	〃	
47	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	強い	強い	灰白色土粒子30%・黄褐色土粒子5%・泥岩塊微量・炭粒子～塊1%含む。	2'面	〃	〃	
48	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	やや弱め	強い	灰白色土粒子1%・黄褐色土粒子1%・泥岩塊5%・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	
49	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	やや弱め	やや弱め	灰白色土粒子1%・黄褐色土粒子1%・泥岩塊1%・炭粒子微量含む。	〃	〃	〃	
49'	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	やや弱め	やや弱め	49層に類似。	〃	〃	〃	
50	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	強い	強い	灰白色土粒子50%・黄褐色土粒子5%・泥岩塊微量・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	
51	10YR4/1	褐灰	粘土	弱い	強い	黄褐色土粒子1%・茶褐色土粒子1%・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	
52	10YR5/2	灰黄褐	粘土	弱い	強い	黄褐色土粒子5%・茶褐色土粒子5%・φ30mm礫微量・炭粒子1%含む。	〃	〃	〃	
53	10YR4/1	褐灰	粘土	弱い	強い	黄褐色土粒子1%・茶褐色土粒子10%・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	
54	10YR4/1	褐灰	粘土	弱い	強い	黄褐色土粒子1%・茶褐色土粒子1%・φ30mm礫1%・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	
55	10YR5/6	黄褐	極細粒砂	かなり強い	あり	明褐色土粒子～塊10%・灰白色土粒子3%・黒色土粒子～塊10%・炭粒子2%含む。	3面中	3中整地土	〃	石積B3被覆土
56	10YR3/2	黒褐	極細粒砂	あり	強い	明褐色土粒子2%・灰白色土粒子～塊5%・泥岩塊10%・炭粒子2%含む。	〃	〃	〃	石積B3に伴う、天端石破壊時に流入か
57	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	灰白色土粒子～塊15%・黒色土粒子～塊10%・焼土粒子微量・泥岩塊50%含む。	〃	〃	〃	石積B3裏込め土
58	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	灰白色土粒子～塊15%・黒色土粒子～塊5%・泥岩塊50%含む。	〃	〃	〃	〃
59	10YR5/4	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	ほとんどなし	黒色土粒子5%・白色土粒子2%・泥岩塊3%・φ10mm礫微量含む。	〃	〃	〃	〃
60	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	やや弱め	灰白色土塊50%・黒色土粒子～塊7%・泥岩塊15%含む。	〃	〃	〃	〃
61	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	ほとんどなし	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子～塊30%・黒色土粒子～塊10%・泥岩塊5%・砂岩塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
62	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	やや弱め	灰白色土粒子～塊10%・黒色土粒子5%・泥岩塊70%含む。	〃	〃	〃	〃
63	10YR7/2	にぶい黄橙	シルト	あり	強い	灰白色土粒子～塊15%・黄褐色土粒子～塊20%・黒色土粒子～塊15%・泥岩塊20%含む。	〃	〃	〃	〃
64	10YR4/3	にぶい黄橙	極細粒砂	強い	弱い	灰白色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊5%・赤褐色土粒子2%・褐色土粒子～塊5%・泥岩塊20%・φ30～40mm礫2%・φ80～100mm礫微量含む。	〃	〃	〃	〃
65	10YR4/4	褐	極細粒砂	強い	あり	灰白色土粒子3%・黒色土粒子～塊7%・泥岩塊5%含む。	〃	〃	〃	〃
66	10YR3/3	暗褐	極細粒砂	あり	強い	明褐色土粒子～塊5%・灰白色土粒子～塊10%・黒色土粒子3%・泥岩塊60%含む。	〃	〃	〃	〃
67	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	あり	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子～塊5%・黒色土粒子3%・褐色土粒子～塊15%・泥岩塊30%・φ10mm礫2%含む。	〃	〃	〃	〃
68	10YR3/2	黒褐	極細粒砂	やや弱め	あり	明褐色土粒子2%・黒色土粒子～塊2%・赤色土粒子1%・褐色土粒子3%・泥岩塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
69	10YR4/3	にぶい黄橙	シルト	強い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊30%・暗褐色土粒子1%・泥岩塊30%・炭粒子微量含む。	3面古	3面整地土	人為堆積	3面整地土・石積B2裏込め土
70	10YR4/4	褐	粘土	あり	強い	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊5%・泥岩塊20%含む。	〃	〃	〃	石積B2基盤土
71	10YR4/2	灰黄褐	粘土	あり	強い	明褐色土粒子10%・灰白色土粒子～塊7%・黒色土粒子～塊5%・赤色土粒子1%含む。	4面	4面段階堆積土	自然堆積	
72	7.5Y3/1	オリーブ黒	粘土	あり	あり	明褐色土粒子7%・白色土粒子2%・炭粒子～塊3%含む。	〃	4面整地土	人為堆積	土塁構築後石積前空間底面に貼ったか
73	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	強い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊5%・赤色土粒子1%・褐色土粒子～塊20%・泥岩塊3%・炭粒子～塊5%含む。	〃	〃	〃	土塁盛土
74	10YR3/2	黒褐	シルト	あり	強い	黄褐色土粒子3%・褐色土粒子～塊5%・焼土粒子1%・泥岩塊3%・炭粒子～塊5%含む。	〃	〃	〃	〃
75	10YR4/2	灰黄褐	シルト	強い	強い	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子3%・黒色土粒子～塊7%・赤色土粒子2%・炭粒子～塊5%含む。	〃	〃	〃	〃
76	10YR4/2	灰黄褐	シルト	あり	強い	明褐色土粒子～塊5%・黄褐色土粒子～塊2%・黒色土粒子～塊5%・赤色土粒子1%・褐色土粒子～塊5%・泥岩塊7%・φ80mm礫微量・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
77	10YR4/4	褐	シルト	強い	あり	褐色土粒子～塊30%・泥岩塊7%・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	鉄分多い
78	10YR3/3	暗褐	シルト	強い	強い	明褐色土粒子3%・灰白色土粒子2%・黒色土粒子3%・泥岩塊7%・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
79	10YR4/2	灰黄褐	粘土	強い	強い	灰白色土粒子～塊15%・黄褐色土粒子～塊5%・褐色土粒子～塊10%・泥岩塊7%・炭粒子～塊3%含む。	〃	〃	〃	〃
80	10YR3/4	暗褐	極細粒砂	あり	あり	明褐色土粒子3%・灰白色土粒子～塊3%・黒色土粒子～塊2%・泥岩塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
81	10YR4/2	灰黄褐	粘土	あり	強い	明褐色土粒子～塊7%・灰白色土粒子2%・黒色土粒子～塊2%・泥岩塊10%含む。	〃	〃	〃	〃
82	10YR3/2	黒褐	極細粒砂	強い	強い	明褐色土粒子～塊5%・白色土粒子3%・暗褐色土粒子～塊30%・泥岩塊2%・炭粒子～塊3%含む。	〃	〃	〃	〃
83	10YR4/2	灰黄褐	極細粒砂	強い	強い	明褐色土粒子10%・黒色土粒子5%・砂岩塊30%含む。	〃	〃	〃	〃
84	10YR3/1	黒褐	粘土	強い	強い	灰白色土粒子～塊3%・黄褐色土粒子～塊2%・焼土粒子1%・泥岩塊3%・炭粒子～塊7%・炭化木片2%含む。	〃	〃	〃	〃

No.	土色	土質	しまり	粘性	含有物	面	性格	堆積	備考	
85	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	強い	明褐色土粒子～塊10%・灰白色土粒子～塊5%・黒色土粒子5%・泥岩塊20%・炭粒子～塊5%含む。	4面	4面整地土	人為堆積	土塁盛土
86	10YR3/1	黒褐	シルト	あり	強い	明褐色土粒子～塊15%・黒色土粒子3%・泥岩塊1%・炭粒子～塊3%含む。	〃	〃	〃	〃
87	10YR3/2	黒褐	シルト	あり	強い	灰白色土粒子～塊7%・黄褐色土粒子5%・黒色土粒子～塊7%・暗褐色土粒子～塊7%・泥岩塊3%・	〃	〃	〃	〃
88	7.5Y3/2	オリーブ黒	シルト	強い	あり	明褐色土粒子～塊5%・白色土粒子～塊5%・泥岩塊2%・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	土塁盛土下層
89	10YR4/2	灰黄褐	シルト	やや弱め	やや弱め	灰白色土粒子5%・茶褐色土粒子～塊20%・炭粒子～塊1%含む。	〃	〃	〃	〃
90	10YR3/2	黒褐	粘土	あり	強い	明褐色土粒子2%・黄褐色土粒子2%・白色土粒子2%含む。	5面	5面段階の堆積土	〃	石列26に伴う
91	10YR3/1	黒褐	シルト	かなり強い	強い	明褐色土粒子～塊3%・灰白色土粒子2%・黒色土粒子5%・暗褐色土粒子～塊10%・φ10mm礫微量・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
92	5Y2/2	オリーブ黒	シルト	強い	やや弱め	明褐色土粒子～塊2%・黒色土粒子1%・白色土粒子～塊3%・泥岩塊1%・炭粒子～塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
93	10YR3/1	黒褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	明褐色土粒子～塊7%・黒色土粒子～塊7%・白色土粒子～塊5%・泥岩塊2%含む。	〃	〃	〃	〃
94	10YR4/1	褐灰	粘土	やや弱め	強い	灰白色土粒子1%・黄褐色土粒子微量・暗褐色土粒子1%・炭粒子1%含む。	〃	5面整地土	〃	土塁造成以前の整地土
95	10YR3/1	黒褐	粘土	あり	強い	灰白色土粒子2%・黄褐色土粒子～塊15%・黒色土粒子～塊7%・炭粒子～塊5%含む。	〃	〃	〃	〃
96	10YR2/1	黒	極細粒砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊15%・黒色土粒子～塊7%・白色土粒子3%・炭粒子～塊3%・木片2%含む。	〃	〃	〃	古代の遺物を含む
97	10YR3/2	黒褐	シルト	やや弱め	やや弱め	灰白色土粒子20%・黄褐色土粒子1%・炭粒子微量含む。	地山	地山(旧表土)	自然堆積	地山(造成以前の旧表土)
98	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	明褐色土粒子～塊10%・黒色土粒子～塊7%・白色土粒子～塊5%・泥岩塊15%・炭粒子～塊5%含む。	〃	地山	〃	地山
5A1トレンチ 石列26 (溝状遺構)										
A	10YR3/1	黒褐	極細粒砂	やや弱め	あり	黄褐色土粒子～塊3%・黒色土粒子～塊5%・炭粒子～塊2%含む。	5面	遺構覆土	自然堆積	石列26に伴う溝覆土
5A1トレンチ P1552										
1	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト	あり	強い	明褐色土粒子～塊5%・黄褐色土粒子3%・灰白色土塊1%・黒色土粒子2%・炭粒子1%含む。	2面	遺構覆土	自然堆積	断面図は未掲載
5B3トレンチ 壁面土層										
1	10YR2.5/1	黒～黒褐	粘質土			φ～1cm大礫3%含む。		近代～現代		
2	10YR3/1	黒褐	弱粘質土			φ～5cm大礫7%・焼土粒子・極小炭粒子5%含む。ガラス片混		〃		
3	10YR3/1.5	黒褐	弱粘質土			φ～1cm大礫1%・泥岩粒子2%含む。		近代		
4	10YR2.5/1	黒～黒褐	弱粘質土	あり		φ～2cm大礫1%・泥岩小粒子1%含む。		〃		漆喰層
5	10YR3/1	黒褐	弱粘質土	ややあり		φ～3cm大礫1%・焼土粒子・極小炭粒子3%含む。		〃		
6	10YR4/2	灰黄褐	細粒砂		あり	やや粘土混じり。		近世か		自然
7	10YR2.5/1	黒～黒褐	弱粘質土	強い		焼土・炭小粒子3%含む。		近代	石列を覆う整地層	
8	10YR2.5/2	黒褐	弱粘質土			砂混入が多い。混じり少なく均一な層。		〃	〃	
9	10YR2.5/2	黒褐	弱粘質土			φ～0.5cm大砂利2%・泥岩小粒子1%含む。		〃	〃	
10	10YR2.5/1	黒～黒褐	弱粘質土	あり		φ～2cm大礫1%・風化泥岩小粒子1%・漆喰が多量に混入。		近代		
11	10YR2.5/1.5	黒～黒褐	弱粘質土	強い		φ～3cm大礫2%・風化地山小粒子2%含む。上面に硬化面。その上に薄く炭層が乗る。		縄紋～中世		縄紋～中世遺物包含層(旧表)
12	10YR2/1	黒	弱粘質土	あり		φ～2cm大礫1%・風化地山粒子(砂岩が多い)5%含む。		〃		〃
13	10YR2/2	黒褐	砂質土	やや強い	なし	φ～1cm大地山粒子(泥岩が多い)10%・極小炭粒子5%含む。		〃		〃
14	10YR3/1	黒褐	弱粘質土	あり		砂粒子多量混入、極小風化砂岩粒子1%含む。		〃		〃
15	10YR2/3	黒褐	砂質土	強い	ほとんどなし	φ～0.5cm大風化泥岩粒子7%・極小炭粒子3%含む。		〃		〃5層より明るい
16	10YR3/1	黒褐	弱粘質土	あり		黄褐色粘土小粒子1%・炭粒子3%含む。		縄紋～中世		
17	10YR2/2.5	黒褐	弱粘質土	強い		φ～2cm大黄褐色粘土中粒子1%・砂多量混入。		〃		
18	10YR2.5/1	黒～黒褐	弱粘質土	強い		泥岩小粒子5%含む。		〃		
19	10YR3.5/3	暗褐～にぶい黄褐	細粒砂			φ～1cm大泥岩塊1%・礫混入なし。		地山		
20	10YR4/2	灰黄褐	中粒砂礫			φ～5cm大礫15%含む。		〃		
21	10YR2.5/3	黒褐～暗褐	中粒砂	ややあり		φ～0.5cm大泥岩粒子7%含む。		〃		
22	10YR3/2	黒褐	砂礫			φ～10cm大風化泥岩粒子20%含む。		〃		
23	10YR3/4	暗褐	中粒砂礫			φ～10cm大礫25%含む。		〃		
24	10YR4/4	褐	砂礫			φ～1cm大砂利25%含む。		〃		
25	10YR5/3.5	にぶい黄褐	細粒砂			φ～2cm大礫30%含む。		〃		
26	10YR5/6	黄褐	粘質土			φ～10cm大礫20%・φ～20cm大礫多量に含む。		〃		
27	10YR4/6	褐	砂礫			φ～1cm大礫30%含む。		〃		鉄分の影響で赤味帯びる
28	10YR4/6	褐	中粒砂					〃		〃
5B3トレンチ 溝1553										
A	10YR2/3	黒褐	砂質土			φ～0.5cm大礫2%含む。		近代～現代	溝1553堆積土	
B	10YR4/2	灰黄褐	細粒砂			φ～0.5cm大礫5%含む。		〃	〃	
C	10YR3/1	黒褐	弱粘質土			φ～5cm大礫5%含む。		〃	〃	
5B3トレンチ 石列掘り方埋土										
a	10YR2/2	黒褐	弱粘質土	ややあり		φ～3cm大礫5%・極小焼土粒子3%含む。		〃	石列掘り方埋土	
b	10YR3/1	黒褐	弱粘質土	あり		φ～1cm大礫10%・極小泥岩粒子5%含む。		〃	〃	
c	10YR3/1.5	黒褐	砂質土	あり		φ～1cm大礫1%含む。		〃	〃	
d	10YR2/3	黒褐	砂質土	ややあり		φ～3cm大礫5%含む。		〃	〃	
e	10YR3/3	暗褐	砂礫	強い		φ～5cm大礫20%含む。		〃	〃	石列裏込めか

第3節 遺物

1 焼物（第4～6表、第16～18図）

(1) 概要

5次調査では、5A1 トレンチを中心に縄紋時代から近世初頭までの土器・陶磁器 110 点が出土した。本報告では、そのうち 62 点について図示したが、中世のものについては破片すべてを観察表に掲載した。以下、トレンチ毎に概要を記すが、それに先立って出土量が多い土師質土器皿については分類作業を行っておきたい。なお、下記により定義した土師質土器皿以外の器種の分類記号については、巻末の文献に拠った。

(2) 土師質土器皿の器種分類（第5表、第18図）

皿は 1 次調査出土品を中心にこれまで 782 点を得ている。これらは中世前半期に属する若干の例外を除いて底部に回転糸切り痕を残すロクロ成形品に限られる。今回、1 次調査以降の全資料を総覧した結果、胎土および器形に一定の傾向が認められ、両者の組み合わせによって大まかな器種分類が可能となった。

その際、遺跡の中心時期となる 15～16 世紀代、武家や宗教勢力等社会の上位階層にあつては、儀礼の器として欠かせない皿に京都志向が窺えることは既に知られているところである。従つて、形態的に京都系への志向が認められ、かつ胎土も精選された上質のものが高級品として選択されたであろうとの観点に立ち、まずは胎土による群別を行った後、器形による類別を試みた。

ア 胎土による群別

1 群 内耳鍋と似た砂質の粗い胎土を指標とするが、粗密の度合いに若干の幅を有する。褐色～暗褐色を呈し、底部を中心に全体的に厚手のものが多い。なお、本群と同じ胎土で、口径が 17 cm～20 cm を超えかつ手持ちヘラ削りにより胴部下半～底部外周を削り取るものについては、大型皿と呼称して区別する。

2 群 細密な素地に若干の微砂粒を含む胎土で、鮮やかな橙色を呈する。赤色粒子を含むものが多い。本群は薄手のものが主体的だが、厚手のものも一定量みられる。

3 群 砂粒を含まない極めて精良な胎土で徹底した水簸が行われている。表面は白色～淡い橙色を呈し、断面は黒色となる。素地がきめ細かいため風化を受けやすい。他 2 群に比べて底部から口縁部まで非常に薄手かつ調整も丁寧になされ、見込みも平らに処理される。口縁端部は尖り気味のものが多い。

イ 器形による小区分

A 類 立ち上がりから口縁部まで直線的な杯形を呈するもの。浅いものと深いもの、開きの強いものとそうでないもの、腰がやや丸みを帯びるものとそうでないものがある。口縁部端部は直縁かやや外反する。

B 類 腰が張り立ち上がりから口縁部まで内湾傾向の椀形を呈するもの。浅いものと深いものがある。口縁部は内湾するものからやや外反気味に収めるものまである。

C 類 大きく開く形態。椀形に内湾して開いた後、胴部中位でくびれてさらに開く。概して深い。くびれた後口縁部を内湾気味に納めるものと (Ca)、長く外反させるもの (Cb) がある。

これ以外に、A・B 類には底部からの挽き出しに強いナデが行われた結果、腰がくびれ底が突出したようなものが一定量見られる。また 1・2 群では、胴部の挽き出しにより見込み外周が窪み、中央部が島状に高まるものがしばしば認められる。高まりの中心部に一定方向のナデを施すものがあり、1 次調査概報でこれを A タイプとし、3 面段階以前の古い時期に多いことを確認した。一方 3 群の場合は前述のように成形段階から薄く平滑に整えており、そもそも高まりになることがない。

ウ 胎土・器形による組み合わせ

群と器形の関係について、その傾向を第5表に従って群別にみると、1群はBが主体で5割強あり、次いでA類、Ca類が見られる。Cb類は稀である。2群はA・B類がほぼ同じ割合で主体を占め、C類は稀である。一方3群ではB・Cb類のみほぼ同じ割合で主体となり、A・Ca類は稀な存在である。3群は精良・薄手が徹底されるがそれは器形にも当てはまり、同じ椀形のB類であっても、3群のそれは丸みのある非常に美しいプロポーションを呈することが多いうえ、深い形態は皆無である。また、Cb類は大きく開く形態から、ロクロ成形ではあっても京都系皿への志向が強く窺え、3群に固有のものといえる。

基本的な分類については以上であるが、第Ⅲ章ではさらにサイズや数量比等についても言及する。

(3) 5A1 トレンチ出土遺物 (第4表、第16・17図)

奈良・平安時代及び中世に帰属する75点が出土し46点を図示し得た。全体の8割近い58点が土塁南空間の埋め立てに係る2面・2”面整地土からの出土品である。

器種・器形は土師質土器皿39点・大型皿4点・内耳鍋15点、炆器(常滑)甕1点、瓦質土器風炉・火鉢4点、無釉陶器捏鉢1点、古瀬戸・大窯天目茶碗3点・碗または皿3点・盤1点・播鉢1点、中国産青磁碗3点、白磁碗または皿1点がある。その構成を集計表に示す(第6表)。以下、遺構・層位別に概観する。

ア 5面(1～4)

奈良・平安時代(1～3) 黒色土器Aの杯または椀の口縁部片(3)、須恵器杯A(1)および杯B(2)の底部片、他に壺の把手が出土している。1はP1558、他は96層の出土である。

土師質土器 皿(4) 整地層出土の2点のうち1点を図示した。4は2A類の口縁部片で、端部は面取りされる。他に1群の小片がある。

イ 4面(5～7)

土塁盛土である黒色土中から8点が出土しており、盛土の由来を示唆している。

奈良・平安時代(5・6) 黒色土器A椀が1点、須恵器杯Aが2点、杯Bが1点、壺類1点、土師器甕B・Cが各1点ある。うち須恵器杯A・Bの2点を図示した。

土師質土器 皿(7) 1C類が1点ある。厚手で中位のくびれは弱めである。

ウ 3面中段階(8・9)

石積B3西側、石積前空間に堆積する木器包含層からの出土品である。

土師質土器 内耳鍋(9) 9は胴部1/2が残存する。若干開き気味に直立する胴部からくの字状に外屈・直開する口縁部が取りつき、肉厚な作りである。屈折部のヨコナデは弱く、また口縁部内面に凹線はみられない。耳はやや上向きに1対が貼付される。A類、15世紀代に位置づく古手の形態だが、口径に比して器高は低めといえようか。3面段階以前の資料で器形の判明するものとしては初出である。

陶器(古瀬戸) 縁釉小皿(8) 回転糸切り痕を残す底部片で、灰釉を胴部内外面に施釉、底裏は露胎となる。見込みに刷毛塗り施釉を施すA類で後I～II期前半(14世紀後半)に位置づくものであろう。

エ 3面新段階(10・11)

石積Fの裏込整地土層中からの出土品である。

土師質土器 皿(10・11) 10は2C類の口縁部片で、同一個体片が複数あるが接合しない。11もおそ

らく 2C 類と思われる底部で、底部が張り出し、見込みにはナデを行う

陶器（古瀬戸） 擂鉢 茶褐色の釉が掛かる胴部外面のみの剥片が出土している。

磁器（青磁） 碗か 灰色の胎土で薄手の器壁に淡緑色・ガラス質の透明釉が内外に施される小片である。

オ 2" 面段階（12～24）

土塁南空間の埋め立て土下層からの出土品で、25 点を数える。

奈良・平安時代（12・13） 黒色土器 A の杯 A または碗の小片 2 点、底部に回転糸切り痕を残す須恵器杯 A 片が 3 点（12・13）出土している。

土師質土器

皿（14・15・16・19） 4 点を図示した。1 群は 15・16・19 がある。15 は全形不明、16・19 は 1C 類である。他に 1B 類がある。2 群は 4 点を数え、器形の分かる 3 点（14）はいずれも 2B 類である。3 群は小片 2 点を得、うち 1 点は 3B 類である。

なお、3 点（14・19）は灯明として使用されている。

大型皿（17・18） 17 は内湾気味に大きく開く口縁部片、18 は底部片で立ち上り外面に手持ちヘラ削りを行う。いずれも皿 1 群と同じ内耳質の粗い胎土で厚い。

内耳鍋（20～22） 口縁部片 2 点、底部片 1 点を得た。20 はほぼ直立する口縁部で、内面にヨコナデによる凹線が認められるが、比較的平滑である。21 も同様に直立に近く内面は平滑だが、外面が分厚く膨らみ気味となる。2 点ともに端部は平らな面をなす。

炆器（常滑） 甕の胴部片が 1 点出土している。

陶器（古瀬戸・大窯）

天目茶碗（23） 胴下部片が出土。直線的に開き、地に錆釉を施す。古瀬戸後Ⅱ期頃のものであろうか。

皿（24） 大窯の丸皿等の口縁部片と思われる。淡い緑灰色の釉が掛かる。他に碗ないし皿の腰部と思われる微小破片が 1 点ある。

磁器（白磁） 碗か 図示できない小破片が 1 点出土。薄手で外面にヘラケズリ痕が残る。

カ 2 面段階①（土塁南空間埋め立て土上層、25～39）

39 点が出土し、12 点を提示した。

奈良・平安時代 土師器小型甕 D の破片が 1 点出土した。

土師質土器

皿（25～35） 1 群は 6 点中 3 点を図示した。33～35 はいずれも 1B で、34 は小径の割に分厚い。他に 1A・1B がみられる。2 群は 7 点あり 4 点を示した。29～31 はいずれも 2A 類で、30 は 2 / 3 が残存する。31 は浅い形態である。3 群は 8 点中 4 点を示した。うち 25 は 3B 類で他にも 3 点がある。26～28 は 3C 類で、26・27 は特に薄手で胴部の開きが大きい扁平な形態となる。28 は全体の 1 / 2 以上が残存し、前二者に比べて底径が大きく胎土も若干質が落ちる。見込み中央はナデにより平滑に仕上げている。なお、29・30 は灯明皿である。

大型皿 図示できないが、厚手の底部片が 2 点得られている。

内耳鍋（36） 7 点出土した。唯一口縁部形状の判明する 36 は頸部に内外から強い横ナデが行われ、内面中位に凹線が 1 条巡る。C-1 類に属し口縁部が内湾しながらやや開く。他に焼成が瓦質に近い胴部片が 1 点ある。

瓦質土器 風炉・火鉢（38） 近接した範囲から 2 点出土した。38 は円形浅鉢Ⅳ類の口縁部で、肉厚の

口縁外面に配した紋様帯は、2条の突線間に花菱紋、突線より下に菊花紋を押捺する。内外面とも光沢のない黒色を呈する。もう1点は底板片で、同一個体かどうかは判断がつかない。

陶器（大窯か）天目茶碗の胴部小片がある。胎土・釉調から大窯に下るものか。

キ 2面段階②（西区平場整地土、32・37・39）

整地土中から散在的に出土した3点を図化提示した。

土師質土器 皿（32） 2A類1個体分の破片6片がばらばらに出土したが接合しない。

瓦質土器 風炉（39） 肩が強く張る鼓胴を呈する風炉の肩部片で、頸部との境に突線を巡らせ、透かし孔を設ける。灰～黒灰色を呈する。

陶器（古瀬戸）天目茶碗（37） 外面がわずかに凹む口縁部片である。胎土は硬緻だが白黒の微粒が混じり合った特徴を示し、瀬戸産ではない可能性も残す。鉄釉は端部近くが茶色を帯びる。

ク その他（40～46）

2面を覆う昭和28年以前の近・現代表土中から11点の焼物を得、7点を図示した。

奈良・平安時代（40） 40は須恵器杯Aの口縁～胴部片である。

土師質土器

皿（41） 3点出土。1群は2点を確認、うち41は1B類である。残り1点は3群である。

内耳鍋（42～44） 42・43は直立に近い口縁部で、内面に凹線状の凹凸を有しB類に属する。44は小型品で、ほぼ直に立ち上がる胴部からくの字状に屈折して外開する口縁部が取りつくようである。A類に属するものか。

瓦質土器 風炉・火鉢類の胴部片1点が出土した。

磁器（青磁）碗（45・46） 龍泉窯系青磁碗で、45は口縁部が外反し釉の厚いD2類、46は直縁で外面に雷紋を描くC2類である。いずれも15世紀中葉からみられるものである。

(4) 5B1 トレンチ出土遺物（第4表、第17図）

本トレンチ出土遺物は6点ある。うち中世に属するものは3点で、残りは近世に下るものである。

48は3群の土師質土器皿でC類の下半部とみられる。49・50は口縁部がほぼ直立する内耳鍋である。49は内面に凹線状の凹凸がみられるが、49は平滑である。どちらも頸部の状況は分からない。

51はやや厚く長石釉の掛かる志野の皿底部、52は見込みに鉄絵が描かれる志野織部の皿底部で、いずれも17世紀初頭に位置づく。47は染付の碗または皿で被熱している。18世紀以降のものであろうか。

(5) 5B3 トレンチ出土遺物（第4表、第17図）

10点の遺物を得た。53～57は縄紋土器片である。時期的には早期～前期にわたるが、いずれも風化が激しい。53・54は単節縄紋を施す。器壁は厚く54は胎土に植物繊維を含む。55は前二者より薄手で砂粒を含む密な胎土である。表面に押型紋（市松紋）を施す。56も比較的密な胎土で薄手である。縦位に撚糸紋を施す。57はかすかに縄紋が観察される。54と同様胎土に植物繊維を含む。60は須恵器の杯蓋Bである。58は土師質土器皿で、3B群の胴部片である。59は内耳鍋の口縁部片で、ヨコナデによる凹凸の激しいB類である。61も内耳鍋の口縁部片とみられるが開きが大きい。62は土師質土器皿2Bの胴部片である。

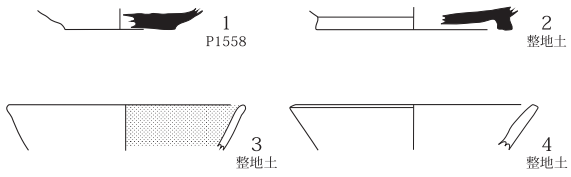
第4表 焼物一覧

図 No.	出土地点			器種		法量 (cm)			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴	
	地区	面	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	釉	胎土		
1	5A1	5	P1558	須恵器	杯A		(5.8)			1/4		淡橙褐	ロクロナデ、底部回転系切り、還元不足	
2	5A1	5	5面整地土96層	須恵器	杯B	(10.4)				1/10		灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ削り、高台貼付	
—	5A1	5	5面整地土96層	須恵器	壺							暗灰～茶褐	ナデ、把手片	
3	5A1	5	5面整地土96層	黒色土器A	杯Aor碗	(12.4)				1/10		暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面ミガキ・黒色処理	
4	5A1	5	5面整地土	土師質土器	皿2A	(12.5)				1/20		橙褐・密	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	
—	5A1	5	5面整地土	土師質土器	皿1			1.5	わずか			淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	
a	5A1	5	5面整地土	陶器(東海系無釉)	掬鉢				わずか			灰	ロクロナデ、胴部片	
b	5A1	5	5面整地土	陶器(古瀬戸)	盤				わずか		灰釉 白～ 黄緑	灰白	ロクロナデ、内外面灰釉施軸	
5	5A1	4	土塁盛土	須恵器	杯A		6.4			1/2		淡灰	ロクロナデ、底部回転系切り	
—	5A1	4	土塁盛土	須恵器	杯A				わずか			茶褐～暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、還元不足	
6	5A1	4	土塁盛土	須恵器	杯B	(9.0)				1/4		青灰	ロクロナデ、底部系切り後回転ヘラ削り、高台貼付	
—	5A1	4	土塁盛土	須恵器	壺か							灰白	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ・ナデ	
—	5A1	4	土塁盛土	土師器	甕B							茶褐～暗褐	内面ナデ、外面縦ハケ、胴部片	
—	5A1	4	土塁盛土	土師器	甕C				わずか			暗褐	内面ナデ、外面ヘラケズリ	
7	5A1	4	土塁盛土	土師質土器	皿1C	(15.0)				1/10		橙褐～黒褐・ やや粗	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面スス付着	
—	5A1	4	土塁盛土	黒色土器A	杯Aor碗				わずか			褐	口縁ヨコナデ、内面ミガキ・黒色処理	
9	5A1	3中	石積前 3面中堆積土	土師質土器	内耳鍋	(32.8)	(26.8)		1/4	わずか		暗褐	口縁部ヨコナデ・耳貼付、胴部内外面ナデ、底面砂目、内 外面スス付着	
8	5A1	3中	石積前 3面中堆積土35層	陶器(古瀬戸)	緑釉小皿		(8.4)			1/6	灰釉 白	淡灰	内面ロクロナデ・ナデ、外面ロクロナデ、底面回転系切 り、胴部内外灰釉施軸(見込み刷毛塗施軸・底裏露胎)	
10	5A1	3新	石積前 3面中堆積土33層	土師質土器	皿2C					わずか		橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
11	5A1	3新	石積前 3面新整地土34層	土師質土器	皿2	(5.6)				1/2		橙褐・密	ロクロナデ、見込みオサエ・ナデ、底部回転系切り	
c	5A1	3新	石積前 3面新整地土33層	陶器(古瀬戸)	掬鉢							鉄釉 茶褐	灰	ロクロナデ、外面鉄釉施軸、内面剥離
d	5A1	3新	石積前 3面新整地土	磁器(青磁)	碗か							青磁 淡緑	灰	ロクロナデ、内外面青磁釉施軸
—	5A1	2"	南区 2"面整地土51層	黒色土器A	杯A				わずか			橙褐	内外面磨減、内面黒色処理	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	黒色土器A	杯Aor碗				わずか			橙褐	内外面磨減、内面黒色処理	
12	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	須恵器	杯A	(5.4)				1/3		青灰	ロクロナデ、底部回転系切り	
13	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	須恵器	杯A	(6.0)				1/4		青灰	ロクロナデ、底部回転系切り	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	須恵器	杯A				わずか			橙褐	ロクロナデ、底部回転系切りか、未還元、底部片	
14	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	皿2B	(9.7)				1/12		橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内面スス付着	
15	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	土師質土器	皿1				わずか			淡褐・やや粗	口縁部ヨコナデ	
16	5A1	2"	南区 2"面整地土48層	土師質土器	皿1C				わずか			淡褐・やや粗	口縁部ヨコナデ	
17	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	大型皿				わずか			淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
18	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	大型皿				わずか			暗褐・やや粗	ロクロナデ、外面ヘラ削り、内面スス付着	
19	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	皿1C	(17.3)				1/12		淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内面タール付着	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土46層	土師質土器	皿1B				わずか			暗褐・やや粗	口縁部ヨコナデ、口縁部片	
—	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	土師質土器	皿3B				わずか			褐・精良	ナデ、胴部片、手づくね成形か	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	皿2B				わずか			褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部片	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	土師質土器	皿2B				わずか			明橙褐・密	口縁部ヨコナデ、口縁部片	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	土師質土器	皿3				わずか			淡褐・精良	ロクロナデ、底部回転系切り、底部片	
—	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	土師質土器	皿2				わずか			橙褐・密	ロクロナデ、底部回転系切り、内外面タール付着、底部片	
20	5A1	2"	南区2"面整地土	土師質土器	内耳鍋				わずか			淡褐～暗褐	口縁部ヨコナデ	
21	5A1	2"	南区 2"面整地土53層	土師質土器	内耳鍋				わずか			茶褐～暗褐	口縁部ヨコナデ、外面スス付着	
22	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	土師質土器	内耳鍋	(23.0)				1/20		暗褐	ナデ、底部砂目、外面スス付着	
e	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	炆器(常滑)	甕				わずか			暗灰	ナデ、赤茶色自然釉、内面茶褐色	
23	5A1	2"	南区 2"面整地土52層	陶器(古瀬戸)	天目茶碗							鉄釉 黒褐	暗灰	ロクロナデ、外面回転ヘラ削り、内面施軸、外面錆軸後鉄 釉施軸、被熱
24	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	陶器(大窯)	皿	(8.8)				1/7		灰釉 淡緑灰	灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、内外面灰釉施軸
—	5A1	2"	南区2"面整地土 50・51層	陶器(古瀬戸か)	碗or皿				わずか			灰釉 淡緑	灰	ロクロナデ、内外面施軸、胴部片
f	5A1	2"	南区 2"面整地土48層	磁器(白磁)	碗か				わずか			白磁 やや緑	白	ロクロナデ、内外面施軸、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師器	小型甕				わずか			暗褐	ロクロナデ、外面カキ目	
25	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿3B	(10.2)				1/9		淡褐・精良	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
26	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	皿3Cb	(13.0)				1/12		淡褐・精良	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
27	5A1	2	南区2面整地土46層	土師質土器	皿3Cb	(12.4)	(2.9)			1/12		褐・精良	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	
28	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	皿3Cb	(13.2)	7.8	2.5	1/8	1/2		淡褐・精良	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、見込みナデ、底部回転系切 り	
29	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿2A	(9.2)	(4.8)	2.6	1/6	1/8		橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、内外面ス ス付着	

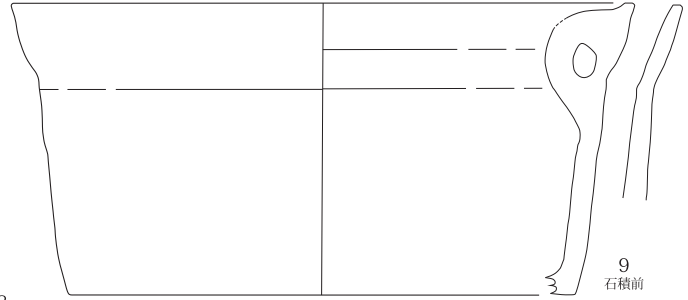
図 No	出土地点			器種		法量 (cm)			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴
	地区	面	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	釉	胎土	
30	5A1	2	南区2面整地土46層	土師質土器	皿2A	9.6	6.4	3.0	2/3	2/4		淡橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り、内外面タール付着
31	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿2A			(1.7)	わずか	わずか		明橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り
33	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿1B			(2.4)	わずか	わずか		褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
34	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿1B	(9.7)				1/8		淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
35	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿1B	(12.6)				1/10		淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
—	5A1	2	南区2面整地土46層	土師質土器	大型皿					わずか		褐・やや粗	ロクロナデ、底部回転系切り、底部片、大型皿
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	皿3					わずか		淡白・精良	ロクロナデ、底部回転系切り、底部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿1A					わずか		褐・やや粗	ロクロナデ、底部回転系切り、底部片
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	皿1B				わずか			茶褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿2B				わずか			橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿3B				わずか			淡白・精良	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、口縁部片
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	皿3B				わずか			淡白・精良	口縁部ヨコナデ、口縁部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿3B				わずか			淡白・精良	ロクロナデ、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿2B				わずか			淡褐・密	口縁部ヨコナデ、口縁部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	皿1				わずか			褐・やや粗	ロクロナデ、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土46層	土師質土器	皿2				わずか			黒褐・密	ロクロナデ、底部回転系切り、底部片
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐	内外面ナデ、小型品、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土52層	土師質土器	内耳鍋				わずか			黒～灰	内外面ナデ、瓦質に近い、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、頸～胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	大型皿				わずか			褐	内外面ナデ、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	内外面ナデ、胴部片
—	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～黒	口縁部ヨコナデ、内面把手貼付・ナデ、頸部片
—	5A1	2	南区2面整地土	土師質土器	内耳鍋				わずか	わずか		暗褐	内面ナデ、底面砂目、底板片
36	5A1	2	南区2面整地土45層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	口縁部ヨコナデ
38	5A1	2	南区2面整地土45層	瓦質土器	火鉢				わずか			黒～灰褐	ヨコナデ、外面突縁+花菱紋押捺+菊花紋押捺
—	5A1	2	南区2面整地土52層	瓦質土器	風炉or火鉢				わずか			黒～灰	内面ナデ・オサエ、外面板目、底板片
—	5A1	2	南区2面整地土	陶器(古瀬戸)	天目茶碗				わずか			灰	ロクロナデ、内外面鉄釉施釉、胴部片
39	5A1	2	西区2面検出面	瓦質土器	風炉				わずか			灰褐～黒褐	ナデ、外面突縁・ミガキ・透かし、肩部片
32	5A1	2	西区2面整地土	土師質土器	皿2A			2.3	わずか			橙褐・密	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転系切り
37	5A1	2	西区2面整地土	陶器(古瀬戸か)	天目茶碗				わずか			鉄釉 茶褐～ 黒褐	暗灰 ヨコナデ、内外面鉄釉施釉
40	5A1		旧表土(近・現代)	須恵器	杯A	(12.0)			1/10			灰褐	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
41	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	皿1B	(10.0)			1/8			暗褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
—	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	皿3				わずか			淡橙褐・精良	ロクロナデ
—	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	皿1				わずか			橙褐・やや粗	ロクロナデ
42	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	口縁部ヨコナデ
43	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	口縁部ヨコナデ
44	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	内耳鍋				わずか			茶褐～暗褐	ナデ、口縁部ヨコナデ、外面スス付着、頸部径19.0cm
—	5A1		旧表土(近・現代)	土師質土器	内耳鍋				わずか			淡褐～橙褐	ナデ、胴部片
g	5A1		旧表土(近・現代)	瓦質土器	風炉or火鉢				わずか			黒灰	内面ナデ、外面ミガキ
45	5A1		旧表土(近・現代)	磁器(青磁)	碗				わずか		青磁 緑	灰白	ロクロナデ、内外面施釉、D2類
46	5A1		旧表土(近・現代)	磁器(青磁)	碗				わずか		青磁 緑	灰白	ロクロナデ、外面雷紋、内外面施釉、C2類
47	5B1		ST3・石列被覆土	磁器(肥前染付)	皿か		(4.7)			1/3	透明	灰白	ロクロナデ、削り出し高台、内外面呉須絵施釉後透明釉施釉、被熱痕あり
48	5B1		ST5～7・中世層	土師質土器	皿3B		(8.0)			1/10		淡白	ロクロナデ、底部回転系切り
49	5B1		ST5～7・中世層	土師質土器	内耳鍋				わずか			茶褐	口縁部ヨコナデ
50	5B1		ST5～7・中世層	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐	口縁部ヨコナデ、内面スス付着
51	5B1		ST5～7・近世層	陶器(連房)	皿		(6.6)			1/8		長石釉 乳白色 厚い	淡灰 ロクロナデ、削り出し高台、内面長石釉施釉、外面底裏・ 髷付以外長石釉施釉、志野・17c初
52	5B1		ST5～7・近世層	陶器(連房)	皿		(8.0)			1/8		長石釉 乳白色 薄い	淡灰 ロクロナデ、削り出し高台、内面鉄絵後長石釉施釉・トチ ン痕、外面底裏以外長石釉施釉、志野織部・17c初
53	5B3		東ST黒色土	縄紋土器	深鉢				わずか			褐～暗灰褐	内面ナデ、外面縄紋 左下がり縦ころがし、胴部片
54	5B3		東ST黒色土	縄紋土器	深鉢				わずか			褐～黄褐	内面ナデ、外面縄紋 左下がり縦ころがし、含繊維、胴部 片
55	5B3		東ST黒色土	縄紋土器	深鉢				わずか			黄褐～灰褐	内面ナデ、外面押型紋(市松紋)、砂粒多含、胴部片
56	5B3		東ST黒色土	縄紋土器	深鉢				わずか			暗褐～黒褐	内面ナデ、外面縦位系統、含繊維、胴部片
57	5B3		東ST黒色土	縄紋土器	深鉢				わずか			橙褐～暗灰褐	内面ナデ、外面縄紋 含繊維、胴部片
58	5B3		東ST黒色土	土師質土器	皿3B				わずか			明橙褐	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ
59	5B3		溝1553	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐	口縁部ヨコナデ
60	5B3		西半近代整地層	須恵器	杯蓋B				わずか			暗灰褐	ロクロナデ、ヨコナデ
61	5B3		西半近代整地層	土師質土器	内耳鍋か				わずか			淡褐・やや粗	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胎土やや粗
62	5B3		西半近代整地層	土師質土器	皿2B				わずか	わずか		淡褐	ロクロナデ、底部回転系切り

5A1 トレンチ

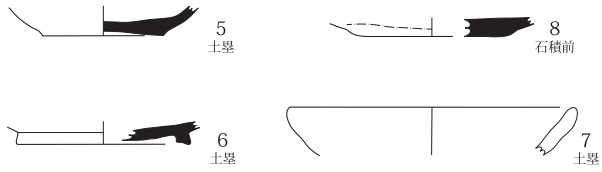
5面 (1~4)



3面中 (8~9)



4面 (5~7)



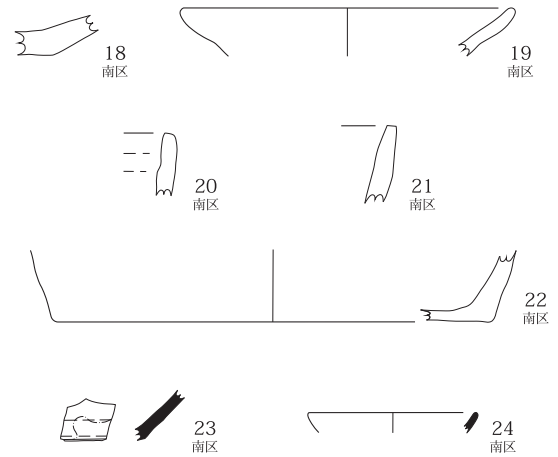
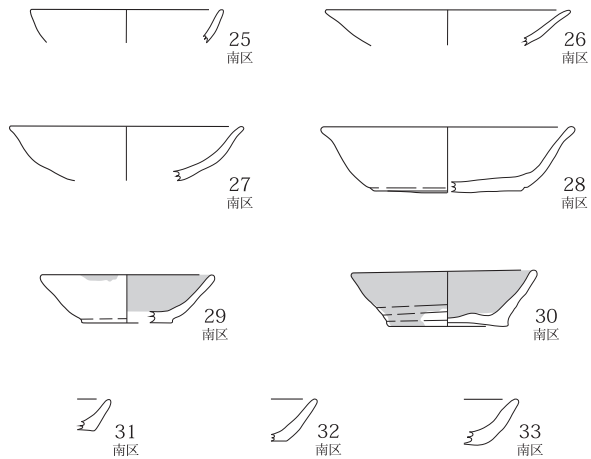
2"面 (12~24)



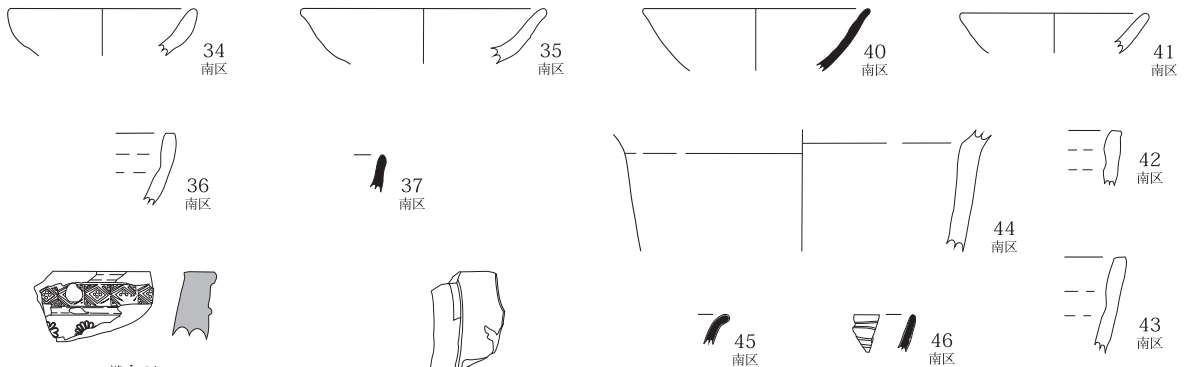
3面新 (10~11)



2面 (25~39)



旧表土 (近現代) (40~46)

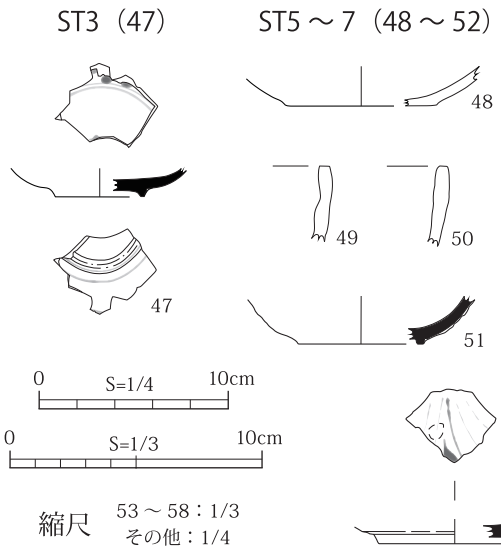


拓影 (38) のみ S=1/3

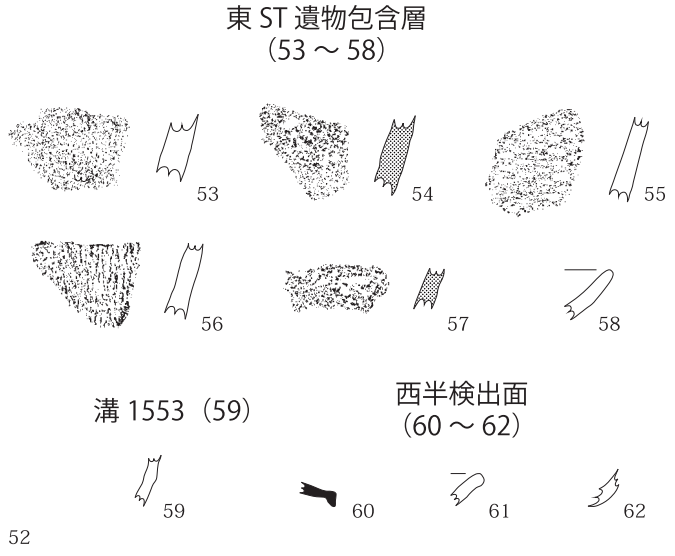
0 S=1/4 10cm

第16図 焼物 (1)

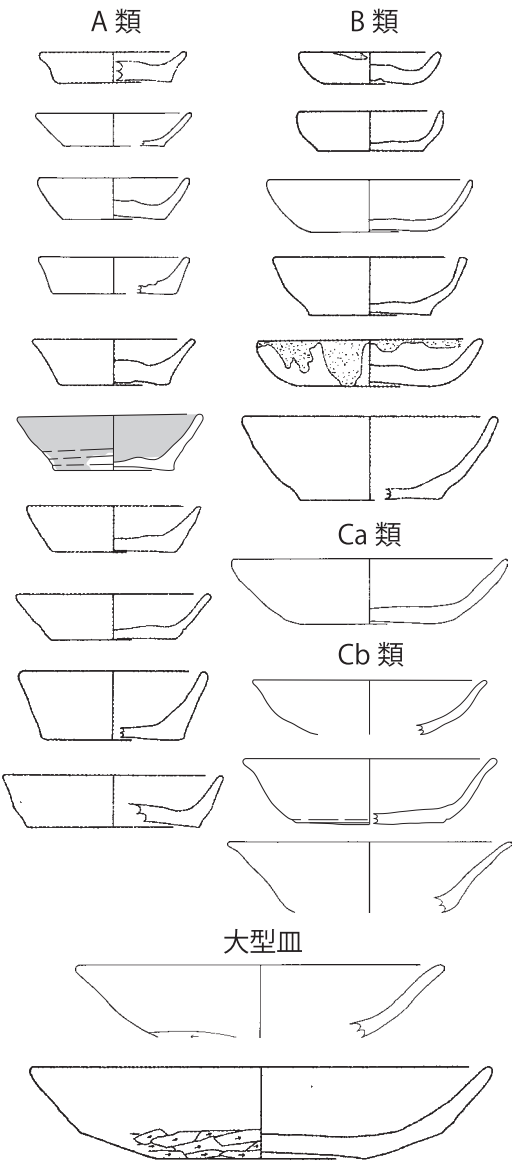
5B1 トレンチ



5B3 トレンチ



第 17 図 焼物 (2)



第 18 図 土師質土器皿の器形分類

第 5 表 土師質土器皿の群・類組み合わせ

	A類	B類	Ca類	Cb類
1群	43	86	26	3
	27.2	54.4	16.5	1.9
2群	47	56	3	4
	42.7	50.9	2.7	3.6
3群	2	55	0	37
	2.1	58.5	0.0	39.4

上段：破片数 (1A+2A+5A) 下段：割合 (%)

第 6 表 焼物の器種・器形別破片数集計 (5A1 トレンチ)

器種	器形	破片数		割合 (%)	
		破片数	割合 (%)	破片数	割合 (%)
土師質土器	皿	1群	14	18.7	52.0
		2群	14	18.7	
		3群	11	14.7	
	大型皿	1群	4	5.3	
	内耳鍋		15	20.0	
土師質土器	搦鉢・捏鉢				77.3
瓦質土器	搦鉢		4		5.3
	風炉・火鉢	4	4	5.3	5.3
炆器 (常滑・珠洲・越前等)	搦鉢		1		1.3
	甕・瓶類	1	1	1.3	1.3
陶器 (東海系無釉)	山茶碗		1		1.3
	捏鉢	1	1	1.3	1.3
陶器 (古瀬戸・大窯)	天目茶碗	3		4.0	9.3
	他碗・皿・小鉢類	3		4.0	
	盤	1		1.3	
	卸皿				
	瓶子類				
青磁	碗・皿類	3	3	4.0	4.0
	その他				
白磁	碗・皿	1	1	1.3	1.3
	瓶子類				
青花	碗・皿類				5.3
	天目茶碗				
舶載陶器	茶壺				5.3
合計			75		100.0

2 石器・石製品 (第7表、第19図)

今回の調査では、合計69点の石器・石製品が出土した。器種の内訳は、硯6点、石鉢1点、砥石1点、有孔石製品1点、石鏃1点、小形刃器5点、横刃形石器1点、二次加工ある剥片1点、微細剥離ある3点、剥片14点、石筆29点、石板1点、数珠1点がある。これらのうち定型的な石器・石製品を中心に15点を図示し、概要を記す。それ以外のものは一覧表を参照されたい。また、近代以降の遺物である石筆と石板、数珠の詳細については、紙面の都合上割愛した。

硯(1~5) すべて破損品で、被熱破碎と考えられるものも含まれる。1の平面形は、外側が長方形で、内側が楕円形を呈し、側面はほぼ垂直に立ち上がる。2は、遺存状態が悪く、側面と落潮部が部分的に観察できる。3~5は、裏面の一部が残っているのみである。

石鉢(6) 縁部のみ残存し、さらに2個体に割れていた。外面は整形痕がかろうじて確認できる程度で、縁部上面も平坦になるように整形したと思われる。

砥石(7) 縁辺も使用されており、多角形状の断面をもつ。欠損部分が大きいが、少なくとも砥面は2面確認できる。石材は凝灰岩で、粒子の大きさから、中砥に分類されるであろう。出土層位から、縄紋時代から中世まで幅広い時期で想定したい。

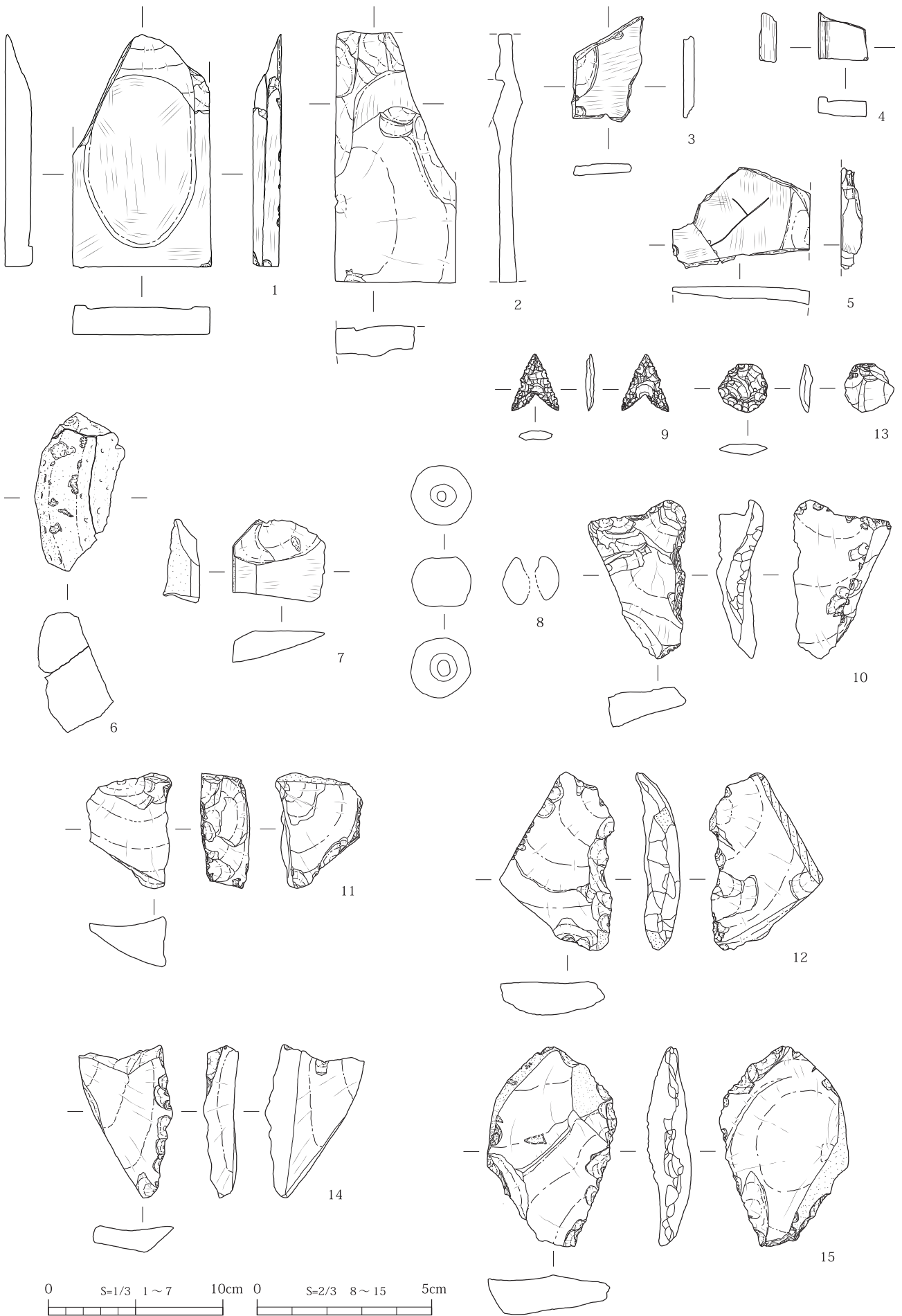
有孔石製品(8) 直径は1.7cm程度で、厚さ1.48cmで、孔径は0.7cmである。石材は、白色で粗粒の変成岩のようにみえ、非常にもろい石質である。装飾品の類と思われるが、不明である。

縄紋石器(9~15) 9は、二等辺三角形の無茎凹基鏃である。側縁の一か所が強い打撃のせいか抉れがみられる。小形刃器は、刃部の角度から細分でき、搔器3点(10~12)、削器2点(13・14)がある。15は、横刃形石器である。横長剥片を素材にし、刃部とは反対側には自然面が残る。

第7表 石器・石製品一覧

図 No.	注記 No.	器種	地区	検出面	遺構名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	破損状況	備考
	8	剥片	5A1	2面	整地土46層	黒曜石	28.5	15.5	7.2	1.6		
	9	剥片	5A1	2面	整地土53層	黒曜石	16.3	5.3	4.1	0.3		
	12	剥片	5A1	2面	整地土10層	チャート	24.8	17.8	3.8	1.7		
1	1	硯	5A1	3面新	整地土34層	粘板岩	(133.1)	(79.7)	(16.2)	(275.7)	1/4欠損	平面形は外・長方形、内・楕円形
2	2	硯	5A1	3面新	整地土33層、No.48	粘板岩	(143.6)	(70.6)	(18.7)	(170.3)	2/3以上欠損	平面形は外・長方形
3	3	硯	5A1	3面中	整地土35層、No.51	頁岩	(60.0)	(39.1)	(5.8)	(17.8)	側面・裏面の一部のみ残	側面が外斜する
	4	微細剥離ある剥片	5A1	3面中	整地土39層	黒曜石	14.9	25.5	5.9	1.4		
	10	二次加工ある剥片	5A1	5面	溝	黒曜石	25.9	16.5	5.7	2.2		
13	5	削器	5A1	5面	整地土96層	黒曜石	13.8	13.0	3.3	0.6		
	6	剥片	5A1	旧表土	97層	黒曜石	13.9	10.8	4.4	0.5		
8	7	有孔石製品	5A1	旧表土	97層	不明	17.4	17.1	14.8	5.8		
6	19	石鉢	5B1			安山岩	(69.2)	(87.8)	(36.4)	(212.0)	2/3以上欠損	
14	24	削器	5B1		中世遺物包含層	細粒砂岩	27.6	43.8	8.8	8.2		
10	22	搔器	5B1		中世遺物包含層	珪質頁岩	32.5	53.3	10.6	17.7		
	21	剥片	5B1		中世遺物包含層	黒曜石	16.0	7.9	3.3	0.4		
	23	剥片	5B1		中世遺物包含層	珪質頁岩	25.7	30.4	9.2	8.0		
	20	微細剥離ある剥片	5B1		中世遺物包含層	黒曜石	21.3	16.9	4.0	0.9		
4	17	硯	5B1			粘板岩	(26.9)	(27.6)	(10.1)	(10.1)	側面・裏面の一部のみ残	
11	14	搔器	5B1			珪質頁岩	24.6	29.8	14.3	11.5		
12	15	搔器	5B1			珪質頁岩	26.3	43.9	9.4	9.9		
	18	剥片	5B1			チャート	13.9	11.5	3.9	0.6		
	16	剥片	5B1			黒曜石	17.0	11.0	5.6	0.8		
	26	微細剥離ある剥片	5B3		溝1553	黒曜石	23.6	14.4	8.1	1.6		
7	28	砥石	5B3		縄紋~中世遺物包含層	凝灰岩	(45.0)	(55.6)	(15.3)	(39.9)	2/3以上欠損	
	29	剥片	5B3		縄紋~中世遺物包含層	黒曜石	15.5	8.7	6.2	0.8		
	30	剥片	5B3		縄紋~中世遺物包含層	黒曜石	20.8	11.3	4.0	0.7		
	31	剥片	5B3		縄紋~中世遺物包含層	チャート	33.1	22.3	4.8	5.0		
	32	剥片	5B3		縄紋~中世遺物包含層	チャート	27.3	20.3	8.3	4.4		
5	35	硯	5B3		近世~近代整地層	頁岩	(53.0)	(78.9)	(10.4)	(48.6)	側面・裏面の一	
	66	硯	5B3		近世~近代整地層	粘板岩	(66.4)	(45.1)	(7.4)	(34.8)		
9	69	石鏃	5B3		近世~近代整地層	黒曜石	16.2	13.7	2.5	0.2		無茎凹基鏃
15	33	横刃形石器	5B3		近世~近代整地層	頁岩	114.7	71.0	24.2	201.8		
	67	剥片	5B3		近世~近代整地層	珪質頁岩	23.2	18.9	8.0	4.0		
	68	剥片	5B3		近世~近代整地層	黒曜石	19.4	12.0	2.6	0.6		

※ ()内数値は現存値を表す。



第19图 石器・石製品

3 木製品（第8表、第21～23図）

今回出土した木製品は総数 355 点である。その内訳から特筆されるのは、齋串状木製品が 165 点、短冊状板が 101 点を数え、両者を合わせると全体の 75%を占めている点である。次いで端材・削屑といった木製品製作過程で発生するものが目立つ。逆に生活用品をみると折敷 3 点、曲物底板が 1 点みられるのみで、これらは全体の 0.01%にすぎない。4 次までの各調査においても下駄、折敷、漆器椀、曲物等の底板あるいは蓋が出土しているが極めて少なく、1%にも満たない。このような出土傾向は特異と言わざるを得ない。例えば本遺跡周辺では、近世松本城下町の発掘においてゴミ穴等から下駄や漆器その他の生活用品が多量に出土している。羽子板や独楽といった遊戯具まで内容は多彩で、城下町という遺跡の性格をよく表している。

中世における状況は、同時代の絵巻物等の史料から曲物の器や挽物・削物の椀（漆器含む）といった食器類が豊富な様子が窺え、実際に多彩な木製品が出土する遺跡は全国的に数多くある。一方、上に述べた本遺跡における生活用具をほとんど欠くという器種の偏在状況は、これまで出土した遺物の大半が石積前空間からであることに起因している可能性が高く、遺構の性格を示唆するものとして重視すべき点といえよう。

こうした状況を踏まえ、以下に今回出土した各木製品について、器種毎に概観していきたい。

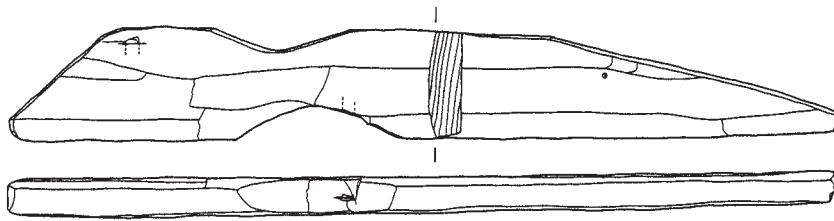
齋串状木製品（1～32） 1 は板材で裏面に折れが 2 か所あるが完形品であり、特に先端を鋭く尖らせている点から祭祀具の齋串と推定した。2～32 の 31 点については、前回 4 次調査の報告において祭祀具としての齋串状木製品と定義したものである。出土点数は全体の 46%を占める殿村遺跡の代表的な遺物である。今回はこれらの整形技法について触れてみたい。齋串状木製品を作る工程としてまず薄板の木端を割る作業がある。それによって細い角材ができるが、その外周を削り整形し棒状に作り出し、断面が楕円形あるいは不整楕円形になるものがある。これをⅠ群とする。典型的なものとしては 3・8・11・13・18・26・27 等があげられるが、今回は形のいびつなものも含めておく。今後さらに細分される可能性がある。

次に角材のままほとんど削りを加えない細板のようなものがあり、断面はほぼ長方形となる。これをⅡ群とする。典型的な例としては 21・29・30 等があげられ、これらは先端部が残っており串状に尖らせてあることが分かる。また 15 のように断面が台形になるものも今回はⅡ群に含めてある。やはり今後細分される余地がありそうである。齋串状木製品の加工が大きく二つに大別される理由は明確ではない。中世においては 14 世紀の『福富草紙』にみられるように、齋串（幣串）を作る工人がいたことが知られるが、本遺跡にみられる二者が工人による違いによるものなのか、あるいは古代にみられるように、使用する集団によって違うものか、今後 1 次調査で出土した多量の齋串状木製品を含めて分類・検討していく必要がある。

なお、齋串状木製品は頭部が残るものが少ないため分類は難しいが、今回出土品には 2・15・22 のように切り落としによって水平に加工するもの、3 のように頭部も丸く削られるもの、25 のように頭部に向かって先細りさせ切落としするものなどが認められる。

鳥形木製品（33） 木製祭祀具として、1 次調査で刀形木製品、4 次調査で馬形木製品が出土しているが、今回調査では鳥形木製品が出土した。側面から見た様子を模したものである。左側が頭部でくちばし状に先端を加工している。右が尾を表現している。鳥を模造した木製品は弥生時代から見られ、その段階では立体的かつ写實的に製作されている。古墳時代に入ると平板な胴体に平板な羽を接合させる平面的なものがある。33 の特徴は腹部に該当する木端の中央に切り込みが入っている点である。これは祭祀の場に刺し立てる木製の串（いわゆる鳥竿）を挿入するためのものである。この形態はきわめて古代的で、長野県では千曲市（旧更埴市）屋代遺跡群に類例がある。比較のため第 19 図に 7 世紀後半の例を掲載した（註 1）。33 に比べて大型で厚い板で製作されている。首と思われる部分が削り込まれくびれた状態になっており、そこに串を装着する切り込みが認められる（註 2）。33 はこの流れをひくものと推定される。

短冊状板（34～61） 全体の 28%を占める出土数の非常に多い木製品である。いわゆる木筒状に成形さ



第20図 古代の鳥形木製品

れたもので、まれに墨書がある。木口は切落としが主で、47・48・52・55・62は側面削りが施されている。また52のように木口一端が切り折りされている例もある。表面と裏面の区別はつけがたいが、37のように片面に細かな削り調整が行われるものがあり、表面を意識している場合がある。なお53は側面に一对の切欠きが施されており荷札木簡の形状をしている。

短冊状板について規格性を見出すことは難しいが、やはり木口の切断方法や表面の削り調整の有無等がポイントになる。また一つの可能性として残るのが斎串状木製品の素材としての板である。厚さがあり、ある程度長さのある板の中で、木端が割りっぱなしのものにはこの素材が含まれる可能性がある。

折敷(64・65・72) 64は側板をのせた痕跡があり、表面に一部赤漆が残る、ほぼ正方形の折敷の底板である。65は木口が一部残るのみであるが側板の設置痕が認められる。表面に一部黒漆が付着している。やはり底板と推定される。72は四隅が切られ八角形となる折敷である。表裏に黒漆が塗られ器の内面には赤漆を施している。木質部はほとんど残らないが漆が厚く、丁寧に作られた高級な折敷と思われる。

端材(66～70) 66・68は何らかの部材の一部を切り取ったものと思われ、66には柄状の加工がある。また68は図中左側面からほぼ中央部まで鋸で刻んだ跡が残る。67は手斧あるいは鑿で削られたもので刃先痕と刃物側面の刃端痕が残る。69は角材の端材で鋸によって切断されたものである。各所に加工痕が残る。70は板材の端材で鋸によって切断されている。周辺で木材加工が行われていた様子を窺うことができる。

曲物底板(71) いわゆるクレゾコの底板で、側面外周に側板をまわし木釘で止めるものである。木釘痕が残り、本遺跡で曲物底板と断定できるものはこれが初めての出土である。

4 土製品・金属製品(第23図)

(1) 土製品(1～3)

2面整地土から出土した鞆羽口である。1は溶壁が付着する根元部分で、半径は出ないが最大部分で7.5cmを計る。通風孔までの厚さは3.7cmである。2は体部破片である。表面に気泡状の滓が薄く付着する。3も破片であるが体部表面がきれいに残り、通風孔までの厚さは2.8cmである。

(2) 金属製品(4～10)

4は2面整地土から出土した鉄片である。鍋等の製品の断片の可能性もあるが詳細は不明、重量は5.7gある。銭は6点みついている。5・6は5A1トレンチの出土である。5は皇宋通宝で初鑄年は1039年、6が元豊通宝で初鑄年は1078年である。7～10は5B3トレンチの近世末～近代の整地土から出土した近世の銭である。8は寛永通宝、7・9・10は文久永宝である。

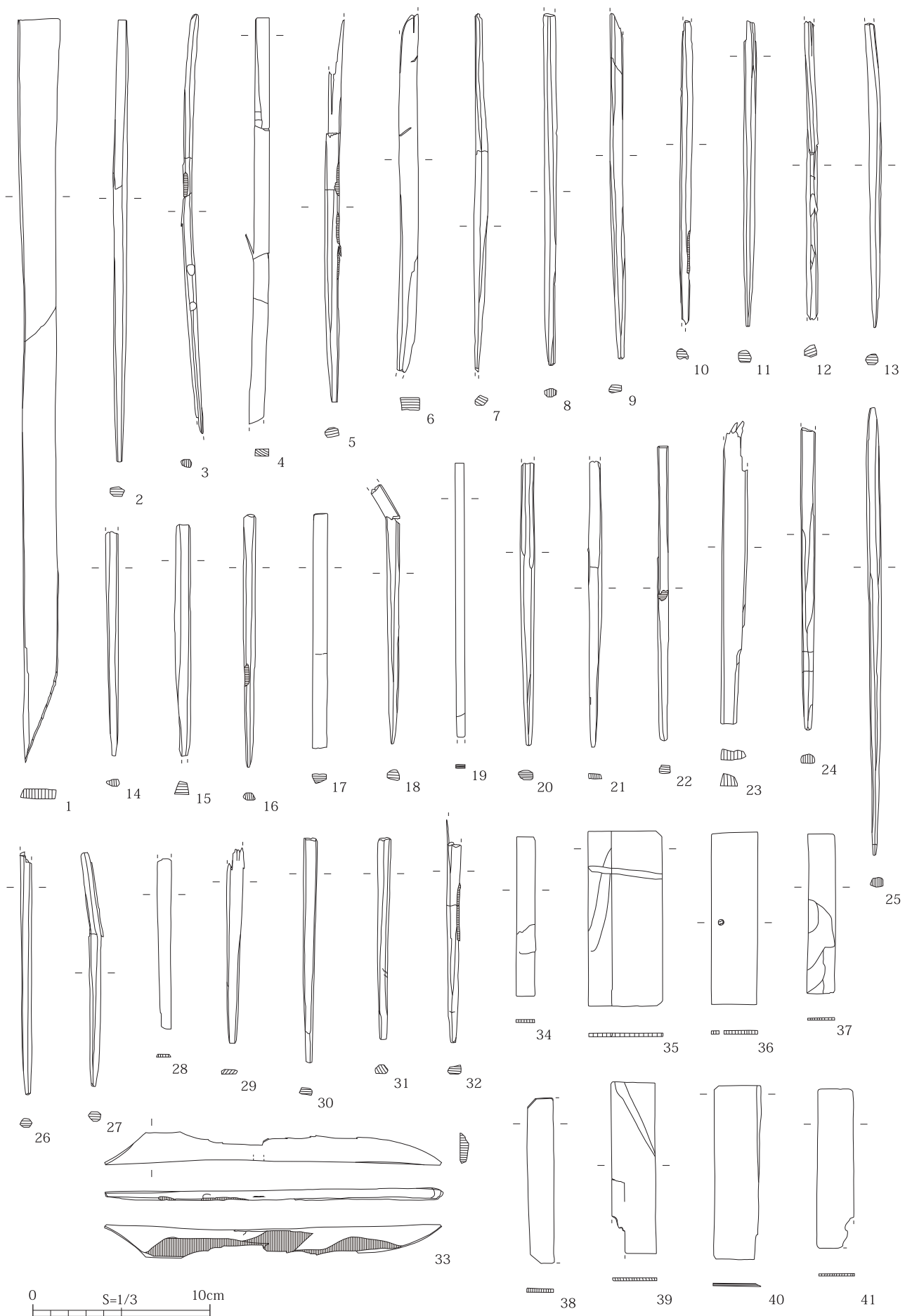
<註>

- 1 (財)長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴市内その5 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編 図版』図版416
- 2 この木製品を鳥形と判断するにあたっては、故金子裕之氏より教示を得た。

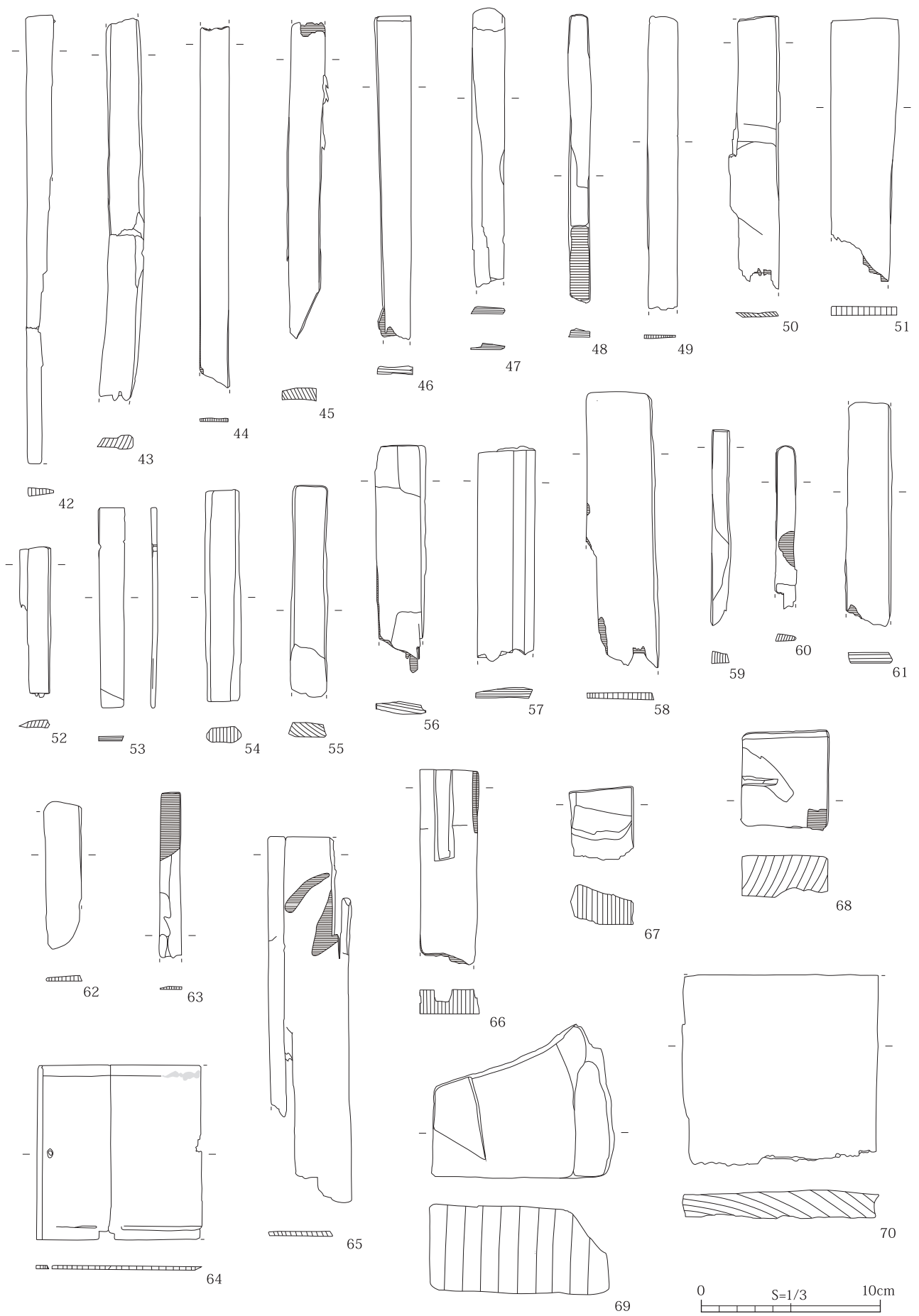
第8表 木製品一覧

図No	地区	出土地点	出土層	整理番号	器種	手法	寸法 (cm)			備考
							長・口径・底径	幅	厚・高	
1	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	171	斎串状木製品	板材 (柎目)	42.00	2.40	0.60	木口切落とし・片側斜めに切落とし/裏面に折れ2か所
2	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	041	斎串状木製品	棒材 (削出)	24.85	0.80	0.50	I群/木口切落とし/ほぼ完形だが折れがある
3	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	055	斎串状木製品	棒材 (削出)	23.60	0.60	0.50	I群/ひびと折れがある/表面削り痕
4	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	037	斎串状木製品	棒材 (板目)	22.90	0.80	0.40	II群/木口一端切落とし/割れ・折れあり/表面加工痕あり他割りっぱなし
5	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	056	斎串状木製品	棒材 (削出)	21.60	0.90	0.55	I群/先端切落とし/折れ1箇所
6	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	166	斎串状木製品	棒材 (板目)	20.20	1.10	0.70	II群/裏面刃物による割れ/刃物によるキズ・削り痕
7	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	046	斎串状木製品	棒材 (削出)	20.20	0.80	0.55	I群/折れがある
8	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	039	斎串状木製品	棒材 (削出)	19.80	0.70	0.50	I群/木口一端切落とし
9	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	051	斎串状木製品	棒材 (削出)	19.50	0.75	0.50	I群/先端切落とし/ひびが1箇所
10	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	047	斎串状木製品	棒材 (削出)	17.20	0.70	0.60	I群/裏面ほぼ欠損
11	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	054	斎串状木製品	棒材 (削出)	17.25	0.70	0.70	I群/木口切り・切落とし
12	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	058	斎串状木製品	棒材 (削出)	16.80	0.70	0.70	I群/折れ1箇所/表面削り痕多数
13	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	040	斎串状木製品	棒材 (削出)	17.20	0.70	0.60	I群/頭部やや欠損
14	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	042	斎串状木製品	棒材 (削出)	12.65	0.70	0.40	I群/木口一端切落とし
15	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	162	斎串状木製品	棒材 (板目)	13.10	0.90	0.80	II群/木口一端切落とし/木端削り痕・圧痕/表面加工痕
16	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	043	斎串状木製品	棒材 (削出)	14.30	0.70	0.40	I群/ほぼ完形と思われる
17	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	165	斎串状木製品	棒材 (板目)	13.30	0.80	0.50	II群/木口一端切落とし/折れ/木端・裏面に削り痕多数
18	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	049	斎串状木製品	棒材 (削出)	14.60	0.80	0.60	I群/折れがある/表面先端部削り痕多
19	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	028	斎串状木製品	板材 (板目)	15.50	0.50	0.30	II群/木口一端切落とし/表裏面削り痕
20	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	052	斎串状木製品	棒材 (削出)	15.90	0.80	0.50	I群/頭部切落とし/完形か
21	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	057	斎串状木製品	棒材 (柎目)	16.20	0.80	0.30	II群/表面加工痕あり
22	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	044	斎串状木製品	棒材 (柎目)	16.60	0.60	0.50	II群/木口表裏から平面削り/折れがある
23	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	164	斎串状木製品	棒材 (柎目)	17.10	1.45	0.70	II群/木口一端切落とし (刃物痕) /木端先端に向かい細く削っている
24	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	050	斎串状木製品	棒材 (削出)	17.50	0.85	0.50	I群/ひびが2箇所
25	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	045	斎串状木製品	棒材 (削出)	25.20	0.80	0.55	I群/木口切落とし/ほぼ完形品/表面刃物痕あり
26	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	048	斎串状木製品	棒材 (削出)	13.70	0.60	0.50	I群/先端切落とし
27	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	059	斎串状木製品	棒材 (削出)	13.26	0.70	0.55	I群/木口一端切り/折れ2箇所
28	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	033	斎串状木製品	板材 (柎目)	9.60	0.80	0.18	II群/木口切落とし・側面削り
29	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	153	斎串状木製品	棒材 (柎目)	11.00	0.90	0.30	II群/木端に削りあり
30	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	053	斎串状木製品	棒材 (板目)	12.70	0.80	0.40	II群/木口切り・切落とし
31	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	152	斎串状木製品	棒材 (削出)	11.35	0.70	0.50	I群/木口切落とし/刃物キズあり
32	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	151	斎串状木製品	棒材 (削出)	11.40	0.80	0.50	I群/折れ・ひびあり
33	5A1	西区ST3	3面新段階堆積層 (39層)	001	鳥形木製品	板材 (柎目)	19.10	1.70	0.50	木口一端鋭利な加工一端山型に加工/腹部に串 (鳥竿) の挿入痕あり。
34	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	032	短冊状板	棒材 (削出)	9.00	1.05	0.20	木口切落とし/折れ2箇所/裏刃物痕
35	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	036	短冊状板	棒材 (削出)	9.85	4.20	0.20	木口切落とし角斜めに切落とし/表面圧痕/表裏削り痕/2つに割れる
36	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	009	短冊状板	板材 (柎目)	9.70	2.60	0.20	両木口切落とし/穿孔あり (釘2回刺している)
37	5A1	西区ST1	3面新段階堆積層 (39層)	030	短冊状板	板材 (柎目)	9.00	1.60	0.15	木口切落としと側面削り/表面削り痕

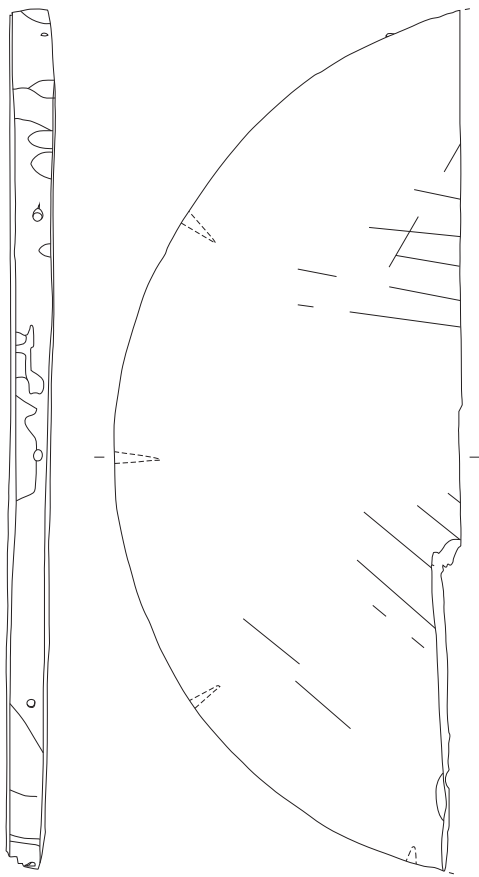
図No	地区	出土地点	出土層	整理番号	器種	手法	寸法 (cm)			備考
							長・口径・底径	幅	厚・高	
38	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	018	短冊状板	板材 (柁目)	9.40	1.50	0.25	両木口切落とし角斜めに切落とし/表裏調整あり
39	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	011	短冊状板	板材 (柁目)	9.70	2.50	0.16	両木口切落とし/表面圧痕あり/表裏調整あり
40	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	010	短冊状板	板材 (板目)	9.80	2.65	0.16	両木口切落とし角斜めに切落とし/表裏調整あり
41	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	024	短冊状板	板材 (柁目)	9.00	2.10	0.15	木口切落とし
42	5A1	西区	3面新段階堆積層 (35層)	014	短冊状板	板材 (柁目)	25.10	1.60	0.50	木口切りと切落とし/木端調整あり
43	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	006	短冊状板	板材 (柁目)	21.30	2.00	0.80	前面割りっぱなし/折れあり
44	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	007	短冊状板	板材 (柁目)	20.10	1.50	0.20	ごく薄い加工
45	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	157	短冊状板	板材 (柁目)	17.60	2.00	0.70	木口一端斜めに切落とし/木端と裏面刃物による削り痕多数
46	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	158	短冊状板	板材 (板目)	18.00	2.05	0.50	木口一端切落し (2段) /木端先に向かい細く削られている/裏面に刃物痕
47	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	155	短冊状板	板材 (板目)	15.50	1.85	0.40	木口平面削りで側面削り/木端先端部細く削られている・削り痕と圧痕
48	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	168	短冊状板	板材 (板目)	16.10	1.20	0.40	木口側面削り・平面削り/表面刃先痕・削り痕
49	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	023	短冊状板	板材 (柁目)	16.40	1.70	0.20	木口一端側面削り/表面と木端一端加工調整される
50	5A1	西区	3面新段階堆積層 (35層)	015	短冊状板	板材 (斜め)	15.20	2.80	0.20	木口一方切落とし一方欠損/木端割りっぱなし/表面中ほどから削りを入れる
51	5A1	西区	3面新段階堆積層 (35層)	012	短冊状板	板材 (柁目)	14.70	3.80	0.50	木口一端切落とし/木端一端斜めに加工
52	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	161	短冊状板	板材 (柁目)	8.40	1.70	0.45	木口一端切落し側面削り/一端切り折り
53	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	026	短冊状板	板材 (板目)	11.18	1.48	0.25	木口切落とし/木端刃物痕と圧痕/表面薄く削り痕/木端の一端に切り込み
54	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	022	短冊状板	板材 (柁目)	11.80	2.00	0.90	木口一端切落とし/木端両側から削り
55	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	005	短冊状板	板材 (斜め)	11.90	2.10	0.80	木口一端側面削り/木口欠損部方向に表面を削る
56	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	159	短冊状板	板材 (板目)	12.70	2.90	0.80	木口一端切落し/表裏削り加工あり
57	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	156	短冊状板	板材 (板目)	12.00	3.20	0.60	木口切落とし/表面山型
58	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	021	短冊状板	板材 (柁目)	15.40	3.90	0.40	木口一端切落とし
59	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	034	短冊状板	棒材 (柁目)	10.90	1.10	0.70	木口切落とし・削り/表面削り痕あり/先端薄く削りナイフ状に
60	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	035	短冊状板	板材 (柁目)	9.10	1.10	0.40	木口一端側面削り/表面に錆付着
61	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	004	短冊状板	板材 (板目)	12.50	2.70	0.60	表面と木端一端調整/他割りっぱなし
62	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	027	短冊状板	板材 (柁目)	8.20	2.10	0.30	木口切落とし角丸く加工/木端加工調整
63	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	025	短冊状板	板材 (柁目)	9.25	1.25	0.17	木口切落とし/表面削り痕
64	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	020	折敷底板	板材 (柁目)	9.80	9.20	0.20	木口切落とし/2つに割れる/穿孔が2あるが片側は欠損/回りには枠の圧痕が残る/穿孔の外側にひも？痕がある/一部朱が残る (漆か)
65	5A1	西区	3面新段階堆積層 (35層)	016	折敷底板	板材 (柁目)	10.40	4.50	0.30	木口一端切落とし/枠との接合痕あり/表面黒漆がかけてあるが一部はがれる/2個に割れる
66	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	017	端材	板材 (柁目)	10.90	3.30	1.35	木口一端切落とし/上面に四角い切込み/木端の一部に圧痕
67	5A1	西区NW	3面新段階堆積層 (39層)	019	端材	板材 (柁目)	4.10	3.60	1.90	木口一端切落とし一端刃物による削り/刃先痕・刃端痕が残る/2段に削られている
68	5A1	西区NE	3面新段階堆積層 (39層)	003	端材	板材 (柁目)	5.70	4.90	2.40	木口一端平面削り、一端切落とし/上面中央に鋸挽き痕/表面刃端痕/木端両面加工調整あり
69	5A1	西区	3面新段階堆積層 (39層)	169	端材	角材 (柁目)	4.90	10.20	8.60	木口鋸挽き (刃端痕あり) 斜めに削られている
70	5A1	西区ST4	3面古段階石積B2基盤土 (70層)	029	端材	板材 (板目)	10.70	11.00	1.60	木口一端鋸挽き
71	5A1	西区ST 1	3面新段階堆積層 (39層)	170	曲物底板	板材 (板目)	34.10	13.90	1.70	縁に釘穴5箇所あり。うち1箇所木釘 (折損) /表面刀キズ
72	5A1	西区	土塁法面 (17層)	355	折敷	板材	18.90	10.15	2.20	黒漆塗、表面朱漆塗布/木質部分ほとんど残らず



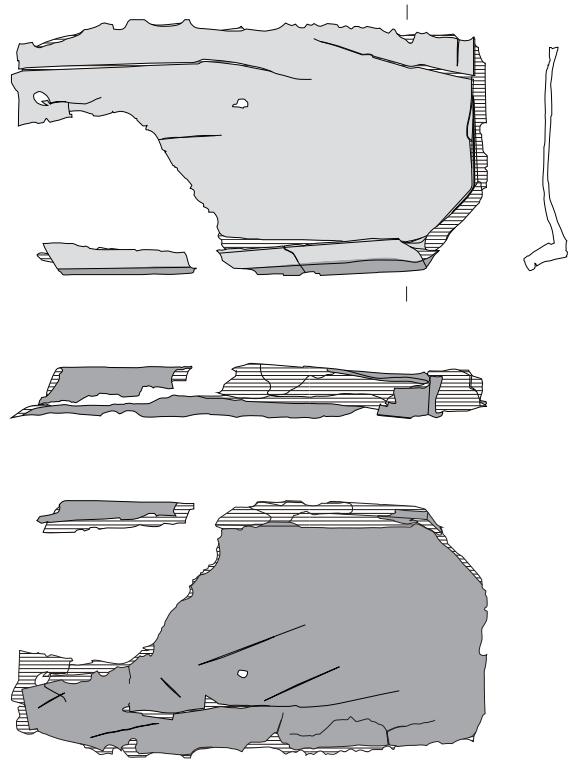
第21図 木製品 (1)



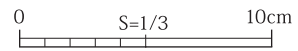
第22図 木製品(2)



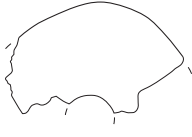
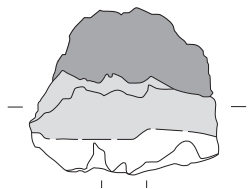
71



72



土製品・金属製品



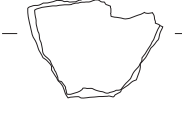
1



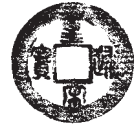
2



3



4



5



6



8



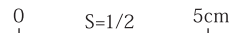
7



9

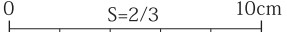
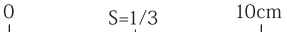


10



縮尺

1~3 : 1/3
4 : 1/2
5~10 : 2/3



第 23 図 木製品 (3)・土製品・金属製品

第三章 第5次調査のまとめ

調査のまとめにあたり、まずは第二章3節の続きとして焼物の様相についていまだ少し分析を加え、そのうえで今次調査を中心に明らかになったいくつかの点をまとめておきたい。

1 殿村遺跡における焼物の様相

(1) 土師質土器皿について

ア 胎土による群別について

土師質土器皿について、前章では製品の質に着目し、初めに胎土及び胎土と密に関わる固有の技法から1群～3群に大別した。そのうえで器形を4類に区分し、組み合わせを把握した。

松本平における中世土師質土器皿の研究は、長野自動車道建設に係る松本市内の島立遺跡群等一連の調査の総括(野村1990)以降やや停滞している感がある。とりわけ今回対象となるロクロ成形の土師質土器皿が再登場し内耳鍋が出現する中世後半期については、これまで城館跡や寺院遺跡等の大規模調査が少なかったうえに、良好な資料の出土にもあまり恵まれなかったことも加わって、地域における分析がほとんど進まなかったというのが実情であろう。

こうした状況下、本遺跡の一連の調査において、15世紀代を中心に当地域としては比較的多くの焼物が得られることとなった。これらの資料群は、残存状況こそ決して良好ではないものの、在地産土器を中心に今後地域の土器様相を解明するうえで基準資料の一つにもなり得るものであり、また殿村遺跡の性格究明にも資するものである。今回、その出発点として最も普遍的に出土する皿について基礎的な分類作業を行ったが、まずは土器群を大局的に捉えることを主眼としたため、実施した分類は非常に大雑把なものであり、またさらなる細分の余地も残した点はお断りしておきたい。

さて、第二章でも述べたように、皿の胎土にみられる差は製品の階層を示していると考えたが、それは同時に生産地あるいは工人の違いをも内包しているものなのか、非常に興味深いところである。今回、1次調査出土品を観察するなかで、この点に関わる注目すべき資料が見つかったので最初に報告しておきたい。

第24図に示す2点の皿は、左のものが4面整地土内、右が1面整地土出土のものである。ともに胎土の特徴は白色で砂粒を全く含まない極めて精良な3群の特徴を示し、内面は非常に平滑な調整がなされている。しかし、これらを裏返して底面を観察すると、驚くことに内面とは全く状況が異なり、橙色を呈し若干の砂粒を含む2群に含むべき素地が張り付いている。特に写真左側のものは胴部中位近くまで及んでいる。断面を観察すると2種類の胎土が張り合わさった状況が如実に見て取れる。ここで明らかに言えることは、一つのロクロ上で2種類の素地が使用されていたということである。これはおそらく2群の素地を土台にし、その上に3群の素地を据えたうえで皿の製作が行われたのであろう。通常は3群の素地の中で成形され回転糸切りによって切り離されるべきところが、上記2例はたまたま底部の成形の際に土台である2群の素地まで挽き上げてしまったため、結果的に一つの個体の中で2種類の素地が合わさってしまった、偶発的な産物と考えられよう。

他にも橙色と白色の素地がマarmor状に混ざり合っている資料も確認しており、これらのことから少なくとも2群と3群は一つのロクロ上で、つまり同じ工房において同じ工人によって種類ごと作り分けが行われていたことが考えられる。一方、1群と2・3群の関係は不明だが、1群は大型皿とともに、むしろ内耳鍋との共通性が強く窺える。現時点では断定的な見方はできないものの、少なくとも1群と内耳鍋、上級品の2・3群からなる2系統の生産と供給が存在していた可能性も考え得る。

これについて検証するためには、周辺遺跡出土資料との比較が欠かせない。残念ながら本報告段階ではなし得なかったが、唯一同時期かつ城館あるいは宗教関連遺跡として性格の似通う林山腰遺跡出土資料（註1）について、過去の整理作業で抽出されたものを観察した結果、やはり同じ3群からなる胎土のあり方を確かめられたので以下に観察結果を示す。あわせて比較のため、殿村遺跡についても併記する。

林山腰遺跡 1群 19点・54.3%、2群 6点・17.1%、3群 9点・25.7%、大型皿 1点・2.9%

殿村遺跡 1群 320点・39.5%、2群 287点・35.1%、3群 172点・21.2%、大型皿 31点・3.8%

このデータから、両遺跡とも1群を主体に3群と大型皿の割合をほぼ同じくする傾向で一致する。一方異なる点は、2群の割合が殿村遺跡で2倍程大きいことである。2群の動向については今後他遺跡でも確認すべき点の一つといえようか。いずれにしても、殿村遺跡にみられる3群構成を適用できる遺跡が他に存在することが判明した。今後集落遺跡等も含め幅広い資料を収集し、時期的推移等も含めて検討を加えたい。

イ 皿のサイズ分布について

今回、口径・器高の判明する皿について、計測値のグラフ化を試みた（第25図）。全体的には、口径6.9cm～13.4cm・器高1.5～3.4cmの間に大きなまとまりがあり、それに加えて、少数だが口径13.4cm～14.8cm・器高3.3～4.4cmにも分布を認める。さらに今回区別した口径17cm～24cmの大型皿が加わる（註2）。前者のまとまりを時期別に分解して観察すると概ね4サイズに分かれる傾向が看取され、これに大型皿も含めた2サイズを加えて以下の6つのサイズを認めることができる。なお、1群の胎土に固有の大型皿とⅡ-2を除く他のサイズは各群ともに存在する。

I 口径：6.9～8.2cm 器高：1.5～2.2cm 胎土：1群～4群

Ⅱ-1 口径：8.2～10.8cm 器高：1.8～2.8cm 胎土：〃

Ⅱ-2 口径：9.9～11.2cm 器高：3.0～3.4cm 胎土：1群・2群

Ⅲ 口径：11.1～13.4cm 器高：2.3～3.5cm 胎土：1群～4群

Ⅳ 口径：13.4～14.8cm 器高：3.3～4.4cm 胎土：〃

大型皿 口径：17.8～24.2cm 器高：3.4～4.8cm 胎土：1群

次に、時期別分布をグラフに示した。その構成は以下のとおりである。時期によって存在しないサイズがあり、たまたま計測可能な資料がないだけの可能性もあるが、破片識別の明瞭な大型皿は3面段階以降しか見られないし、身の深いⅡ-2は2面段階以降からみられる点を指摘できる。

4面段階 I・Ⅱ-1・Ⅲ・Ⅳの4サイズがみられる。

3面段階 I・Ⅱ-1・Ⅲ・大型皿の4サイズがみられる。

2面段階 I・Ⅱ-1・Ⅱ-2・Ⅲ・Ⅳ・大型皿の6サイズがみられる。

1面段階 I・Ⅱ-1・Ⅱ-2・Ⅲ・大型皿の5サイズがみられる。

ウ その他

皿の使用目的を明確に表すものに灯明皿がある。観察を行った皿の総数649点中、確認できたものは80点（12.3%）であった。これを群別にみると、1群：321点中48点（15.0%）、2群：289点中24点（8.3%）、3群39点中8点（20.5%）であり、なぜか精製品における比率が高い点が気になるものの、群に関係なく一定量存在することが確かめられた。

なお、灯明に供された皿の特徴は、厳密に見れば口縁端部を中心にタールが付着するものと、主に内面に煤状の炭化物が染み込んだように付着しているものに分けられ、使用法の違いを示していると考えられるが、現段階では詳細な観察は行っていない。また、大型皿においても31点中3点に煤状の炭化物が付着したも

のが認められたことも付記しておく。

(2) 殿村遺跡における器種・器形の構成について

焼物の様相について、今後松本市域周辺や他地域との比較検討をするうえで必要となるデータとして、中世陶磁器で一般的に用いられる方法に従い、これまでに蓄積された焼物の破片すべての分類とカウントを実施した。その結果が第9表である（今次調査5A1トレンチの結果は第II章第6表に示した）。

今回はデータの提示にとどまるが、一見して指摘できる点についてのみいくつか列記しておきたい。また、古瀬戸・大窯製品や貿易陶磁を指標にした各段階の帰属時期について、いまだ不鮮明ではあるが、現時点における見解を最初に提示しておく（註3）。

ア 各段階と帰属時期

5面段階	～15世紀前半?	(山茶碗・無釉陶器捏鉢、ロクロ成形土師質土器皿あり)
4面段階	～15世紀第3四半期	(古瀬戸後期I～IV新段階伴う、内耳鍋ほとんどない)
3面段階	(15世紀第3四半期)	(後期IV伴う・大窯なし、内耳鍋少ない・A類あり)
2面段階	～16世紀第2四半期	(大窯1～2段階前半伴う、内耳多い)
1面段階	～16世紀第4四半期	(青花端反皿B1・B2群伴う、内耳多い)

イ 焼物の構成についての主な特徴

- ① 4面～1面の各段階を通じて在地産土器、とりわけ土師質土器が主体を占める。4面段階では75%以上あり時期の下降とともにその比率を高め1面段階には90%近くに達する。
- ② 土師質土器内耳鍋は4面段階では皆無に等しいが、古手のA類を伴う3面段階に増加し、2面段階以降倍増する。これは内耳鍋の出現から主要煮炊具として定着する過程を物語っているものか。
- ③ 皿は一貫して1群が主体を占めるが、3群は4面段階以降、時期の下降とともに比率を高め顕在化していく。これは京都系皿への志向等、遺跡の性格にも関わってくる事象といえよう。
- ④ 土器以外すなわち搬入品である瓦質土器の風炉、炆器、陶器及び貿易陶磁の比率は、4面段階：22.9%、3面段階：12.0%、2面段階：14.6%、1面段階：11.0%である（註4）。
- ⑤ そのうち、貿易陶磁は各段階を通じて3%前後で、内訳は以下のとおりである。

4面段階	青磁：42.8%	白磁：42.8%	青花：0.0%	舶載陶器：14.2%
3面段階	青磁：66.7%	白磁：0.0%	青花：0.0%	舶載陶器：33.3%
2面段階	青磁：66.7%	白磁：22.2%	青花：0.0%	舶載陶器：11.1%
1面段階	青磁：50.0%	白磁：10.0%	青花：30.0%	舶載陶器：10.0%

数量が少ないため一概にいえませんが、各段階ともに貿易陶磁の主体は青磁で、半数から2/3を占めている。白磁がこれに次いで多いが、1面段階では青花の出現とともに逆転している。各段階を通じて舶載陶器（天目茶碗・茶壺）が一定量存在する。
- ⑥ 捏鉢及び播鉢は5面段階では無釉陶器が見られ、2面段階まで在地産須恵質・土師質・瓦質が、また3面段階以降古瀬戸播鉢が加わり主体化するが全体的に量は少ない。これに関連して4面段階以降に石鉢が少数みられる。材質に関わりなく播鉢類は石臼とともに量的には目立たない傾向にある。
- ⑦ 瓦質土器の風炉、古瀬戸・大窯産天目茶碗・茶壺、舶載陶器の天目茶碗・茶壺など、茶道具が4～1面の各段階にみられる。これに搬入品の土物の茶臼が加わる（2・1面段階）が、目下のところ茶入は未確認である。茶道具の存在は、殿村遺跡の性格を示唆する重要な要素であろう（註5）。

比較として、先に取り上げた林山腰遺跡についてはまだ数量的なデータは取得していないが、一見したところでは残存状況が良好なためか、殿村遺跡に比べ古瀬戸・大窯製品や貿易陶磁が目立っている。また时期的には幅が狭く、殿村遺跡資料の3面ないしは2面段階頃の良好な一括資料群ではないかと考えられる。

以上、焼物における諸データを提示し特徴を整理した。これらのデータについては今後点検を進めた後、最終的には事業終了時の総括報告書において提示することになる。その時点で内容が修正される可能性があることをお断りしておく。また、データのうち2次調査以降のものについては各報告書に観察表を掲載しているが、1次調査分については概報という性格上掲載していない。本来、すべての情報を提示したうえで行うべき作業であるが、時間と紙幅の都合で今回なし得ないため、総括報告書において実現したい。

2 第6次調査のまとめ～Aゾーン平場南面の変遷を中心に（第25図）

殿村遺跡の範囲・内容確認を目的とする今次調査により明らかになった点について、とりわけ石積と土塁に規定された石積前空間の推移を中心に、以下に列記して調査のまとめとする。

- ① Aゾーン平場南面の石積Aに相對し、石積前空間の南を画する4面段階土塁は、さらに調査範囲より東に延びており、石積B2・B3の手前（西側）で切れて虎口状に出入口になっているのではないかと当初想定とは異なる結果となった。
 - ② 従って、石積A・B1に直交する3面段階の南北石積B2・B3は土塁に後行し、4面の窪地状地形面（一段低い平場）を埋め立てに伴い、石積前空間東部を閉塞する役割を果たした。
 - ③ 3面段階において、石積前空間は南北石積B2・B3構築以後も改修が続き、平場側（北側）からの廃棄を伴う堆積（水成及び人為）により次第に狭まり、底面レベルも上昇していく。やがて石積A及び東西石積B2が半ば埋没した段階＝3面新段階において、スロープ状の埋め立て前面に築かれた石積Fと土塁間のわずかな空間だけが掘割状の施設としての最後の姿となり、その後2面段階の平場拡張により一気に埋め立てられその使命を終える（註6）。
 - ④ これまで判然としなかった1次Fトレンチ・2次2A1トレンチの石列13・集石2は、石積前空間の縦断セクション（Aトレンチ）を検討した結果、石積Fと同時期すなわち3面新段階に伴う遺構であることが判明した。この段階の石積前空間に関わる何らかの構造物であったと考えられる（第5図）。
 - ⑤ 石積前空間は、少なくとも南北石積B2・B3の構築に伴う空間の閉塞以後、元々地下水位の高い1次Fトレンチから5A1トレンチ付近において相当期間水が溜まっていたことは、堆積状況や木製品の存在から間違いないであろう。石積F背後に意図的に配され、地上に露出していた巨礫（石1・2）のあり方から見れば、3面段階における石積前空間は、池とそれに臨む岸辺のような景観を想定できないだろうか。
- ただし、仮に寺院等に付属する池を想定したとしても、高台にある平場の最前面に接してこのような施設を構えることの意味は何か、また、15世紀末の短い期間になぜこれだけの改修を加える必要があったのか、平場の全体構造を分析する中から考えていかななくてはならない。
- ⑥ この空間の埋没過程において様々な遺物がもたらされているが、今回あらためて追認した点は、焼物がほとんど出土しないこと、硯が伴うこと、木製品に一般的な食器等の生活用具が極めて少なく、代わって齋串状木製品や短冊状板、端材ばかりが目につくこと、少量ながら形代が伴うことで、祭祀関係の道具を中心に極めて偏った状況を呈していることである。
 - ⑦ 焼物はむしろ土塁南空間に量的な比重があり、土師質土器皿を中心に土塁南側の埋め立土からの出土量が多い。とりわけ3群とした京都系志向の精製品は土塁南空間から多く出土する傾向を認める。これは2次2A1トレンチと傾向を一にする（註7）。

- ⑧ 2面段階において、土塁南空間は埋め立てが進行し、最終的にスロープ状の斜面が形成される。今回の調査では初めて平場2面が連続する整地面が確かめられた。また、2次2A1トレンチでの所見と合わせ、埋め立ては一气に行われずいくつかの段階を経ていることが判明している（註8）。
- ⑨ スロープ状の斜面は調査区外南側においてどのような展開となるのか。南接するゲートボール場付近まで掘削した1次Fトレンチでもその末端は確認されていない。この点については、ゲートボール場のある地形面での遺構確認とともに今後の課題である。

これまでの調査で、Aゾーンに広がる平場の外郭構造がある程度明らかになってきた。昭和28年のグラウンド造成により調査面が非常に深いうえ、湧水と脆い土壌により現場の保全が難しいこと、一旦現地保存が決定した遺跡ゆえの調査上の制約から毎回の調査面積は限られ、未だ平場の全体像を明らかにするまでには至っていないが、周辺部における遺構分布範囲の把握とともに、一歩ずつながら成果は確実に上がりつつあるのではないかとと思う。ちなみに遺跡範囲確認では、今回遺跡南部の旧会田小学校周辺で中世造成層の存在を確認するなどの成果を得ている。

事業期間も後半となり、いま一度当初の目的を振り返ってブレのない調査を心がけるとともに、これまでの成果に対する総括も進めなくてはならない。現在置かれたこのような状況も踏まえながら今次調査を振り返り、その反省点を次の調査につなげていきたい。

最後に、毎年調査実施にあたりいつも惜しむことなくご理解・ご協力をいただいた近隣をはじめとする地元住民の皆様、関係機関、そして炎天の夏から厳冬期までの長丁場、手掘り主体の過酷な作業に対し、わずかな手勢にも関わらず献身的に調査に当たっていただいた調査メンバー全員に感謝の意を表して本報告の結語としたい。

<註>

- 1 未報告資料である。林山腰遺跡は、信濃守護小笠原氏の本城である林大城の麓に位置し、遺跡を含む一帯は15世紀代に井川館から移ったと伝わる小笠原氏の林館の推定地であり、また現在の林集落は城下集落としての町割が名残をとどめている。平成14年度に大規模な調査が行われ、大型礎石建物跡が複数検出されたE地区からは、大窯1期の端反皿他一括資料（15世紀第3四半期）が得られる等、15世紀第3四半期～16世紀第1四半期を中心とする在り地製品、古瀬戸・大窯製品、貿易陶磁（青磁・白磁・青花）が出土している。これらは林館やそれを取り巻く関連遺構に関わる可能性が高く、とりわけ礎石建物跡に隣接して「真観寺」の字が見られることから、寺院との関係も窺える。従って、時期的にも遺跡の性格的にも殿村遺跡との比較検討に相応しい遺跡といえる。現在、林館移転以前の居館推定地である井川城跡でも発掘調査が進められており、15世紀中葉を主体とする資料が得られている。
- 2 大型皿については、福井県大月前山遺跡や一乗谷朝倉氏遺跡等越前の事例から、居館跡やその周辺に出土が限られ、酒盃としての用途が想定されるという（阿部来氏教示・阿部2012）。林山腰遺跡を除き他遺跡の事例については実見の機会を持たないが、例えば長野市前山田遺跡において7類としたものが該当すると思われる（市川隆之1999）。観察所見に従う限り胎土は本遺跡3群の特徴を有する精製品であり、成形手法の違いはあるが形態的には大月前山遺跡例に近い。一方、殿村・林山腰例は1群の胎土で厚手品だが、底部外周を削って大きく開く器形を志向する点では前山田遺跡例と似通う。ちなみに報告書を参照する限り、大型皿は北信の高梨氏館跡や栗田城跡出土品には見当たらず、居館跡に固有かどうかは別にして、長野県内でも遺跡によって出土傾向に差があるように見える。遺跡の性格に関わる遺物の一つとして、今後出土傾向について注視していきたい。
- 3 各段階は、該当する面の遺構・検出面出土品に加え、その面を構成する整地土中の遺物まで含めている。本来厳密に区別すべきものであるが、遺構や検出面に帰属する資料数が極めて少数のため、このような括り方をしている。従って、各段階で括った資料群には、前段階以降当該遺構面での活動終了までの時間幅を有していることになる。
- 4 搬入品の炆器は、珠洲が少量認められる他はほとんどが常滑等の東海製品であるとの浅薄な理解を抱いていたが、これらの中に越前の可能性があるものが4点程存在することを赤沢徳明氏・阿部来氏による実見のなかで指摘を受けており、検討が必要である。

- 5 城館遺跡等、中世遺跡の階層と茶道具の出土傾向については、水澤幸一氏による論考がある（水澤 2009 所収「中世北陸の茶道具」「中世後期における瓦器の位相」）。ちなみに本遺跡を単純に当てはめた場合、国人領主以上のクラスに匹敵する内容になるだろうか。なお、本遺跡の瓦質土器における色調は黒・灰色系と赤褐色系の両方が存在し、前者が主体をなす。また、林山遺跡では一瞥した限り国産天目茶碗以外の茶道具は見当たらないことを指摘しておく。
- 6 石積 F が構築された段階においては、石積 A 及び石積 B2（東西）は埋め立てが進み露出していなかったと考えられる（第 26 図参照）。1 次調査において、石積 A は東半部（1 次概報で c～e に区分した範囲）において天端が崩れている状況が観察された。今回調査範囲の石積 B3 も同様で、これは人為的に築石が取り外された可能性も含め、4 面～3 面段階の一連の改修過程において生じたものと考えられる。
また、従来の解釈どおり、石積 A 西半部の b に区分した範囲の石積は、石積 B2 あるいは B3 の構築に連動して 3 面段階に積み直されたものと考えている。
- 7 土塁南空間における土師質土器皿の構成比率は以下のとおりである。
- | | | | |
|----------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 2A1 トレンチ | 1 群： 12 点 (41.3%) | 2 群： 7 点 (24.1%) | 3 群： 10 点 (34.5%) |
| 5A1 トレンチ | 1 群： 10 点 (33.3%) | 2 群： 10 点 (33.3%) | 3 群： 10 点 (33.3%) |
| A ゾーン全体 | 1 群： 320 点 (41.1%) | 2 群： 287 点 (26.8%) | 3 群： 172 点 (22.1%) |
- 8 土塁南空間の埋め立について、2 面の築造当初には完了していたのか、あるいは 2 面における活動の間に段階的に埋め立てが進行したのか、いずれかの解釈が可能であるが、2 次調査において土塁南側に繰り返しテラス状の小平坦面が構築された状況等も鑑みて、後者の可能性が高いと解される。

<参考文献>

○焼物の器種分類（記号）は以下の文献に拠った。

【古代の土器】

小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 総論編』

【土師質土器内耳鍋】

市川隆之 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』9

【瓦質土器風炉】

水澤幸一 2009 「中世後期における瓦器の位相」『日本海流通の考古学』

【青磁碗】

上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2

【古瀬戸・大窯】

藤沢良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 輯

2008 『中世瀬戸窯の研究』

○その他、焼物の分類・年代観等については以下の文献を参考とした。またこれまでに、調査指導委員の小野正敏氏・水澤幸一氏をはじめ、赤沢徳明氏・阿部来氏・市川隆之氏・河合君近氏・降矢哲男氏に実見していただいた。

阿部 来 2012 「白山平泉寺旧境内と中世後期越前の土器・陶磁器」『中近世土器研究』24

小野正敏 1982 「14～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 2』

1985 「出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素描」『MUSEUM』416

原 明芳 1995 「各地の土器様相—中部」『概説中世の土器・陶磁器』

野村一寿 1990 「中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 総論編』

水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学』所収の各論考

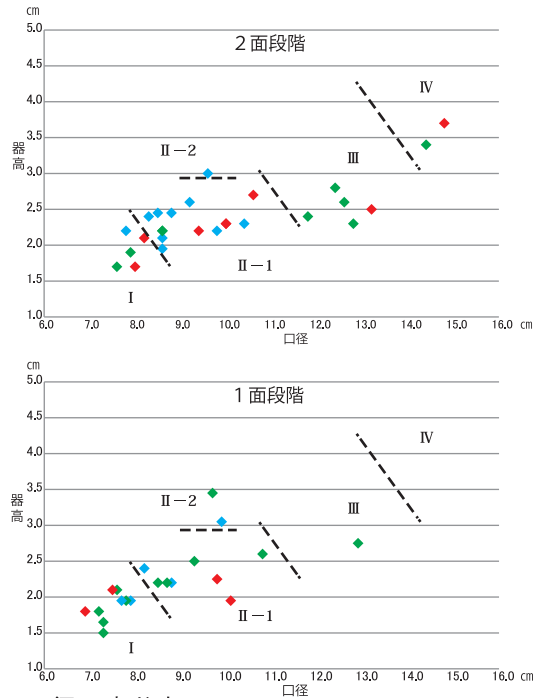
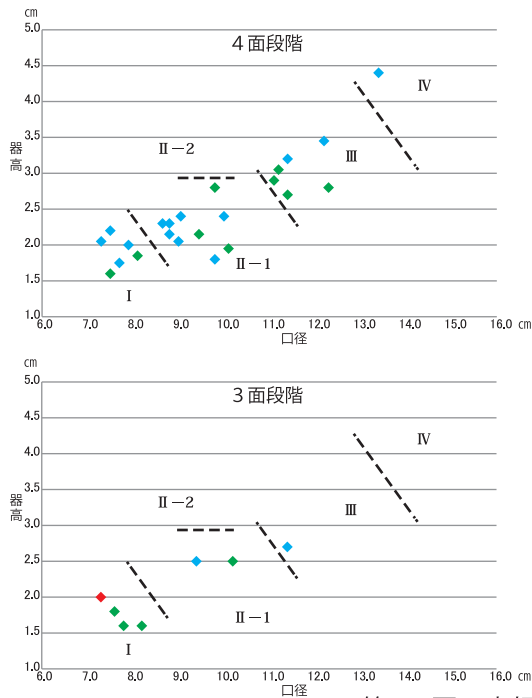
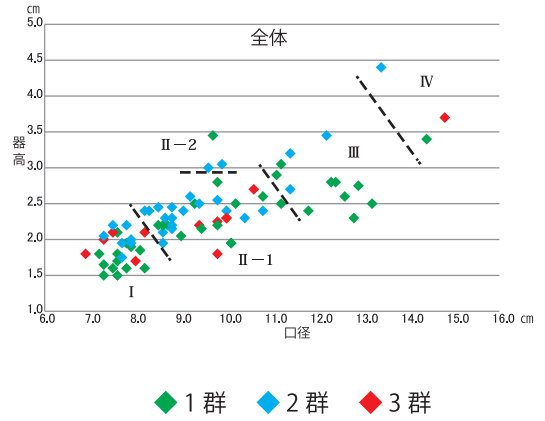
2014 「戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像～十五世紀中葉—十六世紀中葉を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』182

森田 勉 1982 「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2

横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について～型式分類と編年を中心にして～」『九州歴史資料館研究論集』4



第24図 2種類の胎土が観察される皿



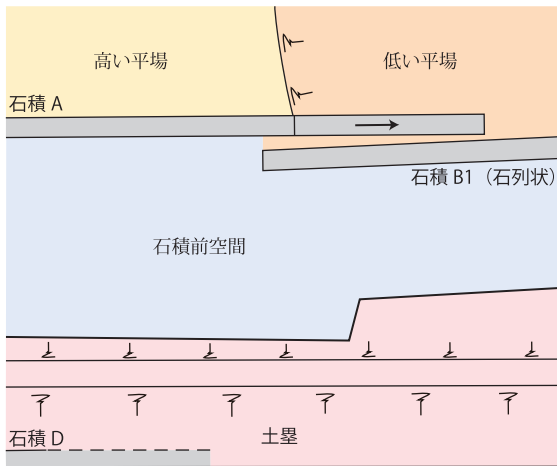
第25図 土師質土器皿の径・高分布

第9表 焼物の器種・器形別破片数集計 (Aゾーン全体)

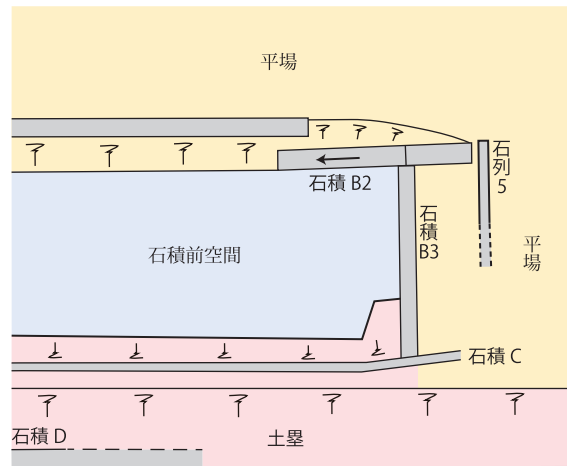
器種	器形	5面		4面		3面		2面		1面		
		点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	
土師質土器	皿	1群	4	16.7	42	22.3	51	26.7	74	24.6	100	28.3
		2群	8	33.3	76	40.4	57	29.8	52	17.3	66	18.7
		3群	8	33.3	16	8.5	23	12.0	44	14.6	60	17.0
	大型皿	1群		50.0		76.1		87.4		84.7		88.7
	内耳				7	3.7		25	13.1		73	24.3
柘器 (在地産須恵器)	搦鉢・捏鉢			2	1.1		6	3.1		4	1.3	
	搦鉢・捏鉢	2	8.3	2	1.1				1	0.3	1	0.3
瓦質土器	搦鉢					1	0.5		1	0.3		
柘器 (常滑・珠洲・越前等)	風炬・火鉢			3	1.6				8	2.7	4	1.1
	搦鉢											
柘器 (常滑・珠洲・越前等)	甕・瓶類	4	16.7	8	4.3	4	2.1	3	1.0	6	1.7	
	山茶碗	1	4.2									
陶器 (東海系無釉)	捏鉢	3	12.5	3	1.6	2	1.0	1	0.3	1	0.3	
	搦鉢											
陶器 (古瀬戸・大瀬)	天目茶碗			5	2.7	4	2.1	6	2.0	3	0.8	
	碗・皿・小鉢類			5	2.7	1	0.5	7	2.3	6	1.7	
	盤	1	4.2	9	4.8	3	1.6	3	1.0	5	1.4	
	鈎皿			2	1.1			3	1.0	1	0.3	
	瓶子類	1	4.2	1	0.5	2	1.0					
青磁	搦鉢					1	0.5			4	1.3	
	碗・皿類			3	1.6	4	2.1	6	2.0	5	1.4	
白磁	その他					4	2.1		6	2.0	5	1.4
	碗・皿			1	0.5			2	0.7	1	0.3	
青花	瓶子類			2	1.1							
	碗・皿類									3	0.8	
舶載陶器	天目茶碗			1	0.5	2	1.0			1	0.3	
	茶壺							1	0.3	1	0.3	
合計		24	100.0	188	100.0	191	100.0	301	100.0	353	100.0	

対象：Aゾーン (1A・2A1・3A1・4A1・5A1)

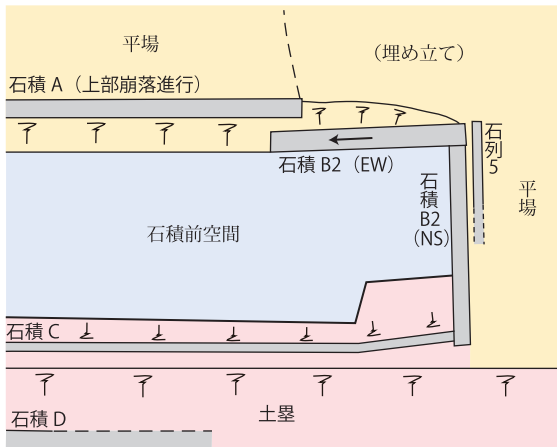
石積前空間の変遷 (4面段階～3面新段階)



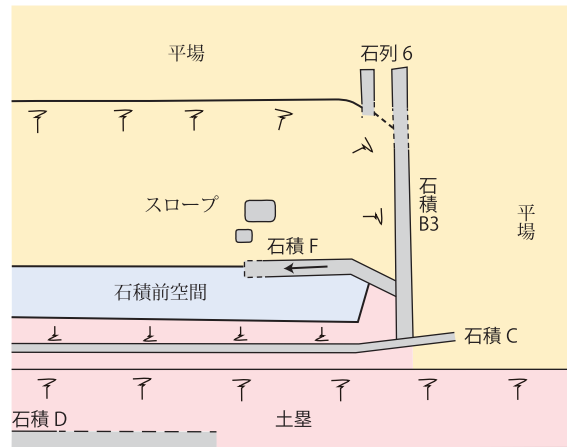
① 4面段階



③ 3面中段階



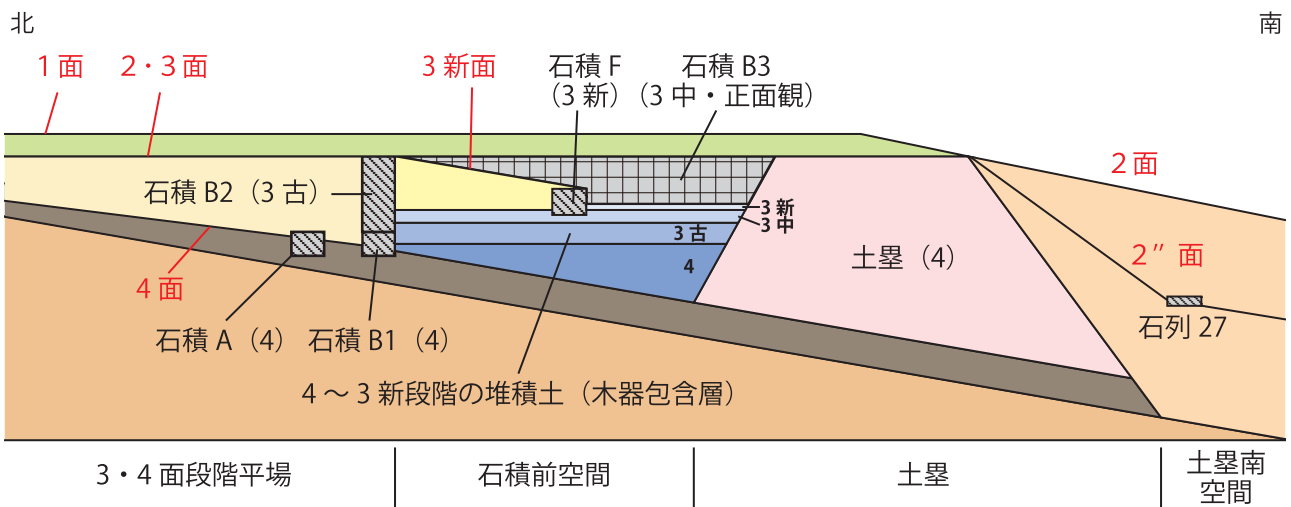
② 3面古段階



④ 3面新段階

※石積内の矢印は天端の傾斜を示す(低←高)

石積前空間周辺の断面構造



第26図 石積前空間の変遷と断面構造



調査地の位置と周辺の地形 (S = 1/2500)



5A1 トレンチ全景（北東から）



同上 西区全景（南から）



西区西壁土層断面 (D—D')



西区ベルト土層断面 (E—E')



ST4 西壁土層断面 (G—G')



石積 B2・ST4 東壁土層断面 (H—H')



西区北壁東部土層断面 (C - C' 東部)



石積 B3・ST5 東壁土層断面 (A - A' 部分)



南区 5 面ピット群 (南から)



石列 26 (東から)



南区土塁・石積 B2・B3・C 完掘状況 (西から)



土塁南空間 27 面石列 27 (西から)



西区石積前空間 35 層 曲物底板 (71) 出土状況 (南から)



西区土塁北法尻 碓 (2) 出土状況 (南から)



西区土壘法面 折敷 (72) 出土状況 (E-E' 部分)



石積前空間 39 層 木製品 (66) 出土状況 (南から)



西区石積 F 東半部・石積 B3 完掘状況 (南西から)



石積 B3 完掘状況 (西から)



5B1 トレンチ全景 (北から)



5B1 トレンチ ST5 中世ピット群 (東から)



5B1 トレンチ ST4 中世礎石と近世石列 (南から)



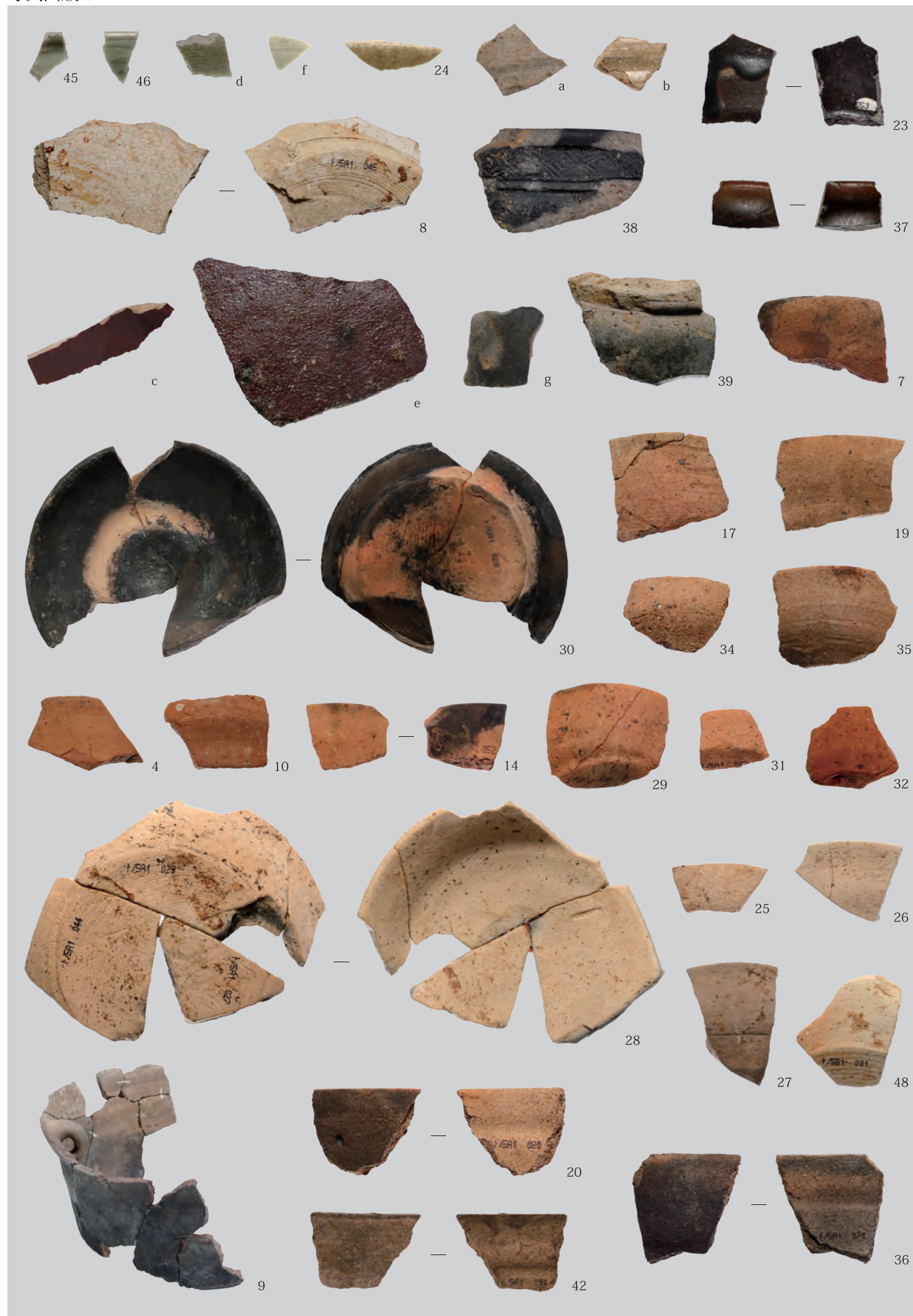
5B3 トレンチ 溝 1553 (北から)



5B2 トレンチ全景 (北西から)



5B3 トレンチ全景 (西から)



焼物 (9以外 S = 1/2、Noは実測图中的の番号に同じ)



石器・石製品・土製品 (1～7 : S = 1/3、8～15 : 2/3、羽口 1～3 : S = 1/2、No.は実測図中の番号に同じ)



木製品・金属製品（木製品：S = 1/3、金属製品：S = 1/2、No.は実測図に同じ）



作業風景



現地説明会



殿村遺跡第5次発掘調査団



報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしとのむらいせきだい5じはっくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市殿村遺跡第5次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.220							
編著者名	伊藤 愛、竹原 学、原田健司、宮島義和							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代)							
	(記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2015(平成27)年3月25日(平成26年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
とのむらいせき 殿村遺跡	ながのけん 長野県 まつもとし 松本市 あいだ 会田 536外	20202	1023	36度 21分 11秒	137度 59分 34秒	20130924 ～ 20140116	118㎡	範囲内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
殿村遺跡	散布地 集落跡 社寺跡 城館跡	縄紋	なし		土器・石器・石製品			
		古代	なし		土師器・黒色土器・須恵器			
		中世	ピット	21基	土師質土器(皿・大型皿・内耳			
			礎石	1基	鍋)、炆器(常滑甕)、瓦質土器(
			溝状遺構	1基	風炉・火鉢)、陶器(無釉陶器捏			
			石積	4基	鉢、古瀬戸・大窯天目茶碗、縁釉			
石列	1基	小皿、盤、播鉢他)、磁器(青磁碗						
土塁	1基	白磁碗・皿類)						
近世・近代	ピット	4基	石器・石製品(硯・石鉢)					
	土坑	2基	木製品(折敷・鳥形・齋串状・短					
	溝状遺構	2基	冊状板・曲物底板・端材)					
	石列	1基	土製品(羽口)、金属製品(不明					
				鉄片・銭)				
要約	殿村遺跡調査事業に係る中世を対象とした遺跡の範囲内容確認調査として、5回目の実施となるもの。1次調査で検出された中世の平場遺構南部(5A1トレンチ)からは、整地された5面の遺構面が検出され、1次調査で検出された平場前面の石積と相対する土塁に挟まれた石積前空間が、3面段階で石垣を伴う改修を3回受けた後、2面段階の平場拡張に伴って埋め立てられた状況が捉えられた。これと連動し、土塁南側の埋め立ても進行した状況を捉えた。今回新たに確認調査を行った5B1～5B3トレンチでは、5B1トレンチにおいて中世の整地層及び遺構の存在が確認され、中世の遺構分布範囲が遺跡範囲の南限まで拡大することが判明した。また、旧会田小学校敷地に幕末まで存在した補陀寺あるいは明治6年に廃寺を利用して開校した思誠館に関わる遺構・遺物も出土するなど、今後の調査の指針を得た。							

松本市文化財調査報告No.220

長野県松本市

殿村遺跡

—第5次発掘調査報告書—

発行日 平成27年3月25日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社